第廿一年第一號
一月一日發行

中央公論

新年號

THE CENTRAL REVIEW

明治三十一年一月二十九日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

自今中央公論に掲載の廣告は本社に於て一層の精査を遂げ確實なるものにあらざれば其需めに應ぜぬことにいたし候間本誌廣告を見て御注文の各位は御安神あらむことを御吹聽申上候

一月一日

反省社廣告係

恭賀新正

毎々御用命被仰付難有奉鳴謝候弊堂一手取扱ひいたし來り候中央公論印刷部數の義も近來頓に增加仕り現に本號の如きは最近の倍數以上に登り随て二月一日發行の分より廣告料金割引値段の引上げの止むを得ざることゝ相成候に付此段從來の御得意各位に稟告仕候也

追て廣告の功は從前に倍する筈に御座候間一層の御引立あらむことを本希候

中央公論一手廣告取扱

神田區千代田町一番地
電話本局百四十四番

博報堂

中央公論第二十一年第一號目次

新年を迎ふの辭

歲華改まると共に人心も亦新たなり
此の新たなる意氣を以て世運の推移に乘ず、嚮ふ所正しくして指す
所謬まらずんば、人世は實に幸ならん
平和回復以來、官民を通じて戰後經營の大問題を解決すべき責任を
負ひ、而して思想界の趨勢また一步を轉ぜんとす、吾人操觚者の任
重くして事また繁からんとす、將さに自から駑鈍に鞭ちて職分に努
力するも尙ほ足らざるを覺ゆ、況んや大戰以來官民想怒り相誨り、
隨て世論偏狹に流れて往々信を措き難きものあるをや
剛も茹はず、柔も吐かざるは吾人の志なり、至誠を推し、公平を宗
として敢て世の木鐸たらんとを期するは吾人の願也、官に阿ねり世
に媚ぶる、若くは才華を競ひ辯說を張るは、共に吾人の欲する所に
非ず、抑も又又能くする所に非ざる也、天には榮光あらしめよ、地
には平和あらしめよ、而して總ての人に祝福あらしめよ。

明治三十九年一月元旦

反省社同人



第二十一年
第一號
（二百二號）

戰爭の價

【上】

ルーズヴェルト氏の言ふが如く、正義の爲めに戰ふ能はざるものは怯人なり、正義を主張するの武力を有せざる國家は自立すると能はず、然れども兵は凶器なり、戰爭の慘毒の大なる、實に意料の外に出づるものあり。

軍醫總監小池氏の演說（東京醫師報國會解散式に於ける）によれば日露戰役二十ヶ月の間に、戰死したるもの四万三千二百十九名、戰傷者十五万三千六百七十三名、行衛不明者五千八十一名、外傷者一万六千四百五十六名、合計二十一万八千四百二十九名にして、出征中病患に罹れるもの平病二十万三千二百七十名、傳染病一万七千八百六十六名、合計二十二万千百三十六名なり、而して此の病患者中戰地に於て死歿したるもの約六万餘人、內地後送の上死歿したるもの三千六百一人なりといふ、故に之を表示すれば左の如くなるべし

死者	戰死者	四三、二一九人
	病死者	六三、六〇一人
	計	一〇六、八二〇人
行衛不明者		五、〇八一人
戰傷者		一五三、六七三人
外傷者		一六、四五六人
病患者		一五七、五三五人
總計		四三九、五六五人

即ち四十三万九千五百六十五人なり、小池氏の報告後尙ほ病兵及び病死兵の續出するもの亦少からざるべき

を以て、之をも加算せば、總損害は實に四十四万人以上或は四十五万人をも超ゆるなるべし。

想へ、我が軍隊衛生の善良なるは、歐米諸軍醫の齊しく嘆美する處にして、其の平病傳染病の割合に少數なるは、古來戰史上未曾有と稱せらるゝに拘はらず、戰死傷を合計して四十四万以上に達す、慘ならずや。

更らに思へ、此の四十四万人は、實に我が國民中の壯丁なり、然り、老幼婦女及び不具癈疾、不健康者を除きたる壯丁のみ、而して此の内より四十四万人以上を損す、總ての勞働、總ての事業經營に損する所果して幾許ぞや、抑もまた夫を喪ひ、父を亡ひ、子を失ひ兄弟を亡へるものゝ不幸幾許ぞや。

第一軍司令官黑木大將の振旅し凱旋して至尊に復命するや、其の最後に記して曰く『茲に大命に對する任務の結了を奏聞するに當り　陛下の忠實なる幾多將卒を戰場に喪ひ今日與に此の盛典を拜するを得ざるは臣等の特に恐懼痛恨に堪へざる處なり』と、吾人は大將が御前に於て讀んで此の一節に至て嗚咽自から禁せざりしを想ふと共に、人に上たるもの實に此の情あるの當然なるを信ず、第三軍司令官乃木大將吟じて、曰く

王師百萬征强虜。野戰攻城屍作山。愧我何顏看父老。凱歌今日幾人還。

乃木大將は旅順攻擊に將として最も悲慘なる戰鬪を重ね、既に其の兩愛兒を戰歿せしめたるのみならず、奉天の役に於ても亦頗ぶる難局に當りて苦戰惡鬪を續けたり、故に此の一詩實に其の肺肝より出づ、吾人は大將の情に敦きを知ると齊しく、坐ろに戰爭の慘禍を想ふて多く此の詩を吟ずるに堪へず。

彼の漫りに戰爭繼續を主張したるもの、殘忍にして全く人心なき乎、抑も又慘害の眞相を知らざりし乎。

【下】

軍事費として第廿回議會の協贊せしもの五億七千六百万圓、次の第二十一回議會の協贊せしもの七億八千万圓にして、而して第二十二回議會に提出されしもの撤兵費三億六千万圓、行賞費一億五千万圓、計五億一

千萬圓にして、之を表示すれば下の如し

卅七年度	五七六、〇〇〇、〇〇〇圓
卅八年度	七八〇、〇〇〇、〇〇〇圓
卅九年度	五一〇、〇〇〇、〇〇〇圓
總計	一、八六六、〇〇〇、〇〇〇圓

即ち十八億六千六百萬圓にして、是れに海陸軍復舊費及び行賞費として豫備費中より支出さるべきものを合計せば、優に二十億圓に達するや明か也。

正しく之をいへば、我等日露戰役のために喪へるものは四十四萬人以上の死傷者と二十億圓の金額なり。

此の二十億圓を我が人口八千萬に分割せば、一人當二十五圓宛なり、一戸五口とすれば一戸當百二十五圓宛なり、故に此の損失を償還するがためには、我が老幼婦女癈疾に論なく、一人平均二十五圓、一家平均百二十五圓宛負擔せざる可らざる計算なりとす。

若し二十億圓を國民に分配せば、一人廿五圓、一家百二十五圓を得べく、之を以て政府の歲計に充てば、國民は全く十ヶ年間賦稅を免かるゝを得べし。

鐵道布設費を平均一哩十萬圓宛とせば、二十億圓の資金は以て二萬哩の鐵道を布設し得べし、現在我が官私鐵道線の延長六千哩に滿たず、二十億の資は能く之を三倍以上ならしむるに足る。

若し二十億圓を以て海軍を建造せば、優に二十萬噸の軍艦を製造し得べし、之を以て蘇士運河を開鑿するも易し、パナマ運河を堀鑿するまた難からず、況んや大阪敦賀邊、若くは琵琶湖を中心として太平洋と日本海を直通せしむべき運河を開くことをや。

若し二十億圓を以て學校を起したりとせよ、若くは養老院育兒院等を起したりとせよ、若くは貧民に職を授くべき產業を起したりとせよ、國に無教育の人なく、貧者全く跡を絕つべく、其の文明に資する殆んど測り知る可らざる也。

夫れ二十億圓を平和の事業に支出せば。我が國民の想望するもの何事か成らざらんや、而して其の結果の人生を利し、文化を進むるの大なる、敢て多言を要せざる也、唯だ之を以て古來未曾有の大戰を爲し、四十

四萬の壯丁を損ず、其の慘毒の至大なる、誰か悚然たらざらん。

漫りに戰爭を壯とする勿れ、漫りに侵略を偉とする勿れ、希臘羅馬の末路如何ぞや。

日清戰役に於て、我れは新しく臺灣を得たり、二億三千萬圓の償金を收めて戰費以上のものを得たり、生靈の死傷を念はざるもの、恐らくは戰勝の光榮に醉へるならん、日露戰役にして若し亦斯の如く、新たに多くの土地と多少の戰費(假令實費以上ならざるも)とを得ば、我が國民幾許か夫れ相率ひて好戰國民となりて世界の指彈を受けざるものぞ、彼の韓國を得、旅順大連を得、東清鐵道並びに樺太の一半を獲て、尙ほ戰果の至小なるを憤怒するものは、蓋し血に渴したる魔神なるべし、殘忍にして人心なきものなるべし。

佛にも亦降魔の劍あり、正義人道のために戰ふ必ずしも非ならず、否戰はざるを得ざることあり、然れとも私利私心のため、虛榮と野蠻とのために戰ふものは神人共に之を容さず、一將成功萬骨枯、思はざる可らざる也。

大學の獨立とは何ぞや

日露戰爭の影響に善惡二方面あり、一部人心の眞摯熱烈となり勤儉力行に傾ける、敎育を重んじ產業に勵まんとするが如きは其の善なるものにして、彼の所謂血の氣立ちて、爭ひを好み勝を好み、動もすれば上長に反抗して我意を貫かんとする流風を生じたるが如きは寧ろその惡と稱すべきもの也。

彼の諸學校に紛擾の多き、必ずしも統御監督者の無能、濫私の致す所のみには限らじ、學生の所謂血の氣立ちたると少くも其の一原因たらざるを得ず。

吾人は東京帝國大學總長の更迭を動機として、諸敎授と內閣若くは文部省との間に對抗案件の湧起したるを以て、必らずしも日露戰爭の惡影響なりとは認めざるも、其の性質に於て頗ぶる彼の諸學校の紛擾なるも

のに類似するを惜まざる能はず、吾人は素より曲直の文部大臣又は諸教授の孰れに在るを詮索する者に非ず然れども其の事態の諸學校の紛擾に似て、僅かに其の輪廓の大なるに過ぎざるを認め、斯る事態の寧ろ露國式なるを嫌惡せざる可らず。

諸教授は其の總辭職(殆んど)を以てストライキに非ざるヿを頻りに苦言すといふ、小膽嗤ふべき哉、之をしてストライキと曰はずんば天下豈ストライキなるものあらんや、然れどもストライキ必らずしも惡事に非ず、要は其の言の順にして義の正しきや否やに在り。

或は曰ふ、此の事態は區々文部大臣大學總長の地位問題に非ず、主たる目的は學問の獨立を完くするにありと、然れども是れ稍々不通の説なり、試みに問ふ、大學は未だ學問の獨立を有せざるや、政府は諸教授に對して學説を左右せしむべく干渉したる事實ありや、少くも近く十ヶ年來は、曾て斯の如き事實あらず、即ち學問の獨立は完全也、隨て學問の獨立は問題とならず。

然らば則ち問題は大學の獨立といふに歸着す、諸教授中併せて教授の言論自由(學説に限らず時勢評論をも併せて一切の言論をいふ)を主張するものあり、然れども是れ制度の致す所のみ、現行法規に於て、大學は文部大臣の監督を受け、其の一切の費用支出を擧げて文部省を透して國庫より仰ぐのみならず、其總長及諸教授は官吏として官等を有し、普通官吏と同じく位階勳章及び俸給年金恩給を受け、而して其の選叙皆文部大臣を透して內閣より受く、文部大臣の干渉を免かれんと欲するも得べからず、若し學説以外に渉りて政論を試み、時の政府を攻擊するが如きヿあらば、官吏服務規律に由て處分せらるゝヿ素より當然のみ、故に所謂大學の獨立なるものを以て、文部大臣(又は內閣)の監督を離れ、諸教授總て言論の自由を得るヿなりと做さば、必らず現行法規を改正し、且つ教授總て官吏たる身分を一擲せざる可らず、事茲に出でずして唯だ內閣と爭ひ文部大臣に抗するも、大學の獨立竟に空論のみ。

今や文部大臣罷む、諸教授等思ふに多少得色あるべし、願くば之を機會として更らに一歩を進めて根本問題を解決せよ、然らずんば諸教授の運動は、全く無意義に歸せん、知識なき勞働者の拙なるストライキと一般ならん。

吾人の見を以てすれば、大學を以て會計檢查院の如く、政府より獨立せしむるか、若くは宮中の直隷と爲すを可とす、其の費用の皇室費、若くは内閣を透して帝國議會より協贊を求ると、例へば會計檢查院の如くすべし、而して諸教授は全く官吏たる身分を捨て、學問上特別の勳功あるものに限りて普通人民と齊しく位勳を受くるとし（官吏とせずして）其の任免黜陟等總て一定の規範を定め、諸教授の評議に由りて總長之を決行する順序と爲すべし。

若し夫れ諸教授の態度に至ては、飽まで最高學府の神聖を嚴持せざる可らず、淺薄なる政論を試み、甚だしきは滔々たる俗情に媚び、强いて空名を衒はんとするが如きこと斷じてある可らざる也。

男女學生交際の可否

下田歌子

私は勿論今の社會の組織てありましては男女の交際が惡いと云ふ詞を出だすべき筈は決してありませぬ、既に公の招待狀でも必ず夫婦と云ふことになつて居るので、且又希くは夫婦共に大抵の所へはお出になつて男女共々に交際もし、遊びもするやうになることを大に希望して居る所でございますから、今更良否を言ふ所ではありませぬ、唯青年男女の交際と云ふことに就ては非常に考慮を要することであらうと思ひます、言ふまでもなく青年の男女は頭も固まらない中でございますから、是は西洋と雖も身分ある人は唯無暗に自由勝手に交際すると云ふ風俗は私は恐らく無いと心得て居ります、のみならず一體社會の風俗習慣が、西洋の如く女子を保護すると云ふ意味からして、今では御承知の如く、よし形式的表面にもせよ非常に女子を尊敬

しなければならぬやうに形造られて居る社會である、右の如くならば、それは極めて女子にとりて、那の種類の男の中にはいつた所が、何から何迄敬意を表して、保護されるのですから、都合が宜しく、從つて弱者なる女子も、安心につきあへる話ですが、まだ〳〵日本の社會ではさうは參りませぬ、て唯むづかしいことを言はずに其年頃の娘を持つて居る親心になつて見ましたならば、どうしても唯段々世の中が開けて來るから男女の交際はさせる方がよいと云ふて打ち放すと云ふことが出來ませうか、て頭の固まらない、社會の制裁のまだ西洋の風にはなつて居ない世の中に於てどうぞ間違の無いやうに、躓きの無いやうにと、内外注意に注意をして、而して適當の方法を以て適當の交際をすると云ふことは決して惡くなからうと思ひますが、前申しまするやうなまだ社會の制裁の確平と立たない今の世の中に於ては、私はどうも然るべき監督者の責任を負ふた人の無い下宿などに男女の青年の學生が合宿をして居ると云ふやうな類は、私は若し母としても嫌なことと思ひます、希くはさう云ふことの取締だけはあらまほしいのでございます、て自分が監督して居りまする學校の生徒には左樣なことを有らしめないやうに致して居ります、て餘り心配を仕過ぎるかも知れませぬけれど、ドウカ世の中の親たる人から能く間違ないやうに考へてお貰ひ申したいと思ひます、動もすると親御は却つて母なる人などが、自分が教育が無いからと云ふことから謙遜し過ぎて、さうして子供を信じ過ぎると云ふては語弊があるかも知れませぬが、子供の言ふことに打任かせ過ぎる、言ひ換へればまだ頭がチヤンと固まらない人を捕へて頭の固つたやうな人の取扱をして自由を與へると云ふやうに餘り放任してそれから過が有らしむるやうな傾きもあらうと思ひますから、それ等の點に就て能く周到な注意が有らまほしいと思ひます。

男女學生交際論

海老名彈正

私は未だ此問題に就いては多く研究して居らぬ、そして又、まだ考が熟して居らぬ、併し男女學生の交際、廣くいへば男女の交際といふ事は今後益々盛んに行はれるであらう、これは社會の趨勢であつて防止することの出來ぬ事であると共に、又大に贊成すべき現象であらうと思ひまする。

男女七才にして席を同ふせずといふ古の道德は今日の社會には適用する事は出來ぬ、此古い思想は早晩廢つて了ふであらうと思ひまする、近くは彼の種々の集會でも、今日尙ほ男女七才にして席を同ふせずといふ思想が殘つて居るものであるから、習慣上男女同席を避けて特に婦人席といふものを設けます、これは甚だ不便である、男子が其老母を連れて會に臨む事もある、女子がお爺さんを伴うて行く事もある、夫婦て子供を連れて行く事もある、乃至は一家族擧つて出懸ける場合もある、かゝる場合に別々の席に就くとすれば老人などに辯師の名前を聞かすことも出來ず、外國語の演說でもあつたときに通譯して老人や子供に聞かすことも出來ず、又老人や子供をいたはる事も出來ない、かかる不便があるからして、早晩は集會等でも男女入り亂れて席に就くことにならうと思ひます、私もまたさうならんことを希望して居りまする。

抑も彼の藝者といふものは何が故に存在して居るか、何が故に藝者が必要であるかといへば、現今の交際社會に於ける或る欠陷を補はん爲めに之を必要とし從つてそれが存在して居るのであります、男子は男子のみ、女子は女子のみの社會といふものは到底無趣味て堪へ得るものでないのは人情である、東洋の習慣として女子は男子と席を同ふすべきものでない、交際社會に出るものでないといふ思想によつて、交際社會は茲に一大欠陷を生じて居る、そこで止むを得ず人格のない藝者の如きものを以つて滿足して居るのである、若し人格の高い夫人や令孃が交際社會に出ることにな

れば自然藝者の如きものは不必要になつて來る、故に男女の交際が盛んになるのは我國現下の交際社會に於ける欠陷を補はんとするもので甚だ喜ぶべき現象であらうと思ひまする。

以上は男女交際といふ廣い處から述べたのであるが、男女學生の交際問題になつても、同じく之を惡いとは云へぬ、男子は女子に依つて得る處多く、女子も男子と交際して得る處は、遙に同性のものと交際して得る處のものより優つて居る、されば今日男子の學生が次第に交際を頻繁にするやうになつたといふのは或は善い事かとも思ひまする。

併し二十前後の未だ骨の固まらぬ青年男女を無監督の下に交際さして置くのは、果して善い事であるや否や、こゝは大に考慮すべき處であらうと思はれる、私は此事を思ひ起こす時に、毎に其最愛の子女を無監督に東京へ遊學せしむる父母の大膽なのに驚きます、さうです、私は其父母の大膽なのに驚きます、よく手離して下宿屋住ひをさせる事が出來ると思ひます、尤も田舍の家庭といふものは比較的風儀の惡いものであるから、田舍のものは左程にも東京へ一人出すのを怪しみもしないであらうが、兎に角甚だ危險なことを敢てするものだと思つて私共はいつも驚くのであります、これに就いては父母は餘程の大事を取つて然るべきであらうと思ふ、私は男子でさへも彼の下宿屋に住まはしめるのは危險であると思ふ、況んや女子をやです、彼の放縱無規律な下宿屋等に於て男女の學生が交際をする、碌な事のないのは寧ろ其數である。

故に今日のやうな有樣では到底男女學生の交際は奬勵することは出來ぬ、といつて之を防止する事も出來ぬ、要は父母先輩が子女後輩を直接間接に監督するより道がない、下宿屋を取締つて下宿屋をして學生の取締をさすといふ事も不可能の事である、下宿屋は金儲主義でやつて居るのである、學生をして一錢たりとも多く下宿屋に拂はしむる外彼等は學生の成功と失敗とは關する處ではないのである。

私は又翻つて學生の交際といふ事に就いて考へて見

るのに、學生時代に於て左程頻繁に交際をする時間があるかどうか、女學生と交際し、同窓學生と交際し、又他の人々とも交際して而も學業に精勵する時間があるかどうか、疑はざるを得んと思ひまする、さう毎日のやうに往來して長談をすれば、從つて學業の方はおろそかになりはすまいか、そして又下らない長談議によりて得る處が左程多いものであるかどうかと思ひます、寧ろ平日は客を謝絕して勉學して居る底の人の方が成功しては居ないかと思ひまする。

要するに今日の狀態では、男女學生の交際は、私は餘り贊成が出來ぬ、而も趨勢は到底防止する能はずであるから如何ともする事は出來ないが、若し交際さすとすれば相應の監督の下に於て爲さしめなければならぬと思つて居ます、而も其監督は形の上では可けない精神でなくては可けないのである、彼の學生の醜行の聞えるが如きは學生の人格がまだ卑いからでありまする。

今一言云つて置きたいのは、新聞紙等が頻りに女學生の墮落といふ事を唱へる事である、これは實に酷である、現今の學生は決して墮落しつゝあるのではない、試みに明治初年頃の青年男女は何うであつたかを思ふに、女子ならばお針にでも通ふ、其お針に通ふ間の彼等の品行は如何であつたか、彼等の醜行は今日の海老茶式部の比ではなかつたのである、今の女學生は其頃の女子に比ぶれば教育もある、從つて品性も高い、外聞といふ事も思ふ、即ち教育のあるだけ比較的高潔であるといふ事が出來る、明治初年頃の女子の多くは殆んど醜行をして居つたといひ得る位のものであつた、今日では女學生中の或るものに醜聞があるといふのみで、全體がさうではないのである、故に女學生を見れば直に墮落書生と罵るのは實に酷であると思ひまする。

次第に教育も行届き、學生も漸次精神的修養を積む樣になつて來る、さすれば男女交際、男女學生の交際も面白く高尙に出來て來ます、私は現今の狀態では男女の學生を自由に交際せしむるは考へものであると思ふが、而も之を形を以て制正することは出來ない、又

それを好まない、唯形でなくて、こゝろにあると思ふ、即ち精神的教育を施し、學生も亦淸きこゝろを以つて交際するやうになるのを希望するのであります。

記者一日海老名氏を其寓居に訪ひ雜談をした、こゝに掲げたのは男女學生交際問題に關する氏が雜談中、記者が記憶に存するだけを書いたもので、若し誤謬等があつたら、それは記者の責任である。

人道の正體

理學博士　丘淺治郎

世の中には便宜上常に用ゐる語で、然も便宜上其意味を判然と定めずに置く語が幾らもある、人道なる語も其一つで、列國間に此語を用ゐる場合の如きは、餘り深く其定義を穿鑿せぬ方が都合が宜しい、然しながら一般に個人間に用ゐるときには、人道なる語は「多少の勞力或は金錢を費して他の人或は人に近き動物の苦しみを減ずること」即ち利他同情の行爲を意味する樣に見受けるから、此所には此意味に取つて人道なるものゝ正體を聊か論じて見たいと思ふ。

先づ第一に上述の如き人道なるものは實際に存するものか、又は幽靈の如くに單に噂だけに止まつて、實際には存在せぬものかと考へて見るに、若し各人が人道を行ふたならば、世の中は毫も爭ひがなく、眞に平和極樂の黃金世界であるべき筈なるに、實際を見ると世間は全く其正反對で、他人は如何に迷惑しやうとも

自分さへ宜しければ差支ないと云ふ主義が行はれ、大にしては國と國との間の戰より、小にしては紀念繪端書を買はんとする爭に至るまで、他人を蹴飛ばし、蹈倒しても、唯自分さへ先へ進み出で目的を達すれは宜いと云ふ有樣で、法律の制裁だに無くば、我靴に塗る脂を獲んがために他人を打ち殺すことをも敢へて辭せぬ樣な人が何所にも充滿し、實に人間とは利己心の凝固結晶したものかと思はれる程である故斯かる方面のみを見ると、人道なるものは何所に存するかと疑はざるを得ぬ樣な心地がする。

然しながら又廣く他人の行爲を觀察し、且自分の内心を顧みると、他人の悲しみを聞けば共に悲しくなり、他人の苦しみを見れば之を助けたく感ずる利他同情の心の存在して居ることも亦慥な事實である、仕合せの惡い悲酸な境遇にある人の話を聞けば、自然に涙が出て、何樣にかして救ふて遣りたいとの心が生じ、重い荷を挽く馬が坂で苦しんで居る所を見れば、實に憐である、助けてやりたいとの氣になるが、此同情の心は決して表面を飾るための僞でもなく、教へられて覺えた結果でもなく、眞に生れたときから備はつて居る本能的性質である、其程度は各人決して一樣ではないが、兎に角斯かる性質が或る程度に於て誰の心の中にも存在することだけは決して疑ふべからざることで、之が即ち所謂人道なるもの丶源である、現今の有樣から考へて見ると、人間には利他同情の心は利己心に比しては極めて少量に存することも斷言が出來やう、約言すれば人間の心は九割九分の利己心と一分の利他心とを備へて居るのである。

斯くの如く人間は自分のためのみを思ふ利己心と、他人のためをも思ふ利他心とを同時に兼ね備へて居るのであるから、その爲すことには非常なる矛盾がある、唯一發で大なる軍艦を轟沈して、數百人の將卒を同時に殺すための水雷を毎日盛に製造して居る側には、敵の負傷兵までも鄭重に看護する計畫をして居る、商賣の競爭では他人を精神に異狀を呈せしめるまでに苦しめながら、精神病者を收容するために公共の金を出し

て病院をも建てる、一方では敵は何所までも攻め亡ぼさねばならぬ、途中で和を講ずるのは屈辱であると論ずる學者があるかと思へば、他方では敵も人なり、我も人なり、宜しく相愛すべしと教へる教師もある、其他例を擧げたら限りが無い程に、人間の爲すことは矛盾で充滿して居る、それ故單に今日の此有樣だけを見ると實に人間なるものは到底解釋することの出來ぬ謎中の謎の如くに見える、倫理學の諸問題も畢竟は此謎を解かんと苦心する所から起ることとて、此謎の不可解である間は總ての問題が皆根柢に於て不可解たるを免かれず、專門の學者等が如何に詭辯を弄しても、到底滿足な說明を得られぬことは明である。

さて、詳に人間を觀るに不可解の謎の如くに思はれる者は唯其行爲のみではない、其身體の構造に於ても澤山の謎がある、例へば耳殼を自由に動かし得る人は殆ど無いにも係らず誰にも耳殼を動かすべき數個の筋肉がある、又胎內發育の途中には一時頸の兩側に魚類に於けると同時な鰓孔が出來て、後には再び閉ぢて消えて仕舞ふ、其他尚數十の謎が人間の身體には有るが、此等の謎は研究者が唯人間の現在の身體のみを調べて居た間は總て全く不可解であつた、然るに廣く他動物を比較研究した結果、生物進化の大原理が發見に成つてから、人間の身體を此原理に照らして考へて見ると、從來全く不可解であつた謎も幾分か解かるる樣になり、初めの疑問も漸々解けて、今では更に一步進んで先の謎を解かうと務める楷段に達したのである、身體に關する謎は斯くの如く漸々解けて來たが、さて翻つて行爲に關する謎は如何なる風に研究せられて居るかと見るに、未だ甚だ幼稚であつて、千年前も今日も餘り著しくは變らず、往古の謎は現今も尚依然として其儘の謎である、議論の發表せられたこと、書物の著されたことは實に無數であるが、其結果として昔の疑問の氷解せられたことは殆ど一つもない、之は何故かと云ふに我等の考へる所に依れば全く研究の方法を誤つて居るからである、人間も總て他の動物と共に共同の先祖から降り、同一の進化の法則に從ふて今日の狀態まで

に發達し來つたものである以上は、其の行爲を研究するに當つても、身體を研究するのと同樣の方法を採り、廣く全動物界を見渡して彼此相比較し、人間をも其一部と見做して研究するの外に到底解釋の途は無い、眼界を廣くするほど、思想が公平になつて、一部分を過重する謬が減じ、終に眞理を發見するに至るもの故、今後人間の行爲を研究する人が宜しく此方法を採つて、眞理を探るべきであらうと思ふ。

先づ利己心の方から考へて見るに、之は動物全體の通性て、苟しくも生活して居る以上は、必ず利己心が其所に存する、實は利己心の實現に依つて僅に生命が保たれるのである、生物の增加蕃殖する割合は實に夥しいもの故、如何なる動物でも生存のための競爭を免かれず、已に競爭と云ふ以上は敵の迷惑の如きは素より顧るべきの遑はなく、唯利己心を實現せしめるより外はない、されば生存と云ふ語の中には競爭と云ふてとも、利己心と云ふことも含まれて居る譯て生存競爭と態々文字を重ねる必要は無い位に思はれ、利己心なしの生活と云ふのは恰も吹かぬ風、燃えぬ炎と云ふ如く全く考へられぬことの樣に思はれる、世人が常に平和の符號と看做して居る鳩の如きも、其生活の有樣を見れば徹頭徹尾競爭であつて、一粒每に一本の完全なる植物となるべき豆粒を每日無數に食ひ、其豆粒だけの植物の生命を奪ふことに依つて自己の生命を保つて居るのである、又一疋の鳩が豆を食へば、其豆の量だけは他の鳩及び他の豆食動物の餌から引き去られる譯故、何所にか其ために餓死すべきもの丶生ずるは當然である、爪もなく、牙もなく、血をも流さぬ故に、表面のみを見る人は鳩の生活を極めて平和的のもの丶如くに感ずるが、自然界の全局面から見れば、其利己心の劇しさは決して他の動物に劣ることはない、凡そ此世に生れ出た動物は利己心を逞ふするか、死ぬるかの二途の中一を選ぶの外はないのであるから、利己心は總ての動物の第一的性質で、生活とは利己心の實現であると云ふても敢へて誤りではないのである。

然しながら動物には單獨の生活を營むものと、團體

を造つて生活するものとあつて、此二者間では利己心實現の方法も幾分か違ふ、團體動物では上下交々利を征めては國が危いと云ふ文句の通り、若し團體內の各個體が各自利己心を逞ふしたならば團體としての生存が出來ぬ故、斯かる動物には必ず各個體に幾分かの利他、同情の心が備はつて居り、團體內には必ず幾分かの利他的、同情的の行爲が行はれて居る、之は團體動物に共通の性質である故、團體動物道と名くべきもので、更に略して單に「道」と稱しても宜しいが、此「道」なる者が行はれるに依つて團體が纏まり、團體としての利己心を外に向ふて發輝することが出來るのである、一二の例を擧げて見るに猿の如き者も團體內に負傷者が出來た時には同僚が相集まつて極めて親切に之を看護し、若し死ぬ者でもあれば多勢其周圍に集まつて泣涕した後に死骸を運び去つて、他の者の知ぬ所に隱して仕舞ふ、アフリカの內地で銃獵をした人の日記に猿を擊つことは擊つたが、死骸は連れの猿等が運び去つた故、遂に取ることが出來なかつたと云ふ如き文句を見るは屢々である、又幼兒を遺して母親が死ねば、他の牝猿が直に之を引き受けて我子同樣に愛し育てる、是等は猿の團體に行はれる道であるから、猿道とも名くべき者である、又象の團體が進行するときには屈强な牡象が周圍に並び、牝や子供は中に立たせ、弱き者を助け、幼き者を導いて進むが、之は即ち象道である、又海狸の團體が水邊に居る時に敵が近けば、最初に之を見出した一疋が尾を以て水を敲き、其音を聞いて他のものは皆水中に飛び入つて、生命を全ふするが、之は海狸道である、更に蟻蜂等の如き所謂社會的昆蟲の行爲を見ると、蟻道又は蜂道の進んで居ることは實に驚くべき程で、働蟻や働蜂が終日休まず骨を折つて働いて居ることは一として他を利する爲ならざるはない、自分一個のためならば少量の食物で事が足りるのであるから斯く朝から晩まで刻苦勉勵するには及ばぬ筈である、然るに斯く終日食物を探し廻り、一生懸命に之を巢に運ぶのは全く同じ巢の內に居る同僚及び幼兒を養はんが爲で、其熱心なることは到底養育院の掛員が義務的に世

話をして居るのとは同一の論てない、斯樣に列擧して見ると、團體動物には一として「道」の行はれて居らぬものはなく、人道は唯其中の一に過ぎぬのであるから、之のみを別に離して取扱ふべき理由は決して無い。

以上述べた通り團體競爭をする動物では、其個體に必ず多少の利他、同情の心が備つてあるが、斯かる動物を並べて彼此相比較して見ると、利他心の發達の度には種々の階級があつて、個體間の利他心の進んで居るものほど、團體の結合が強く、隨つて、團體としての利他心が發達して居る、團體內の各團體が如何に強くとも同僚互に相助ける心が無かつたならば一致協力せる敵團體の勢には到底かなはず忽ち負けて仕舞ふ故、個體間の利他心は其團體の戰鬪力を增進せしめる手段とも見做すべきものでこの點の進步した團體ほど生存の競爭に勝つ見み見込みが多い、斯樣に考へて見ると利他心なるものは決してそれ自身に起つた者でなく、團體生活の進むに伴ふて利己心から漸々轉化し來つた第二的性質で、個體を標準としてこそ他を利する心であるが、團體を標準として論ずれば矢張利己心の一部分に過ぎぬのである、云ひ換へれば團體動物に於ける個體間の利他心は團體的利己心の內に對ふて顯れた形と見做すことが出來る、又他の物に譬へて云へば團體動物に行はれる「道」は團體が外に對して戰ふための後方勤務とも云ふべきもので、矢張戰爭事業の重要なる一部分を形造るものである。

團體動物の個體に現はれる利他心には發達の程度に種々の階級があつて、決して一樣でないことは前にも述べたが、隨つて「道」の行はれる程度にも動物の種類により著しい相違がある、現に萬物の靈なる人間社會ては人道の行はれることの微々たるに反し、小さき昆蟲なる蟻や蜂の社會には蟻道、蜂道が殆ど理想的に行はれて居るが、之は何故かと云ふに、全く團體間に自然淘汰の行はれることの多少に基づくことである、蟻蜂の如き昆蟲類では團體の盛衰存亡が頗る速である故、其間に自然淘汰が十分に行はれ、生存に適する團體は勝ちて榮え、生存に適せぬ團體は負けて亡び、忽ちの中

に團體の代が重なり、自然淘汰の結果が現はれ、團體生活に適する性質が漸々發達し、本能として子孫に傳はり、終に今日見る如き理想的團體生活を營み得る程度に達したのである、之に反して人間の方は一團體内の個體の數も甚だ多く、其生命も比較的長い故、團體の盛衰存亡は頗る緩漫で其間に自然淘汰の働くべき餘地が極めて少ない、特に文明が進んで、通信交通の途が開けるに隨ひ、一團體として結合し得る個體の數が漸次多くなり、野蠻時代に比すれば團體は漸次大きく成る故、其間に自然淘汰の行はれることも益々少なく成つて仕舞ふ、人間の先祖が未だ猿同樣であつて、少數の個體が集まつて團體をなし、團體者の間で劇しく生存競爭して居た頃には團體間に自然淘汰が行はれ、其結果として、團體的生活に必要なる本能即ち利他心が或る程度まで發達したであらうが、人間らしく成つてからは、上述の理由で、其進歩が殆ど止まつて、昔て猿同樣の時代に獲ただけの本能的利己心が殆ど其儘に今日まで傳はつて居る樣である、即ち公平に比較して見ると今日の人道なるものは猿道とは伯仲の間で、蟻道、蜂道等に比すれば遙に低い程度に位するものと云はねばならぬ。

人間の持つて生れる利他心は斯くの如く微々たるものであるが、個體間の利他心は團體動物の生存には必要なもの故、苟しくも團體として生存せんと欲する以上は個體間の利他心を增進せしめるか、或は之と同樣の結果を得べき他の方法を求めることを務めねばならぬ、蟻蜂の類が生れながら自然に爲すことが悉く蟻道、蜂道に適つて居るのは長い間自然淘汰の行はれた結果である故、今日人間が之を望んだとて、一足飛びに達せれる譯の者ではない、我々は我々の持つて生れた微なる人道の萌芽を人工的に補ひ助け、人工的團體の結合を強固にし、敵に對して團體的勢力を發展する樣に力を盡す外はない、人間には爪も牙も無いが水雷や大砲を造つて一時に數百人を殺すことが出來る、人間には疾走に適した足はないが、鐵道を敷いて一日に數百里も走ることが出來る、總て天然の足らざる所を人工的に補

い助け、他の動物が自然淘汰の結果として獲たる所の者より以上の者を自分の智慧で造り出して敵に打ち勝つのが人の人たる所以であるが、人道に於ても之と同じく、特に人工的に制度を設け、制裁を加へて人道を行はしめ、或は賞譽を與へて煽てゝ人道を行はしめ、生來の微なる人道の萌芽を補い助けなければならぬ、人間の團體は往古より今日まで絶えず此點で競爭して居た次第であつて、此點が衰へて各個人が個人として利己心のみを逞しふする樣になれば其團體は忽ち敵團體のために敗られて仕舞ふ、人間の團體の生活に法律及び道德の必要なのは即ち此理由に因るのである。

人間は團體生活をなし、團體同志で競爭して生きて居るものであるが、その競爭の單位となる團體は民族である、以上述べた所を特に人間に當て嵌めて云ふて見れば、一民族内の個體間の利他心は、其民族が外に對して民族的利己心を實現するために必要なもので、此二者は殆ど同一物の兩面とも見做すことが出來る、戰爭するには擧國一致が必要であり、擧國一致は團體の利他心に依つて初めて出來るものである故戰爭と人道とは非常に親密な關係がある、即ち外に對しては戰爭として現はれる民族的利己心が内に向ふては個人間の人道を要求するのである、世の中には戰爭と人道とを以て全く相反するものゝ如くに考へて居る人も多いが、團體動物の生活を比較研究し、人道なるものゝ眞意を確めて見ると戰爭と人道とは同一物の表面と裏面との如きものであつて、我々は人道に依つてのみ能く戰爭し得ると云ふても宜しい、然して人間の生來の利他心は實に微々たるもので、之に委ねて置いたのでは到底必要なだけの人道は行はれぬ故、法律道德を以て強いて人道を行はしめる必要が生ずるのであるが、上述の理由に依り、人道なるものは常に自分の民族を本位とすべきものである。

然らば他の民族に對する人道は如何と云ふに、以上述べた所に依れば、生存競爭の單位なる民族と民族との間には眞の意味に於ける人道は全く無い筈である、又實際に行はれたことも決してない、然しながら滋養

物なる砂糖の甘味を感ずるために發達した舌は、不滋養物なるサッカリンをも甘く感ずる如くに、自己團體の利益のために生じた個體の利他心は他の團體に屬する個體に對して利他的行爲を爲なしたる時にも滿足の感じを起すもの故、此滿足の感じを獲るために他民族に對して人道を行ふは決して惡いとはない、唯他の民族に利益を與へ我民族に損害を與へる如き人道は大間違いであつて、決して眞の人道ではない、眞の人道は何所までも自己の民族を本位とすべきものである、但し人間の社會は甚だ複雜なもので、隅々まで明瞭にして仕舞ふは却て面白くないこともあるに依つて、此邊の所は曖昧にして置き、民族間の人道の如きは深く論ぜず、唯此語を善用する工夫が肝要であらう、敵をも愛すると云へば極めて尊く聞えるが、之は個人間に於てのみ行はれ得べきこととて、團體間に於ては自己を殺して敵に位置を讓るの外に敵を愛しやうはない故、斯かることは團體競爭をなすべき運命を有する人間に取つては全く不可能の空想である、蟹は如何に縱に匍ふことを理想としたとても、身體の性質が之を許さねば致し方がない、それよりは如何に最も善く横に匍ふべきかを研究した方が利益が多い、人間もそれと同じく、自分の性質に適はぬ、出來ぬ理想を求めんとするよりは、先づ自分の眞の性質を知り、自分の出來る範圍内に於て最も善きことを爲す樣に心掛けるの外はない、「汝自身を知れ」と云ふ古代からの文句は此意味に取るのが最も適當であると思ふ。

人道に關する問題は非常に多くの研究を要する大問題であつて、決して一回の短篇で論じ盡せる筈のものでない、特に此所に述べた所は單に粗い點線で我等の考への輪廓を畫いただけに過ぎず、例外と見做すべき場合は悉く省き、親子間に現はれる利他心の如きも全く略して置いたゆゑ、讀者の胸中には澤山の疑問が浮んだであらうが、此等に關しては更に機を見て論ずる積りである、素より我等一個の臆説に過ぎぬが唯大體に於ては以上述べた如きことは過去の歷史をも說明し、現在の事實にも當て嵌まり、又未來の出來事にも

符合するてあらうと信ずる故、人道を研究する專門學者の參考にも成らうかと思ふて此所に揭げたのてある。

（終）

實業教育につきて

河津暹

近比高尙なる學校を卒業したるものにして實業界に入るもの年を逐うて增加するは社會の爲甚だ慶ぶべき現象なりと雖も其の多くは一兩年が程は薄給と無趣味なる事務とに甘むじ其の胸中にある抱負も之を施すは勿論之を示すとすら能はず、而して其事務を處するや到底經驗ある所謂小僧上りの者に敵すべくもあらざれば重役等之を使用する者は學校出身者を罵りて無能なりとなし、使用せらるゝ者は重役等の先輩を以て不明となし、甚しきに至つては職を抛ちて他に轉ずるものあり。是れ等の事實は予輩の數々耳にする所にして社會顯象としては左まで重視すべきものに非るが如しと雖も深く其裡面に入りて研究する時は社會問題として決して輕々閑却視去るべき者に非るなり、何となれば現今學校に於て施す實業敎育が果して適當なりや否やといふ最も重要なる問題と關係すれば也。現今先覺實業家は學校出身者を以て直ちに其手足爪牙として役に立てしめんとを要求す而して學校敎育は寧ろ高尙にして其要求に副はざるを以て學校出身者を罵りて無能となし、學校敎育を役に立たずといふ。其要求と非難とは一面の眞理を含み今日の學校敎育は日常の事務を處する上に稍高尙に失するは予輩も之を認むと雖も實業敎育はこれ等先覺諸氏の要求する如く單に往復文算術簿記等の卑近なる事柄のみを敎へて他に出でざるべきものなりや予輩は私に疑なき能はず。聞く所によれば曩に獨逸政府は人を派して我國並に米國の實業敎育の實情を調査せしめしに該派遣員は報告して我國の敎育は獨逸の既に弊とする所のみに泥むで殆んど他を省みず反之米國の敎育は理想とする所を實現して遺憾なしといへりとこの觀察は恐くは實業家諸氏の意見と符節

を合するものにして其論を助くるに有力なるべしと雖も我國はこれ等先進國と事情を異にするものあり單に卑近なる事柄のみを教へて滿足すべからざる理由あり之を是れ思はずして直ちに我國實業教育を非議すべからざるなり。予輩が先覺諸氏の意見を斥けて我國の實業教育は決して卑近なる事柄を教ふるを以て十分なりとなさゞる最も重なる理由は我國商業は組織方法等につき今當に變遷の時期にあり銀行等泰西の事務管理の方法を直ちに移して多少の修正するに過ぎざるものは兎に角其他の者にありては我國にて特に發達したる組織經營法等ありて世界の商業とは全く同じからずこれ等の事實を度外視するも我國には自ら特別なる經濟事情ありて泰西の商業經營の方法のみに由るべからざるものあり、從て此等を調和して最も適當なる新組織を案出するは實に學理に由らざるべからざればなり。現今の實業教育をして卑近實用的の事柄に重を置かしむるは異論なしと雖も之と同時に高尚なる學理を授け錯綜せる顯象の中より眞理を求め得る理會力を養はしむるは必要なりと信ず。これ等の年少者も永久に手足のみに安むずる者に非ずして他日先覺諸氏に代りて事に當るべきものなり先覺諸氏は須く之等のものを其後繼者と見て教えざるべからざるなり實業教育に從ふものも先覺實業家の要求を容れて其教授方法を改むべきは今日最も必要なるべし之と同時に先覺實業家も亦これ等の事情斟酌を考慮すべきなり。

次に學校出身者が先輩に對して不平を抱くはこれ又謂なきことにて其能力は措て置き其受くる俸給は其司る事務と位置とに對して決して左まで少しといふべからず諸君は未だ經驗なし其の經驗を得事務を解するまでは暫く之を忍ばざる可らず。謂ふに之を忍ぶ能はざるは諸君が學校生活時代と比較して生活の困難を感ずるが其最も大なる原因をなすには非るか、現今社會奢侈の風學生社會にまで浸染し、其の身分をも忘れ奢侈に耽り一旦社會に出づる時は需給の法則に制せられて上に陳ぶるが如き冷遇に遭ふことをすら忘れたるもの丶如きものあり是れ最も戒しむべきことにして若し初よりて

等の事情を知りて覺悟をなすに於ては決して今日見る如き奢侈の行爲をなすと能はざる道理なり。これと同じく他日實業界に入らば先づ小僧とならざるべからざるを覺悟し學校に於ては勿論學校以外に於ても卑近實用の事柄に注意し手足として他に劣らざるように素養を積むに於ては決して先輩の非難を招かざるのみならず實業教育に對する誤解をも一洗し得べしと信ず予輩はこゝに最初に揭げたる事實につき所信に從ひ苦言を呈す識者幸に敎を垂れて予輩の誤を正せ。

●豫　告

次號の公論欄を飾るものは

福本日南氏

の論文なるべし、氏東都を去つて、論壇頓に寂寥を感ず、吾社乃ち遙に書を寄せて氏の卓論を求め、其快諾を得たり。

日本を代表する國民詩人出でよ

野口米次郎

實際上に於けるのみで無く、精神上に於ても英國、否大英國が大擴張（エキスパンション）の英國である帝國主義（インペリアリズム）の英國であることを自覺して來たのは過去二十年以來の事實である、大英國なるものは實際上『英國には日沒無し』といふ最大帝國である從つて其責任たる至大であるといふ事實を自覺して來た其大英國を歌つた詩人は即ちキプリング其人である、今世界の地圖を開展して見よ、英國は世界至る所に屬國を有して其勢力の範圍は全世界に渡つて居るでは無いか、倫敦は英國の都府である中心點であつた、然し其は過去の歷史である、詩人キプリングは大擴張の英國、帝國主義の英國即ち二十世紀に於ける大英國の中心は印度で無くてはならず、而して印度の都府ボンベーは大英國の中心點たる可き都府であると斷定したのであつた（序ながらキプリングは印度のボンベーで產れたのであつた彼は帝國の中心で產れたのであつた）彼は實際上に於ける英國の欽定詩宗（ロウリエート）

である

諸君、今顧つて考へて見よ、日本國の現狀は如何てあるか、大擴張の日本ては無いか、東亞の大帝國てある東亞の實權を雙手に握つて居る日本國ては無いか、余はキプリングの日本國にあるのを渴望するのてある、東京は日本の都府て中心點てあつた然し其は過去の歷史て無くてはならぬ、余は日本帝國の中心を朝鮮の京城にあらしめねばならぬ、或は進んて旅順に置きたいと思ふのてある、誰か大擴張の日本即ち二十世紀の日本帝國を旅順（否京城を以て實際に於て日本國の中心たらしめよ）は日本の中心てあるといふ確信を以て歌ふものぞ、誰か東亞の盟主たる日本帝國將來の希望と情熱を歌ふものぞ、余は日本國にキプリングあらしめよと呼ぶのてある、東亞の地圖は確に一變したのてある、日本の運命も一大變動を來たしたのてある、此の新機運を歌ふの詩人出てざる可からずてある

詩人ミラーは常に彈丸黑子のジエルサレムは詩無きバビロンより大なりと云ふ、偉大壯麗を自然に求め涙と血を有して居たジエルサレムはバビロンよりは大てあつた、國にして詩無きは死國てある、詩は國家の生命てある點てある、大英國の光榮はセークスピーアがある故てある、英國人は國家を失つてもセークスピーアを失ふのを欲し無いてはないか、大英國の光榮はミルトン、ウオヅウオス、バイロン、シエレー、テニソンを有するからてある、詩人あつて初めて國家に生命があるのてある國家が活動するのてある光澤を發するのてある、キプリングあつて初めて二十世紀の大英國を歌つたのてある、誰か二十世紀の日本帝國を歌ふものぞ、

日本の海陸軍は世界の海陸軍てある、大山乃木兩大將は世界のゼネラルてある、東鄕上村兩司令長官は世界のアドミラルてある、又日本の外交――常に失敗を重ねて居る日本の外交てさへ世界の外交たらんとして居る今日てあるのに、日本の文學は世界の文學たるを得無いのてある、日本の詩人はまた世界の詩人たるには前途甚だ遠しといふのては無いか、日本――極東の日本の萬物が二十世紀式の速力て運轉しつゝあるのに拘らず日本の文學――特に詩は十七世紀式て徒歩しつゝあるのてある、世界の詩は日に千哩といふ速力の汽車汽船て運轉しつゝあるのに拘らず日本の詩は日に五里六里といふ割合て徒歩しつゝあるかの感があるのである、此の二十世紀に於ける大擴張の日本帝國の詩も

二十世紀式にせねばならず大發展を成さしめねばならぬのである、醒めよ日本の詩人――東天は巳に〳〵白く太陽高しといふのに卿等は何故に惰眠を貪れるや、醒めよと絶叫するのである、星を歌ひ月を歌ひ愛戀を歌ひ紫花地丁(スミレ)を歌ふ必ずしも惡しからずだが、大擴張せる日本國の世界に對しヒユマニチーに對する新希望を歌ふのは二十世紀に於ける日本國詩人の責任では無いか、國家の極東に於ける地位を歌はざる可らずでは無いか二十世紀の日本は二十世紀の詩人を有せざる可からずである二十世紀の日本は二十世紀の生命と聲とを有せざる可からずである

過去の英國はネルソンやウエリントンの英國であつた、陸には強く海上の權を握つて居て自由を愛する英國であつたけれども世界や人道(ヒユマニチー)に對して大責任を有して居る大英國では無かつた、テニスンは英國を歌つた、彼が歌つた英國は自由の民が喜んで土地を耕すといふ英國であつた、キーツは英國を歌つた、彼の歌つた英國は春に花笑ひ鳥囀づるといふ英國であつた、スウヰンバーンは英國を歌つた、彼は海を歌つた、然し彼の歌つた海は英國の海軍が主權を握つて居るといふ海で無くて寧ろ詩神が沐浴するといふ海であつた、彼等過去の詩人(スウヰンバーン今日尚ほ生存しては居れど事實の上に於て過去に屬するのである)は活動せる肉と血とを有する大英國の聲で無かつたのである、「英國に日沒無し」といふ最大强國の聲でなかつたのである、大帝國の生命で無かつたのである、而して今日――大英國の大英國たるを自覺した英國はキプリングを得て初めて其生命あるを示す聲を發したのである、日露戰爭に依つて一大擴張を成し極東の權を握つた日本帝國は一大飛躍を成した帝國の聲を發せねばならぬ、其聲を發する詩人は眠つて居るのである

醒めよ日本を代表する大なる詩人と余が絶叫する所以である

日露戰爭は國力を發展せんとする二國の大衝突であつた、而して其大衝突に日本は勝利を得たのである、之を或る意味から云ふと、歐米諸國で批評した如く日露戰爭は自由(フリードム)と壓制(デプレツシヨン)との戰爭であつた、開放的と閉鎖的との戰爭であつた、而して日本は開放的なる自由の旗を擧げつゝ堂々と戰爭して露國を敗つたのであつた、即ち光明が暗黑を敗つたのであつた又或る意味に於ては平民的なるのが貴族的を敗つたのであつた、日本は自由の防護で平民的であつた開放的であつた、

其主張や完全である、而も政治上に於て自由を主張し平民的で開放的である日本帝國の文學の聲は如何であるかと論じて來ると、何處に自由があるか何處が平民的であるか、少しも開放的で無いのを發見せざるを得無いのである

余は此處に詩人と云ふ、其詩人は明治今日の詩人を意味して即ち新體詩人を指すのである、所謂新體詩人は現今日本の詩人の代表者である發句の宗匠や歌人なるものは過去の遺物としか見るの外は無いのである、新體詩人は今日日本國民の聲を代表して居無いけれども代表せざる可からざる責任を有して居て歐米詩界の歩調と同じからむと試みつゝあるのである

日本の詩（新體詩のみならず一斑に云ふのであるが）程貴族的なるものは無いのである、文字の上に於ても日本國民一斑に了解せられず、歌ふ所のものも其社界の人を外にしては了解せられ無いといふ有樣である、今日まで日本の文學史中で日本國民一斑の聲を歌つたといふ詩歌なるのを耳にし無いのである、日本のポエトリーは高等教育を受けた紳士貴女の玩弄品たるに過ぎ無かつたのである、而して新體詩其物――明治今日日本國民の意思感情を歌はざる可からざる責任を有する新體詩人でも昔日の詩人歌人の變形したものといふのみで依然として貴族的であるのである、國民一斑の了解するのを許さ無いのである、平民的であり開放的であつて初めて國民の聲たるを得るのであるのに、新體詩なるものは其一部の人の樂みと見るの外無いのではあるまいか、露國と戰つた日本は自由を主張し平民的を主張したのに、日本國の詩は依然として貴族的であるのである、日本國のポエトリーは日本國の希望と爲しつゝある所のものと合一せざるのである、余は此處に於て二十世紀の日本は二十世紀の詩を有せざる可からず、大擴張の實を擧げたる日本は其實に添ふポエトリー無かる可からずといふ意志よりして先づ詩界の大革命を絶叫せざる可からざるのである、日本の詩界をして平民的たらしめよ、開放的ならしめよといふのである、斯くして初めて日本のポエトリーは日本今日の生命と成り聲と成るのである

日本の中心は朝鮮の京城で無くてはならぬといふ日本國にして、日本のポエトリーは京都は日本の首府であつたといふ過去の有樣であるのである、故に詩界の大革命の起つて以て日本のポエトリーを一大變化せなければならぬのである

余は重ねて云ふ日本のポエトリーは平民的で無くてはならぬ、開放的でなくてはてぬ——別言すれば世界的で無くてはならぬのである

余は先づ新體詩人に勸告するに形式に苦心するを止めて精神上の形式に苦心し、形式を打破して形式といふ獄舍よりポエトリーを出して自由の身となす可しといふのである、大々的自由の制度を詩界に行はしめんとするのである、精神を完全に發達せしむ可し意思をして自由に活動せしむ可しと勸告するのである、自由て完全なる精神——詩の上に於ける精神を欲するには勢ひ形式に束縛せられるのを欲せぬのである、形式に束縛せられた精神上不完全なる今日の新體詩なるものよりは、形式無き自由なる完全なるポエトリーを欲するのである、日本のポエトリーは未だ幼少年代であるのである、少年をして徒に禮儀規則を以て束縛せんよりは寧ろ精神の自由で活動的たらしめんと欲するのである、余は今日大擴張の時期に際して日本のポエトリーをして全然自由の身たらしめんと欲するのである、形式を論ずるのを止めて精神の發達を謀れと助言したいのである

精神の發達に重きを置いて形式を論じ無いのは二十世紀の英文學——詩界の議論であるのである

十九世紀の最後の二十五年間——殊に十年間に於ては如何なる希望を以て二十世紀を迎へむかと苦心したのであつた、而して理想の活動を以て目的とする文藝界に於ては時代の精神を『若返らす』といふのにあつた、吾人の世界は老いた故に青春の時代に復活せしめたいといふにあつたのである、過去の文藝に厭いた故に新文藝に依つて生きた活動をする文藝を起したいといふにあつたのである、此處に新新聞あり新批評あり新滑稽あり新小說——擴張し來れる時代の精神を描寫せる新小說、即ち鐵路で日に千哩も走り五日間で太西洋を横斷するといふ如き新き小說を欲し世界を一つにするといふ樣な劇曲を欲して來たのである、而して詩の批評家は新き詩の起るのを論じ來つたのである

英詩界に於てクラシカル、スクールはブラウニング、テニスンの死を以て一段落を付けたのである、天下は英國の紳士然たるアーノルドの詩に於て不足を感じ來つたのである、生た血を以て滿ち、世界を横行活歩する當代の英國紳士といふ如き精神の詩を欲し來つたのである、スウヰンバーン今倘ほありと雖も寧ろ今日から見ると舊きに屬して新時代の聲で無いのである、新

詩々々其が疑問である、如何にして英詩なるものを改造せんか形式の改造なりといふ時は行を短くしたり長くしたりフートやラインやスタンザ等を改めるの外無いのである、評者は二箇の結論を得た、其一は、舊きに於てはバイブルの如く新きに於てはウヰトマンの如くウヰントマンをより多く優美にし巧妙にして音樂界に於でワグナーが成功した如く詩界に於ても新詩たらしめよと叫ぶのであつた、其二は、形式を云々するよりは寧ろ内容の新奇を勉む可しといふのである、即ち在來の形式（單純なる形式こそ適當であらう）の中に新き目撃（オブザーベーション）と經驗と熱望（アスパイレーション）とを入れるといふのてある、第一にせよ第二にせよ現實（リアテー）を詩中に入れて詩なるものを生きた活動物にせよといふ事に於ては異論が無いのであつた、是迄の詩――殊に古代の詩に於ては理想派である、偶々寫實なるものありと雖も其は今日の所謂寫實派にあらずしてプリー、ラフアエット的の寫實である（プリー、ラフアエット理想と寫實との中間に起つもので理想派から云へば寫實であるけれど、酷重なる意味に於ては左様で無いのてある）是迄の詩人の歌ふ所の時代や場所は古きを選むで詩情を誘ふとしたのであつた、現實なるものを詩的ならずとし文字も實際なる今日といふものより得ずして書物の中から得たのである、然るに今日の時代の潮流は斯かる古い物に厭いた、即ち今日見る所のものに詩情を惹起し遠方の事物に詩を發見するよりは近き足元に發見せんとする様に成つたのである、故に『新詩』はプリー、ラフアット的の寫實て無くてインプレッショニストであるてあろう、現今のライフを詩の中に入れ込むのである、必理學的研究の正直とヴヰジョンのダイレクトネスを持たねばならぬ、字句の優麗秀美なるよりは内容の自由て眞率を欲するのである、又新詩は科學的の影をも有せねばならぬ、詩としての眞價は其外面にあらずしてタッチの正直なるのと詩の上のウォクマンシップのバイタリチーの上にあらねばならぬ

斯くの如きものが二十世紀英詩界に於ける要求てあるのである、英詩といふ老いた人間を若返へらすといふのてある、然れども日本のポエトリーの如く世界的の意味に於て老いて居無い、未だ發達して居無い少年の如きものを徒らに形式て苦しめて其精神を不具にするの必要は無いのである、少年をして禮儀作法といふ形式て苦むるを止めて野外て花ても摘まして精神を完全に發達せしめなくてはならぬのでは無いか

「余は日本の詩界に一大革命者の顯はれて一大飛躍を成した世界の日本を歌はれんことを望むのである

余は今日特に米國詩界の偉人ウヰトマンを想ふのである、ウヰトマンは大なる自信と希望とを以て米國の詩界を濟度せんとしたのであつた、而して彼は成功したのであつた、ロングフエロウやロウエル等に依つて仕配せられて居た美麗纎弱なる米國の詩界をして强壯なるものと改造せんとしたのであつた、彼は破天荒なる散文詩を以て自分の詩を發表した、形式を打破して文學界に顯はれたのであつた、最初は文界の非人(アウトロウ)の如く取扱はれたけれど彼の死するに當りては天下の尊敬を一身に集めて光榮ある一生を終つて今日に至るも彼の大なる感化力は衰へぬのである、彼の自信や希望は大なるものであつた、彼は散文詩に依つて人情を歌ひ平等を歌ひ自分(マイセルフ)といふものを基礎として宇宙を歌ひ神の光榮を歌つたのであつた、米國のポエトリーを自由の身と成し新鮮なる空氣を呼吸せしめ慈愛深き大地に接せしめたのであつた、彼はボストンの寺院やニユウヨークの公園を歌ふには在來の形式に依るを得るけれど大なる米國の天職と希望を歌ふには無平仄なる太洋の自由と天空のスペースが無くてはならぬといふ確信を以て顯はれたのであつた、余はウヰトマンの如き無平仄なる無形式なる詩體に依つてウヰトマンの歌つた問題を歌へといふのでは無いのである、即ちウヰトマンの大確信と大希望とを以て極東否世界に於ける日本のミツシヨンと希望を歌ふ可しと云ふのである、大確信あり大希望あるに於ては區々たる形式豈論ずるに足らんやである、寧ろ形式其物の小なるを感じて來て自然打破せんければならぬのである、ウヰトマンは完全なる精神上の詩を第一にした如く日本のポエトリーも無くてはならぬといふのである、日本のポエトリーを自由のものと成し開放的にし世界的にして以て二十世紀に於ける日本國の現實(リアリテー)と熱望(アスピレーシヨン)を歌へといふのである『詩』てふ言葉を忘れて詩は現實其物であると信ぜしめたいのである、詩は作る可きもので無い、徒に製造す可きもので無いのであつて、詩は感ずるものである、即ち生命の聲であると信ぜねばならぬのである

余は以上の意見よりしてウヰトマンとキプリングの日本國に產れんことを切望するのである、ウヰトマンの自信と希望とを以てキプリングの聲を發するのを渴望するのである、即ち大擴張せられたる世界の日本を代表する國家的詩人の顯はれんことを切望するのである。



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲する者頗る多きが如し歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也吾人が之に多大の費用と勢力とを傾注するもの各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也これ蓋し我國現時の急務なりと信ず

英露の關係

（ノーオエ　ウレミヤ社説）

十月十六日ノーオエ　ウレミヤは英露の關係と題して再び左の如き説を爲せり

數日前彼得堡發の一通信者は西歐洲の各新聞に左の如き電報を傳へたり曰く近頃社會に公にせらるゝ政界の新協商若くは新同盟或は協約等に關する幾多の通信は輕々に信ず可からず是等の通信は多くは偏見にして且つ誇張的なり云々と然るに倫敦よりの電報は此曖昧模糊たる政略的説明に反して最も明瞭に且つ簡短に左の如き事實を傳へたり曰く英國商務大臣は演説していへり若し露國にして亞細亞に關して協商せん事を欲せば英國政府は相當の提議を調査するの準備を爲すを辭せざる可しと

吾人は幾度か英露の關係問題を論議して遂に左の如く斷定せり曰く英獨の反目は日に増し甚だしきを致すは疑ふ可からざる事實なるを以て此際露國に取りての最も便利なる態度は全く局外に立つにあり即ち第三者の位置に立て全く行動の自由を保ち何時にても露國の爲めに便益の最も大なる者ありと認むる時に英獨何れなりとも其係爭國の一方に加擔するに在り斯の如き態度が我露國に取りて最も相當せる所以の者は戰敗國たる者は事實上より最も便宜なる待設的政略を取る可きは當然なるを以てなり

左れど待設的の態度は固より受動的の態度と同視す可からず却て充分に我外交家の自動的働きと明識とを以て何時其乘ず可き好機會の來るとも其機會を確知して全力を擧げて我露國をして其機に乘ぜしむるに在り日露交戰中に我外交當局の識見と行動とは何等の見る可き者なかりし事は明白なる事實なり八月初旬にウイッテ氏が日英新條約の内容如何に關して正確なる事を問合せたる際に我政府は只斯の如き同盟商議の「風説」あり「想ふに活動の範圍擴張せらる可し」と返答したるに過ぎざりき

然るに我全權大使にして當時ポーツマス條約調印前に同盟條約の箇條を確知し得たりしならんにはポーツマス條約は或は別異の者を成立せしめたるやも知る可からず我外交當局者の手腕如何に關しては僅々一二の問題即ち巡洋艦若くは禁制品その他船舶擊沈等の諸問題に就きても我外交當局者は少しも露國の見地を知らず重要なる事件に關しては皆屈辱の讓步を爲せり之を要するに我外交當局者の手腕如何に關して既に歷史は之を明示して此國家有事の際に我外交當局者は一人として其使命を完うし

て其目的を遂げたる者なきを證せり其結果に徵すれば敢て其目的を遂げられざりしには非ざるも吾人に之を傳へし者は彼の日本の如くに其外務者に非ずして外交當局者の門外者（ウイツテ）にして彼は外交官吏の畏怖する所のものを成功せり

交戰中の我外交當局者の此耻辱なる外交と通信上に何等の準備なかりし事を回顧し來れば前記彼得堡發電の通信の如きも寧ろ我外交の不明を暴露する甚だ危險なる者に非ずやと想はしむるなり同電報には全く受動的意味のみ見えて政治は自然に生ずる者なれば何事も爲さず又期待せずとの意の如し

戰爭前には我外交は多少の成功なきに非ざりしも敗戰の結果我露國の外交政略を劣弱ならしむる影響を與へたり左れば若し我受動的態度にして平和成立後も依然として從前の如き者あらんには我外務省たる者何の面目あらんや



THE RETURN.
FATHER—"What, back from the war without a scratch? And I—the Cossacks have crippled me, tho I never left home!"
—*Simplicissimus* (Munich).

談判席上に於けるウヰッテの態度

「平和談判開始の際にウイッテが小村大使の提出したる日本の要求書をポケツトに捻じ込みたりといふ如き話は當時の新聞にも傳はりしがノーオエウレミヤ紙上の談判開始の際に日本の全權大使に對せるウツイテの態度を掲げたるを見るにウイツテが如何に横着に又如何に狡猾に小村大使等を翻弄したるかを察すべきものあり事稍や舊聞に屬すれども之を左に譯載せん

全權大使ウイッテ氏は一新聞記者に左の如き談話を爲せり

其談に曰く談判開始の當初は隨分困難なりき何にせよ小村は當時戰捷國の大使なりと自身に想定して

彼の言ふ事が一も二もなく承諾せらるゝ者と想ひ居れり此際余の取る可き態度は最も冷靜と堅忍とを要する事にて談判開始早々に談判破裂などの不幸を見ざらん事を期するに在りたり最初小村は唯り日本の要求を固く主張したるのみならず其條文の文句さへも彼の望み通りならん事を要求せり然し談判の次第に進むに從て余は漸次談判勝利の徵に向ひ遂に談判の勝利は余が手に歸する事となれり玆に於て余は小村に向ひ左の如く言ひ得るに至れり曰く小村君卿は最初に凡ての事を提供せられたるが今や卿は余に從はざる可からざるに至れりと

小村に對したる余が態度の一斑を話さんに先づ最も眞面目ならざる可からざる第一回の談判は開始せられたり此時余は所謂日本の要求如何を識らざる可らざりき余と卓を隔てゝ相對して坐したる小村は卓を隔てながら其著名なる要求書を余に渡せり余は少しも急かずに其れを手に受取りてザット一見し恰も無用の書類を取扱ふ如くに左まで注意もせずに側に置きたり次で余は他事に關する談話を始めたり小村は怪訝なる顏し驚きて余を打まもれり余が態度は先づ彼に一驚を喫せしめたる者なる可し小村は幾度か談話の問題を轉ぜんと試みたるも余は恰も之を意にせざる如き狀を裝ひたり斯くする間に軈て朝餐の時刻となりたり余は恰も快談に心を奪はれたる者の如くに彼の貴重なる日本の要求書を卓上に置き忘れて席を立て食堂へと赴きたり一書記官は其要求書を持來りて余に向ひ慄聲にて「閣下之をお忘れになりたり」と言ひつゝ余に渡せり余は「ア、さうであつたか」と答へながら無雜作に之を受取り又も何等の注意を拂はざる者の如くに上衣の後のポッケットに押込みたり此時何心なく一寸日本人の顏を一見したるに太く不滿の狀なりき余は食事を爲しながら面白く種々の談話を爲したるも其實を言へば此談話は余の少しも愉快を感ぜざる事のみなりき斯くて朝飯も終り日本人は何れも退席して余一人になりたる時余は靜に要求書を取り出して之を熟讀し之を確に知るが爲めに其全文を暗記せり云々



"DONT CLIMB! I'LL COME DOWN!"
—Baltimore *Evening Herald.*

グリーン博士の講和意見

グリーン博士は大陸の國際法大家なり履書を高橋博士に寄せて日

露戰爭に關し意見を述べられ其講和條件は曾て本邦の諸新紙に掲げたることあり今日より回顧すれば實に價値ある意見なりき、今回又た書を高橋博士に寄せられたれば之を掲ぐ前後對照せば思半に過ぐることあらん

拜啓今回貴國が平和の狀態に復歸せられたる事に就ては單に小生一人のみならず歐洲に於ける貴下の數多き友人の等しく慶賀する所に御座候、莫大なる犧牲を供したる後名譽ある戰捷を得られたる貴國の爲め吾人は猶一層良好なる成果を屬望せしは確かなる事に御座候、此事につきては既に去る二月中ゴッセンサンより差出し候手翰中に當方の輿論たる愚見を陳述いたし置候、吾人は貴下の主編せらるゝ貴重なる雜誌につき大なる趣味を感ずるものにして日本に於ける國際法の發達に大に資する所ありと確信致候

玆に在歐米の貴下の友人が講和に就き猶一層良好なる成果を希望せる旨申上候得共そは決して貴國が軍事的行動によりて其企圖せる主要なる成果を收められざりしと申すにはこれなく候、今日迄歐米の二大陸は其の諸强國の嫉妬により不幸にも曾て協調する事能はざりしが故に成す能はざりし大目的を貴國は單獨に成功せられ候、貴邦の得られたる此絶大なる成果は實に極東の諸國民の獨立を脅かす侵略をして永遠に終局を告げしめたる事に他ならず候、殊に貴邦の誘導の下に幸福と安寧とを啓發すべき全然新規の文明により之につきて最も利する所あるべき淸國は其最も深厚なる感謝をなさざる可からざるものと存候、措て又被保護國はたとへ之に依りて利益を受くべきは爭ふ可からざる事なるも保護關係の程六箇敷きものは無之と存候、されば保護と謂はずして聯合と申し方更に可なる可きかと存候外交軍事關稅の三點に關する日韓の聯合之に加ふるに日本が條約により韓國に課稅す可き特權と財務行政の援助とを以てせば企圖する目的を達する事を得可きかと考察致候

小生一個の私見としては日本は樺太全島と共に其全群島の領有を更に保全せらるゝ事なくしては何の甲斐もなきことゝ存候、且つ又烏蘇里州は其住民より考ふるもまた其風土其位置より見るも全然滿洲に屬す可きものにして滿洲の文明開發の目的よりすれば是非共日本にとりて必要缺く可からざる地方と存せられ候、乍然此等の領土に關しては露國は決して其必要を感ぜざる可く露人は其自己の國家的中心に斯く迄に異りたる遠隔の領地の侵奪に對して企圖せる本來の目的が今や日本によりて成されたる偉業の結果到底成就するを得ざるものなる事を了解し將來太平なる東洋に於て日本の主權を侵害する事の不可能なる事を知悉する以上は此等の領地を重要視せざる可きが故に要するに此等の地方は戰爭に依らずして日本に獲得する事を得可きものと確信致し候終に臨み時時貴翰に接するは小生の最も樂みとする所なる事を申添へ候　敬啓

千九百五年十月十五日

瑞典スティグトゥウルタウランツュに於て

貴下の最も親愛なる僚友

ペー・クリーン

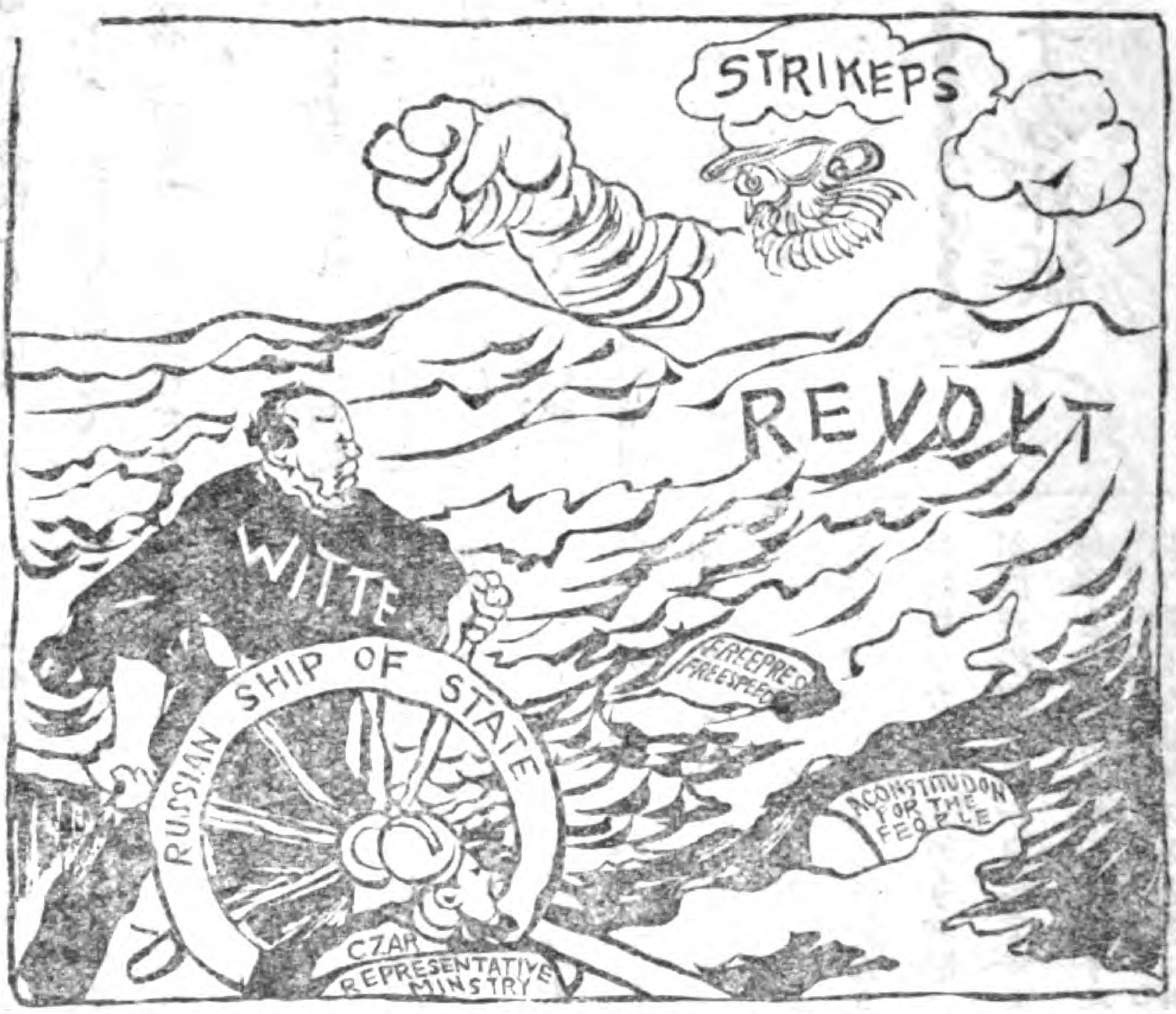
高橋教授

旅順當時の秘密

「グローブ紙」

戰爭進行中は口を噤じて堅く祕密に附せられし事柄の中にて平和克復後追々に公にさるゝものいと多きが中に倫敦發行のグローブ新聞が特に旅順開戰當時の祕密として擧げたるものゝ中より面白しと思はるゝ節を擧ぐれば

▲東清鐵道の先見　東清鐵道の重役間にては一昨年の夏頃より日本商人の動もすれば取引を見合せんとする模樣及支那勞働者の次第に哈爾賓を引上げて南に向はんとする具合を見て早も日露間に危機の切迫せるを看破し其秋取締役ホルワ氏よりアレキシエフ總督及聖彼得堡政府に向けて其見込の次第を報じたるが總督も政府も一向之に取合ず却つて氏に向つて日本が露國を攻擊せんなどゝは思も寄らずたとひ萬々一開戰となるともそは千九百四年(即ち昨年)の春を過ぎて後のことなるべしとのことを返答したりされども東清鐵道にては深く自ら信ずる所ありて堅く前說を固執し中央政府の落ち着き拂ひ居たるにも頓着せず萬一の用意にとて急に鐵道材料の大買占を行ひたり若し同鐵道にして此用意なかりしならんには戰爭中然かく都合よく輸送の便を與へ得ざりしならんといふ



THE CAPTAIN—"MORE OIL, YOUR MAJESTY."
—McCutcheon in the Chicago *Tribune*.

▲アレキシエフの無能　アレキシエフが關東總督の任命を受けしは、ベゾブラゾフの運動によるものにて同人はア大將の如き短見者流を總督の地位に置きて竊に自ら利する所あらんとせしなりといふ、然るに其後ア大將の無能漸く判明せしより政府に於ても棄て置き難しとなし當時參謀本部內切っての「智慧者」と評判せられしシリンスキー將軍を遣はして輔翼の任に當らしめ別に敏腕の聞えある文官シュチエルセナ氏を

して總督府の民政事務を手傳はすることとしたり斯くて陸軍と民政とのとには此等有力なる輔佐官を得たれど不幸海軍の事に關しては此種のとなかりし爲獨斷擅行常に失敗を繰返せり當時の一海軍將校にして目下『ウラヲホストツク』の主筆たるパノフ氏が旅順を以て露國海軍を陥るゝの陥穽に過ずとし百方之が撤退を勸めしもア總督は頑として之に應ぜざりしが如き以て見るべし

▲旅順の亂脈(二) 二月九日の旅順夜襲にて露國最良の軍艦三隻大損傷を蒙りし時旅順口には之を修理すべき職工も機械もなかりしかば盡く之を哈爾賓より取り寄せたり之が爲め其修理結了迄に六箇月を費したり

▲又旅順に於て官吏の間に官金着服の盛んに行はれしは全く公然の祕密にして此等の惡錢は盡く此種の官吏の名義にて露清銀行又は鐵道貯蓄銀行へ預け入れられたりされば近頃に至り露國の諸新聞紙が官金着服の次第を嚴重に取調べん爲此等銀行の帳簿を精査せざるべからずと論ぜるは之が爲とす。

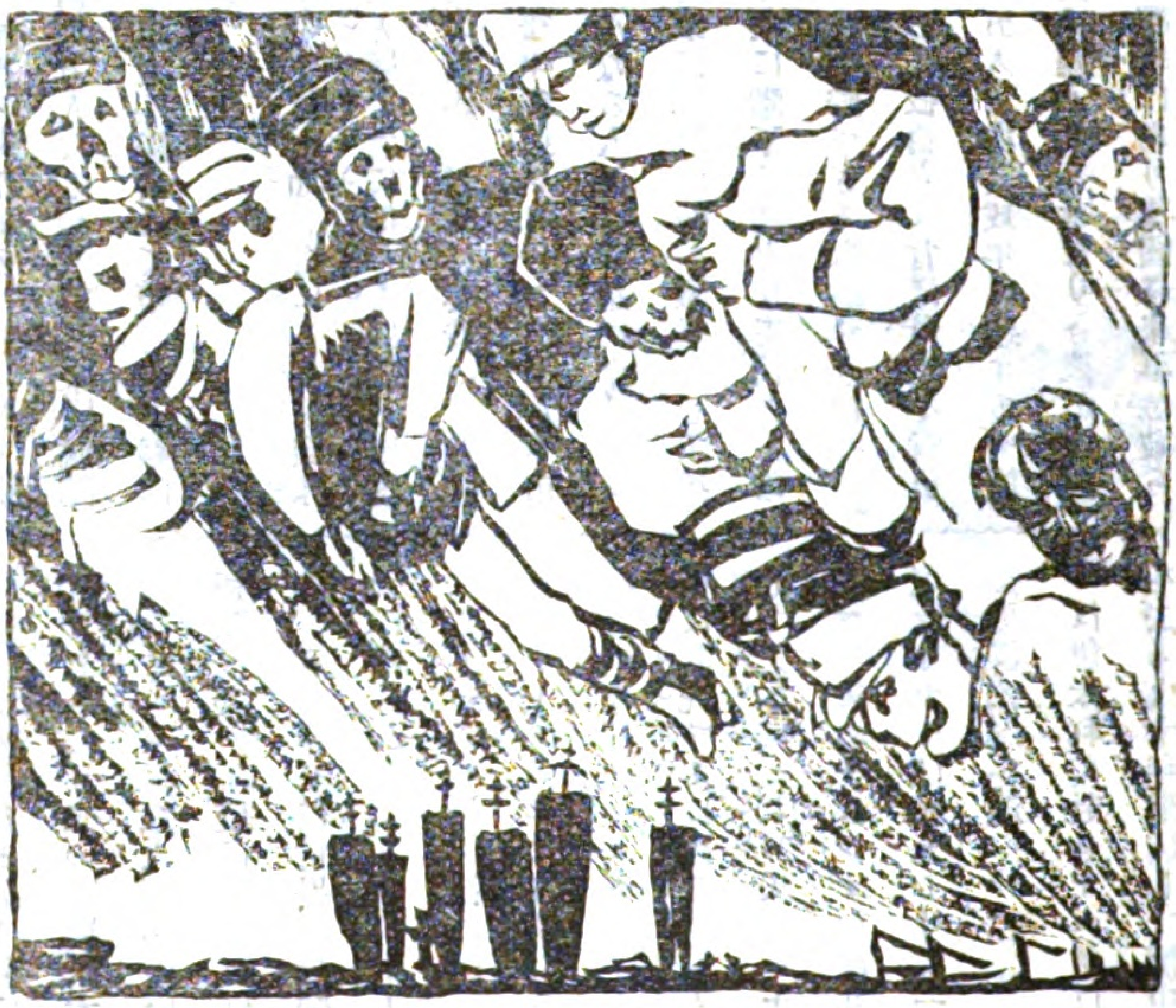
帝國大學事件に關する外紙の評論

ジヤパン、デーリー、アドウアータイザー曰く現下日本國の最高教育機關たる帝國大學をして紛擾の渦中に投じ其活動を中止せしめたる事件は明かに政府當局者が其の政略に基き解釋にして目す可らざる教育界に對し干渉を加へたる拙惡を表示するものなり而して本件の內容に關しては已に公衆の詳知する所にして其の原因を尋ぬれば政府の平和條約に對し公然の反對者たる戸水博士が大學に何等の關係なき國家問題に就き其の所信を公表したるが爲めに其職を免ぜらたるに起因し而して氏の免官は毫も無能若くは職務の怠惰に原因せしにあらざりしなり必然の結果は來れり大學の教授諸氏は大學して政府の不當を鳴らし是れに向つて抗議を試み其の光榮ある有爲の總長を陣頭に戴き一齊に辭表を呈せり此の如き擧動は其の至高なる職務の干渉に對し神經鋭敏なる教授諸氏に取つては實に至當のことなりとす抑も帝國大學は政府の設立に係るものなるが故に吾人は敢へて其の監督の權能を非認するものにはあらざるも今回の處置の當否に就ては恰も頃者ボストン大學の當事者が其の教官の一人が異端の教理を公表したるが爲め職を免ぜられたると同一視せざるを得ず彼等の權能を有するは疑なきも其の處分の如き大學其物に對し公衆の信任を脆弱ならしむ可きや必せり何となれば公衆は必らず大學教授なる者が眞理の研究に一身を委するが如き事なく唯一定の教理に默從するを是れ事とし其の良知を密閉すべければなり且又若し果して斯の如き方法を以て教官を訓練するときは其の學生に及ぼすべき結果は如何ある可き乎殷鑑遠からず露國に於ける學生問題にあり、此際日本國に於て其再演を拱手傍觀す可らざればなり。

ジヤパンメール曰く今や若し大學職員にして其決心を鞏固にせんか彼等

の全勝疑ひなし帝國大學が其の總長を互選することは多衆の適當と認むる所にして畢竟大學の爭點の歸する所此等に依て然るなり而して又現今如斯急激なる變化を來たすべしとは思はれず多分久保田氏の解職を以て此紛擾は解決せらるゝならん然れども幾分大學の爲めには勝利なるべきも其れ以上の改革の前提にあらざるよりは絕對的の勝利と謂ふを得ず吾人は此件に關し大學に向ては同情を表せざるを得ず戸水博士に至つては敢て全然批難すべき點なきにしもあらざるも又同時に吾人は大學に職奉するものが政治的言論を恣にするを得ざるてふ根本的主張に贊成するを得ず而して公衆の利益の點より觀察するときは吾人は明に大學の獨立を可とするものなり

ヂヤパンクロニクル紙曰く戸水博士に關しては若し氏にして此重大なる時期に於て人民中に憤懣を惹起する如き言論の自由を得しならば政府は之れに對し相當の制裁を加ふべきを感じたるべきも吾人の所信によれば如斯場合には充分言論の自由を許すこそ知て得策なりと信ず若し政府にして今日過激なる政論を主張せる教授若くは屬僚に對し懲罰を加ふるの必要を感じ他日に至り他の教授若くは屬僚が宗教上異端の所說を吐露するの場合ありと假定せん乎必ずしも該教授若くは屬僚を免官するが如き手段に出でざるときは其學生の精神上に反照する結果は果して如何ぞや彼等は政府が過激なる政論の批評を嫌忌するも尙ほ宗教若くは醫學の異說を稱ふるに對し毫も關知せざるもの丶如くなるべしと思惟するに至らん故に政府は教官に對し議論の公表を全然監視指導するか又は全然放任するかの二途に出でざるべからず若し後者の如きは時に或は多少の不便ありとするも永久的大に得策なりとす



THE FORGOTTEN ONES.

WITTE—"Russia gives half of Saghalien to Japan. Thattis he only thing shehas lost in the war." —*Simplicissimus*(Munich)

佛國のロスチャイルド

今度我公債に應募したる夫の有名なるロスチャイルド家の一族にして佛國巴里にあるロスチャイルドとは抑も如何なる人なるや近者某米國雜誌は其家系日常を記すこと頗る詳なり今試みに之を譯出して讀者の一粲に供せん

世に奇なる譚多しと雖もロスチャイルド家のそれの如き奇にして又興味あるは蓋し類ひ稀なる可く世界帝王の家系と雖も之に似たるは殆ど比儔を求め難かる可し抑も同家は何れより出でたるか、吾人は其昔のことは之を知らず吾人の今日知れるは十八世紀の後半獨逸フランクフヲルト市猶太人部落に住めりしアンゼルム　マイエルなる人となす是れ今日のロスチャイルド家を興したる其人なり彼は其家に赤色の楯を徽章として揭揚し妻グダシユナッペル及び十人の小供と共に階下に住み凡て物としあれば其何物たるを問はず之を賣り之を買ひ之を貯へざるなかりき曰く、古鐵曰く、貴金屬曰く、古着、曰く古齒而して彼自らは背に荷物を背負うてフランクフォルドを行商せり彼の息子五人も亦其成年に達するや旅商人となれり然かも斯くして作れる富は實に遲々たる者なりき彼が巨萬の富を作りし其第一機會は實に米國の獨立戰爭にあり英國は米軍を破らんが爲めヘッセより兵男を買へり此の仲次をなしたるものは實に夫のマイヤーにして彼は兵員を募集し武器を供給し續々之を英國に送り又ヘッセ公に代りて英國より金を受取れり是れ實に彼の鴻偉の第一着歩なり次いでナポレオン戰爭來る、ヘッカッセル（ヘッセは後に二つに分れたるなり）の國庫金は實に彼自身のものとして使用するを委任せられ斯くして使用せられたる金は利に又利を生めりマイヤーは神聖同盟の資本主となりたるなり夫の歐羅巴大陸を騷がしたる其戰爭の軍用金は實にフランクフォルト猶太人部落のいぶせき茅屋を通じて供給せられ其都度幾分の利潤が夫の茅屋に殘し行けり斯くては古着も彼の店頭を飾らざるに至りぬ、赤楯の家は世界の金融市場となれり其フランクフォルトを歩くや、犬に吠付かれたるマイヤーも今や帝王、政府に金を借して衷心頗る得々たるものあり然も彼は尙ほ小汚き着物に、布製の靴を穿ち首に青色のハンカチーフ、手に古びたる蝙蝠傘を携へてフランクフォルトを歩けり是れ實に今日のロスチャイルド家の祖先なり

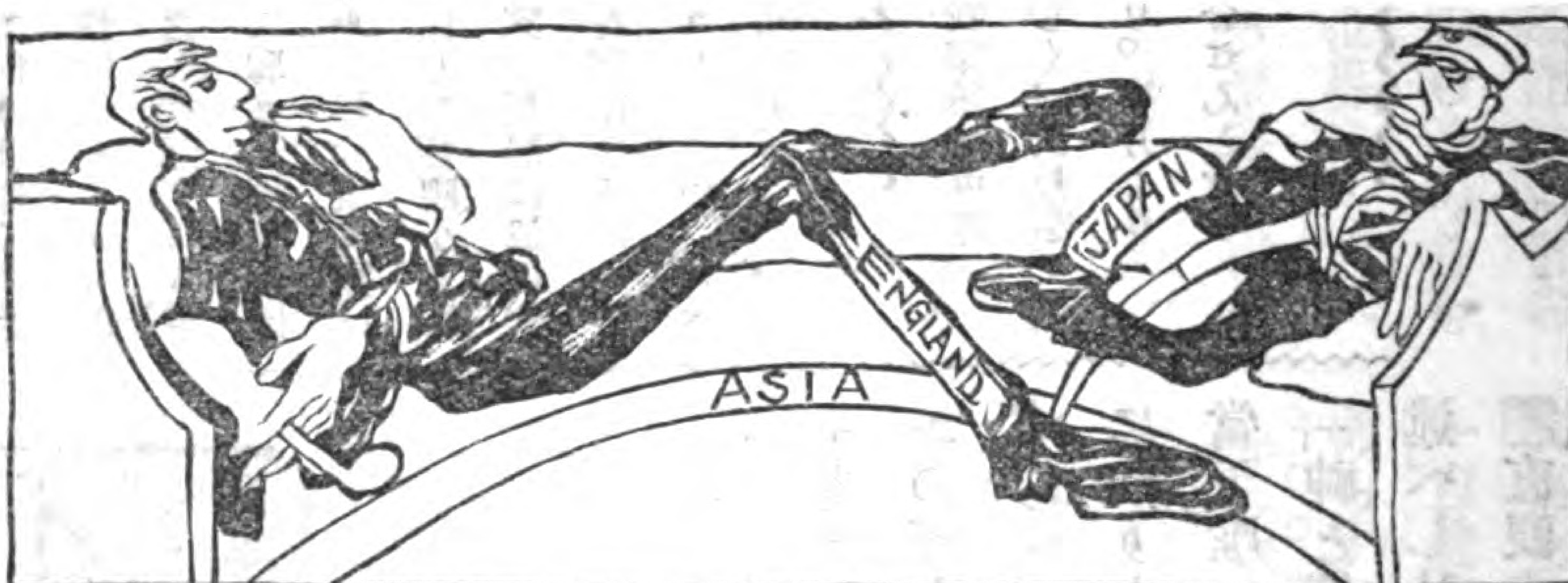
彼は其死するに先ち其五人の子に對し財政的王國として歐洲大陸を分割して之を與へたり夫のシャーレマンの大帝は其征服したる領土を子に分配せり夫のナポレオンは其征服したる領土を兄弟に分配せり而して今や老マイヤーは領土よりも一層永續す可き大帝國を建設したり

長男は獨逸を選べり、ソロモンは墺地利を採れりネーサンは英國、チャールは伊太利に赴きヤコブは佛蘭西に至れりヤコブの巴里に來りたるは今を去る九十年前にして懷中廿萬弗の金を携へたり初めは事業頗る艱難なりき彼は英獨の手先なりとして知られ爲めにナポレオンは常に彼を監視せり今尙ほ警察署に殘れる諸種の報告書は彼に關する幾多の情報を載せたりナポレオンの大敗は五人のロスチャイルドに對し稀有の鴻偉を齎せ

り墺相メッテルニッヒは彼等に對し墺地利の男爵を授けたり而してヤコブはジエームス ド ロスチャイルド男と呼稱せらるゝことゝなれり彼は千八百六十八年を以て沒し次男マイヤー アルフホンス ジエームス ドロスチャイルド其後を繼ぎ佛國に歸化せり然れども彼も亦數月前、鬼籍に入れり

若し諸君にして其希望あらんには容易に此のアルフオンス ジエームス ロスチャイルドを見ることを得たるならん何となれば彼は常に徒歩にてラフイト街なる彼の銀行に向ひハウスマン大通り若しくはカピシーヌ大通を通行するを例としたればなり彼は小柄の老人にして既にヘナ〳〵となりたる黒色の着物に古びたる帽子を被りて顔は黒く皺あり咽部及び鼻下に長き白髯を貯へ一見羸弱にして爛りたる人物なりき

然れども彼の父の佛國に携へ來りたる二十萬弗は如何に成り行きたるか此廿萬弗實に今は驚く可き巨額の金を生めり然れども玆に注意す可きはロスチャイルドの投資方が商工業を主なる目的とせざるの一事是れなり勿論同家が幾多のリンニヤ デユノール其の鐵道を握るに至りたるは事實なりと雖も其專ら投資したるは政治財政的方面にあり是れ最も着實堅確な投資方法にし



A FAIR (?) DIVISION.
The Anglo-Japanese alliance as Furope sees it.
—*Ulk* (Berlin).

て其増殖の遲緩なる然も其性質の堅固なる世に所謂珊瑚礁的投資方と稱するもの即ち是れなる可し同家の財産今は實に四十億圓を越ゆ、換言すれば一〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇法の上にあり換言すれば佛國全體の富力の二十分一なり、換言すれば彼は佛國の得可き利潤の二十分一を年々懷に收むるなり尙ほ換言すれば佛國人口の二十分の一は彼が爲め報酬なくして働きつゝあるなり

彼の建設したる帝國亦偉なるかな、彼は凡ての貴金屬、鑛山、中央銀行、海陸運輸機關を悉く其掌裡に握り土地、家屋を最も多く有するものは市に次いで彼なるなり夫の凱旋門、シヤンゼリゼー、ブーローンニユ森、モンソー公園、ノール停車場附近の街衢は悉く彼に屬し地方にも亦諸所に別墅あり所有土地は合計四十萬ユーカー（一エーカー四段十八歩）にに上る是れヤコブ、ロスチャイルドがフランフオルトより携へ來りたる二十萬弗の今日なり年を閲すること九十年を出でず、嗚呼斯くの如き財産は如何にして積むを得たるか此財産「啻に其額に於て大なるのみならず其性質亦頗る堅確にして之を破壞し去ること到底不可能なり斯く

の如き財產の前には米國の金穴も旗を卷かざるを得ず然れども試みに思へ是れ單に佛國のロスチヤイドル家をのみいふものにて尙ほ此外に同樣のロスチヤイルド四人の國外に占據するの事實を不幸佛國倒るゝとも此財產は壞れざる可く、世の放蕩兒も其財產に對しては之を持餘すなる可し然かも彼も人なり天命は如何ともす可からず金を以て聘せし幾多の國手に侍かれて逝けり是に於てエツアール　ロスチアイルド起つ彼は實に今の佛國ロスチヤイルド家の棟領なり彼由來蒲柳の質にして體軀小く腰曲り一見西班牙邊りの貴族の如く毛はロスチヤイルド家の招牌に違はず赤色を帶ぶ彼の戶外に出づるは極めて稀なり彼の財產を守衞するにあるのみ然れどもロスチヤイルド一家中最も巧慧なるブリユツセルのランベルト　ロスチヤイルド男の彼の側にあるあり能く彼を補佐す

海外新潮記者白す。本月本社に達したる英米の新聞雜誌中譯出して揭載すべき程の價値ある名論卓說甚だ乏しく、止むを得ず時事新報、日本新聞等より轉載せるものあり。來月よりは更に弘く材料を輯め、大に價値ある時論を紹介せんと欲す讀者之を諒せよ。



如是我證

綱島梁川

「神と偕に樂しみ、神と偕に働く。」是れ「吾れは神之子也」てふ一個の眞自覺に立てるものが、開花流水の、おのづから到り得べき悟境にあらずや。竊かに自ら信ずらく、宗敎の極致、信仰の要諦、究竟して唯だこゝに在りと。「神と偕に樂しみ、神と偕に働く。」是れわが當下唯一の生活態也、稱名也、祈禱也、讚美也。「神と偕に樂しむ。」予をして先づ此の一句義の消息を述べしめよ。

（一）直觀すれば、吾等衆生は皆神の子、如來の子として、同じ妙なる天地の調べに心跳るべきものならずや。而

かも世の多くの同胞は、常に色身の迷執に縛られて、天地の太源を仰ぐことを打忘れたり。詩人の所謂「宿習の霜威」に、戀ひしき天なる故里の父を慕ひ求むるの心を閉ぢ塞がれたり。哀しむべし、彼等は全世界にも換へがたき天地の嫡子たる自家本來の權威ある榮座を抛つて、蟲蛄螻の如く淺ましき運命の穢土をさすらふ也。されど見よ、彼等は天なる父を忘れ、無みし、打遺てたるに、彼等が天なる父は、恒久不易の愛をもて、彼等が運命を導き護りたまふにあらずや。彼等は「彼」に負けども、「彼」は彼等に負きたまはず。彼等は彼れを自覺せざれども、彼れは束の間も彼等を忘れたまはず。彼等の迷へる時、彼れはその慈光の燭をさし向けたまふにあらずや、彼等の喘ぎ苦しむ時、彼れはその不可見の手をそと其の重荷に打添へたまふにあらずや。悲しむ時彼亦悲しみ。喜ぶ時彼れ亦喜びたまふ。一切事、一切所、彼れは每に我等と偕に在まして、所謂蔭になり日向になりて、その親ごゝろの大愛を打灑ぎたまふ也。謂ふと勿れ、是れ詩的形容の辭と。あらず、是くの如きは不斷に神の大愛に生くるものの實證語也。釋迦といはず、基督といはず、古來の先覺は、皆この一自覺、一心證を下土に宣べんがために世に出でたり。あらず、彼等が同胞衆生の爲めに打そゝぎたる慘痛の血と涙とが、やがて天地の大愛そのものの火の如き發現實證にあらずして何ぞ。かくて神は、我等が胸臆の裏より、常にその不可見の手もて我等を招きたまひつゝ、「こゝに來よ、而して爾の眞の父を見よ」と宣ふ也。しかも我等は、この雷の如き無聲の聲を聽かず、潮の如き無言の感化を得覺らず、われとわが世の榮えと幸とを打すてゝ、定めなき運命の嵐に、蓬髮亂髮の姿淺ましう、人生の荒野を左迷右行するにあらずや。覺者之れを見る、眼底涙なからんや。乃ち叫んで曰はく、自覺せよと。自覺者畢竟如何の光景をか見たる。

それ一切は神に在りて生く。一塵一砂、神に在りては、皆久遠の大光明也、大法輪也。神之國には死なく、否定なく、破綻なく、空虛なく、不調和なし。詩人乃ち歌うて曰はく、

"Spite of pride, in erring reason's spite,
One truth is cleare—whatever is, is right."

「在るもの皆善し。」是れ實に本地の風光に參したるものの發する游泳歎美の語にあらずや。

「在るもの皆善し。」之れを萬有の相關上、形式上より見るを其の一義とす。見よ、宇宙の間に在るもの、何物か皆おのがじしなる不易の位置を「全一」の大有機系中に占斷せざる。綿蠻たる黄鳥は丘隅に止まるとぞいふ。止まるを知つて止まるは、おのづからなる物の性也。一絲鬆まず、一石錯らず、我等が見て鬆めりとし錯まれりとするもの、神に在りては、やがて無限の充實也、調和也。かくて萬法渾然、皆己れを正して神に嚮ふ。

「在るもの皆善し。」之れを實相所含上、內容上より見るを其の他義とす。こゝには、在るもの皆實相合理のこゝろ深きを謂ふなり。山色谿聲も佛陀金口の眞實語ならずといふことなく、一香一色も實相中道の轉法輪ならずといふことなし。この甚深の理を觀じて、關尹子は曰はく、「一物も天に非ること無し、一物も命に非ること無し、一物も神に非ること無し、一物も玄に非ること無し」と。莊子は曰はく、「道は螻蟻に在り、稊稗に在り、瓦甓にあり、尿溺に在り」と。ポープは曰はく、「神は一髮裡にも心情に於けるが如く充ち且つ完し」と。この類の辭、一々擧げ來たらば、卷をもなすべく、庫にも滿ちぬべし。げに、一微塵裏にも全法界に充實せる神の姿と悅とを圓かに寫し満へて、當處洋々たるもの、やがて諸法實相の光景なるかな。

この實相上の二意義を括りて、我儕再び如是の觀をなして曰はく、「在るもの皆善し」と。夫れ我等が僞也、醜也、惡也と觀ずるもの、やがて神に在りては皆眞也、美也、善也。我等また無常迅速を悲しみ、生滅變化を歎くこと勿らむ。無常迅速や、生滅變化は、是れやがて神が依りて以て常に活き常に働く自性內在の則也、道也。一切轉化の事相、詮じ來たれば、神が自觀の姿也、自交の語也、自運の跡也。そこに何の無常と生滅と虛妄とあらんや。柳は散り〳〵常住の姿美くしう、花は

咲き〳〵實相の意圓か也。一切の事、觀じ來たりて、猛き河波のしばしも止まらざる姿をそのまゝに、湛然として「大いなる現在」の愛の懷に游ぐ也、休らふ也。微塵も曾て失せず、萬法攝取の光偏照せり。あはれ、前影後影、取次に送り迎へて、自家の面目おのづから圓現すなるかの廻り燈籠の姿こそは、やがて實相不盡の燈の光景にもあるかな。物皆遐り旋りて、恒寧不變の神の意ぞ著るき。天地は一個の大廻燈也。森羅色を染めて、永へに大劫の柱を旋る。吾人をして神と共にこの自然と人生とを繞り彩る無限の大燈影を靜觀せしめよ。「物と與に春を成す」萬法の樂意に相參せしめよ。一切はやがて妙也、眞也、道也、神也。鳶飛び魚躍る、復た何の按排ぞ、何の計較ぞ。活機縱橫、而して之れを貫くもの唯だ一誠あり。吾人は則ち羅馬の古哲人と共に讃美の聲を揚げんかな。

嗚呼大宇宙よ、爾に調和するものは凡べて吾れにも調和す、爾に適はしき「時」は、復た吾れにも早からず晩からず。嗚呼大自然よ、爾が四季をり〳〵の生産ものは、凡べてまた吾れの有なり。萬有は爾に出て、爾に保たれ、又爾に歸る。嗚呼愛しきかな神之都」と。

吾人は如是に圓滿自足の神を描きたり。彼れは一切を束ね、括り、結び、充たして、當處に洋々たり。嗚呼美はしくも又樂しきかな、神が萬法自觀の光景や、而して何の祝福ぞ、吾等も亦神の子たるの權能に於いて、不斷にこの天地の大悦に參與するを得べしとは。吾等は神にあらず、吾人をしてこの自大冒瀆の語を呪詛せしめよ、あらず、吾等は神之子也、如來之子也。神之子てふ一自覺は、人類が自己の眞地位を最も明瞭適切に直觀したる語にあらずや。神の子は全能にあらず、彼等に不盡の悲哀あり、されど喜びたのしめ、「吾が天なる父の家には第宅多し。」吾等は神の子たるの光榮に於いて、不斷に神の懷にありて、優々として一切を眺め樂しむを得るにあらずや。神は、吾等最も罪障しげく、迷執多き者のために、其の最愛の嫡子長兄を殺したまふにあらずや。吾等は神にあらず、されど吾等は神と偕に在りて、一切の王者也、所有者也、支配者也。「唯我獨尊」といふ乎、これ吾等が神之子として、神と偕に天地の榮座を分かつの意に於いて眞也。「萬物

吾れに備はる」と謂ふ乎、これ吾等が神之子として一切を彼れより受領し分有する意に於いて眞也。「吾等は何の受領はざるものを有つ乎。」一切は恩寵也。されば感謝せよ、吾等に人生無量の涙あれど、そは凡べて神に在りて拭ひ浄められたるにあらずや。吾等に不言の要めあれど、そは凡べて神に在りて充たされたるにあらずや。噫、爾悲哀之子よ、仰いで天なる父を見よ。天なる父の光榮の國を見よ、爾が渇仰要求せる一切は久遠劫の昔より、一塵も虧けず崩れず、既に業にそこに備へ完うせられたるにあらずや。大愛の父は、吾等が欲し求むるの前より、既に吾等がために一切を充たしたまへり。吾等之れを憶ひて、一念踴躍す。謂ふとを得べし、吾等は未だ得ずして既に得たりと、未だ見ずして既に見たりと、未だ會はずして既に會へりと。「盡日尋春不遇春、春在枝頭已十分」といふもの、移して以て這般靈界の消息に擬すべき也。

されば眞に神を見て神之國を吾が有とせる偉いなる靈界の勇者に聽け。曰はく、「爾曹恐るゝ勿れ、我れ既に勝てり」と。こはこれ堪へがたき人生の重荷に喘ぎ苦しみつゝ向上の一路を辿る世の悲哀の子等に開示せられたる未顯の眞實にあらずや。何等恩寵の語ぞや。げにこの語を發したる勇者には、現實の世の一切の障碍は、復た喪心の源とならざりける也。深く未顯の眞實に游泳せる彼れは、既にそこに久遠劫の初より、光榮ある勝利と充實と法悦とを縦まゝにし得たりければ也。むしろ彼れは、この未顯の眞實を世に宣して、一切衆生を救はんが爲めにこの土に來たれる也。基督然り、釋迦然り、世の偉大なる自覺者皆然り。彼等の使命や決して空しからず。彼等は皆神之人也。かるが故に、彼等は人生最慘痛の死の淵に溢んでだに、尚ほ法音朗々、「我れ既に世に勝てり」と謳ふを得るにあらずや。嗚呼我等は既に世に勝てり、我等は神と偕に一切の王者也、享樂者也。一切は神の大愛の懐に、諸法實相の花と開きて、老ひせず、朽ちず。されば我等復た何をか歎き、何をか悲しまん。我等をして涙の中に笑はしめよ、苦しみの中に樂しましめよ、蹉跌顛倒の中

にありてだに、未見の法悦に優々たらしめよ。我等の涙をして甘美の涙たらしめよ。それ「在るもの皆善也。」そは神と偕に之れを樂しめば也。

「神と偕に働く。」予をして次ぎにこの一句の意を味はしめよ。

「在るもの皆善し」といふ。されど吾人をして輕々にこの語に躓くと勿らしめよ。それ「在るもの皆善し」とは、畢竟ずるに吾人が通常謂ふ所の「在り」と「在るべし」と、「現在」と「當在」との對峙を實相一如の光景に融會せしめて見たる時の語、他語もていへば「現在」と「當在」との高低階を、更に「大いなる現在」てふ一平面に押しならしたる時の語なりと知らずや。夫れ一たび絶對峰上に立つて實在の千波萬波を瞰おろさんか、一切は皆唯だ「在り」といひ「現在」といふの意味に於いてのみ眞也、美也、善也。煙波萬里、蕩々として横に諸法實相の海を開けり。こゝに一不完なし、一罪障なし、隨つて一「當在」なし、一善惡なし。自足の神也、圓滿の神也、充實の神也、大現在の神也。この意味に於いてこゝに「在るもの皆善也」(我等が所謂善惡を超越せるの意味に於いて)不老常住の月、圓かに諸法の花を照らして、淨樂永しへに厭くるの期あらず。されど顧りて諸法實相を差別發展の現實界に織り出づれば、こゝには「在り」と「在るべし」と、「現在」と「當在」との對峙鏗然として現じ來たる。之れを一念の迷とするを勿れ、是れ常識自證の眞事實也。現在と當在、即ち事實と理想との戰を外にして、人生の意義あらず。人生は無窮の戰也、向上といひ、進歩といふもの、皆こゝに發し來たるにあらずや。横より見て實相一如の海と開くもの、縱に仰げば理想の峻峰永しへに天を刺して、分け登る人生の一路、常に崎嶇たり。何が故に實相一如の海が、理想現實の險はしき峰と聳え來たるかを知らず。唯だこの事實に面しては、何人も之れを得否まず。吾人乃ち觀ずらく、吾等は弱し、當さに強からざるべからず、吾等は完からず、當さに完からざるべからず、吾等は迷執之子也、解脱徹底の人たらざるべからず、人生は穢土也、涙の谷也、之れをして安養淨樂の土た

らしめざるべからず、現在の社會組織は不備也、須く之れを改善すべし、現在の國際關係は非也、須く之れを平和人道の關係たらしむべしと。詮じ來たりて人生一切の事、皆この「在り」と「在るべし」との一商量に鍾まる。不可思議なるかな、我等が見て在るべき理想となせるものは、即ち深き意義に於いては久遠劫の太初より既に在るの事實たり、究竟して既に在るの事實が吾人現實の意識に發しては、未だ在らずして當さに在るべき理想たり。いかなれば、この大いなる矛盾（矛盾と言ひ得べくば）を營まざるべからざる乎を神に問はんは我等が分ならず。唯だ現實の世の營みを一夢と觀ぜざる我等は、飽くまでも迷はず、疑はず、既に在りて未だ在らざるこの理想の一途を無窮に蹤ふべき也。故に曰はく、「神と偕に働く」と。

「吾が父は今に至るまで働き給ふ、われも亦働く也。」世界は神の大工場也、大田園也。天意流注の痕、歴々讀むべし。我等神之子の自覺に立つて、大父の經綸に參し、謂ふ所「世界之進行」に一轉歩の力を貢するを得る、何等の光榮ぞや。達者則ち歌うて曰はく「帝生萬物長、使之亮天功」と。我等はこれおの〳〵自家分上の天功を亮くる一個の天子にあらずや。但だ天功を亮けて働くといふ、即ち歸する所は竟に理想と現實との嚴肅なる戰ひならざるべからず。而して現實の世に百缺陷あり、百罪惡あり、これ事實也。誰れかいふ現實の事、在るがまゝにて善也。美也と。罪惡は在るがまゝにて善ならず、殺人は在るがまゝにて善ならず、戰爭非也、帝國主義非也、産業組織非也、文明亦非也現實に百非あり、百不完あり、誰れかいふ、世事一切在るがまゝにて善也と。若ししかいふものあらば、私欲も、利己も、我執も、痴妄も、瞋恚も、顛倒も、一切あるがまゝにて善也と見るべきか如何に。何が故に世界は煩悶し、人類は精進する、他なし不斷に現在を不滿として無窮の理想天を慕ひ蹐るが故にあらずや。世は初めより完からず、人は不斷に理想に躓く（神ならぬ吾等、誰れか亢顏吾れに罪なしとはいひ得る）。世界と人世と、詮じ來たりて大いなる理想發展の歴程な

り。誰れかいふ、一切は在るがまゝにて善也と。若し依然として之れを眞面目に主張するものあらば、そは強ひて一切の事實に眼を蓋へるものなる乎、然らずんば未顯の眞實（予が曩に神と偕に樂しむの方面として描きたる諸法實相平等一如界の光景）に游泳して發すべき信樂の語をば、漫然この現實の差別界に移して發したる混亂の見なるべきのみ。諸法實相の神の國に見たるもの、やがて必ずしもこの現實界の光景そのまゝなりとはいふべからず。現實界には缺陷あり、迷妄あり、隨ひて戰ひあり、進化あり、發展あり、これ事實也。吾人はかの漫然として、この現實界に於ける「在ると」と「在るべきと」と事實と理想との嚴肅なる對峙を沒却し去り、而して一切は在るがまゝに善なりと謳歌する一派の淺薄なる非事實的樂天家に與みせず。彼等は概ね發展進化の思想を闕如せり。彼等は嚴肅なる人生の事實を餘りに輕視せり。（佛教家の思想にこの弊殊に多し）夫れ「在るがまゝにて善なり」てふ語は、一切の理想の實現し盡くされて、永しへに不老常住の「大現在」となれる實相一如の世界を觀じてこそ發すべき達觀の語なれ、信念の語なれ。これ事實也。されど之れと同時に理想と現在との對峙を有するこの差別現實の世界も亦事實ならずや。彼れ固より否むべからず、此れも亦沒すべからず。但だ彼れに於いては、平等に顯現せる神が、此れに於いてはその顯現に高下大小の差別あるなり。道は佛にありて一毫を增さず、凡夫にありて一糸を減ぜずとは、これ我等が未顯の眞實を達觀したる信念上の語にあらずや。現實の事相界に立つていはゞ、凡夫に於ける佛性、神性の顯現は、明かに佛陀覺者に於けるそれよりも貧少なりとせざるべからず。ポープが、神は一髮の中にも心情の中にも同樣に充實せりと觀じたるはむしろ信念の語也。事實に於いては、神が二者に於ける顯現の內容に、多少厚薄の差あると、誰れか否まんや。耶蘇基督に顯はれたる神はイスカリオテのユダに顯はれたる神よりも大い也。釋迦に顯はれたる佛性は提婆に顯はれたる佛性よりも大いなり。是の如くに觀じて、現實界に於ける一切美

醜善惡の價値、森然として其の色を岐かち來たる。漫に美醜善惡の價値を拂拭し去ること勿れ、價値は畢竟現實の一切物に於ける佛性顯現の多少、神性發展の高下より發し來たる眞實無妄の差別に非ずや。吾人は信念の世界に於いては、一切の價値を超越し（統一的に）事實の世界に於いては、萬殊の價値別を認識す。彼れも眞實無妄、是れも亦眞實無妄。信念を以て事實を空視し抹殺すること勿れ、寧ろ吾人をして信念を以て事實に勝たしめよ。信念に立つて事實と戰ふは吾人の態度也。漫に善惡の價値別を輕視すること勿れ、價値の色彩ありて人生一切の事、始めて意義あり、向上あり、發展あり。

嗚呼誰れかいふ、人生一切の事在るがまゝにて善也と。一切は在るがまゝにて善ならず、之を善ならしむるは吾人の信念也。理想也。古人も亦、神を信ずるものには、一切の事、皆働きて益をなすといへり。事實は信念に打勝たれてこそ始めて善美の光を放て。我等に「世に勝てり」の信念なくして、いかでか「一切皆善」の大觀あることを得んや。吾人は吾人の理想信念に立つて、事實と戰はざるべからず。戰つて後にこそ善あれ在るがまゝに善なるにあらざる也。故に曰はく、神と偕に働くと。

予は更に上來の觀を一自覺に攝して以爲らく、吾人の活動には常に大安息あり、吾人の戰には常に大平和あり、何が故ぞ。吾人は神と偕にこの世の理想現實の最嚴肅なる戰に參すると同時に、又神と偕に未顯の眞實に游泳して、「萬法皆善」の法悅を分有することを得れば也。内、常に充實の樂を湛へて、外、常に健鬪の誠を有するは吾人が理想的態度也。實相之神（法身佛）と偕に悅樂し、理想之神（報身佛）と偕に勞謙す。彼れはスピノーザ、婆羅門等の神にして、此れは正義一貫之力を見たるマッシュー、アーノルドの神、若しくは世代を通じていやのぼりゆく一大目的を觀じたるテニソンの神、乃至は「人は一部に於いてあり、全部に於いてあることを望む」と歌へるブラウニング等の神にあらずや。一を觀美的といふべく、ば他を倫理的といふべく、一は常樂の大現在を湛へたる法性之神、他は火の柱、

雲の柱となりて、不斷に吾人を彼岸に導きたまふ理想の神進化の神也。而かも究竟して、唯だ一乘實有の神の、二面の世界に顯現して、我等衆生が渴仰の標的となれるものに外ならず。吾人の神は、尊者オーゴステンの所謂「常に働きつゝ常に息へる」神也、「常に求めつゝ而かも一切を有てる」神也。この意味に於いて吾人の神は一體二面の神也。一面の神に參しては、優々として樂しむ、わが世の春は永しへに寂びしからず。他面の神に參しては、堂々として働く、われらが氣力則ち餒ゑじ。故に曰はく、神と偕に樂しみ、神と偕に働くと。

夫れ未顯の眞實を達觀して「一切皆善」の信念を有するものにありては、人生に於ける理想現實の戰そのものが、佛者の所謂自然法爾の發動也、彼れにありては、偉大なる積極的活動そのものが、やがて大慈恩寵のおのづからなる流露也。こゝには最早自力も他力もあらず、我が行ふ所が即ち神の行ふ所、我れ生くるにあらず、神我に在りて生くる神我一如の自在境也。如是の人も、倘ほ時には理想の一路に躓くとありぬべし。世に在りては、誰れかこの苦き涙なからむ。されど、神を信ずるものの涙には、常に光輝あり。彼れは敗るゝと雖も、常に勝てり。神と偕に樂しみ、神と偕に働けば也。而してこれ實に理想を單に理想としてのみ追求する倫理道德の解し得ざる所也。(完)

綱島氏の病躰近來殊に勝れず。醫師に他人と面談するをさへ禁ぜられて、一室の裡朝夕藥餌に親まる。而かも氏の約を守るの固き、强て筆を執て此一大雄篇を寄せらる。氏の信仰、佛の醉を含みて耶の英を咀み、スピノーザの純を探りてオーゴステンの粹を拔き殆んどあらゆる思想の精髓を咀嚼して、こゝに渾然たる一家の宗敎觀をなす。讀者、乞ふ此人格高き哲人の敎訓に聽く所あれ。

(編者志るす)

予の愛讀書

文壇の諸大家が如何なる書を愛讀せらるゝかを知るのは非常に興味の多いことで且つ有益のことゝ思ふ。て記者は文壇の大家を訪ふ毎に必ず其愛讀書を聞き、其都度に筆記して置いたのが大部多くなつた。次に掲載するのは即ち其一部で、この後も續いて掲載したいと思うて居る。

△夏目漱石氏

愛讀書は何だと聞かれると困る。僕には朝夕巻を措かずといふやうな本はない。

どういふ文章が好きかといふのか。それなら少しはある。

僕は漢文が好きだ、好きだいふても近頃は餘り讀まぬ。然し日本の柔かい文章よりも好きだ。今でも暇があれば讀みたいと思うて居るが、暇がないから讀まぬ。アーいふ趣味は西洋にも一寸ないと思ふ。

所謂和文といふものは餘り好かぬ。又漢文でも山陽などの書いたのは餘り好かぬ。同じ日本人の書いた漢文でも享保時代のものは却て面白いと思ふ。人は擬古文といふて輕蔑するが、僕は面白いと思ふ。

西洋ではステヴンソン(Stevenson)の文が一番好きだ。力があつて、簡潔で、クドクドしい處がない、女々しい處がない。ステヴンソンの文を讀むとハキハキしてよい心持だ。話も餘り長いのがなく、先づ短篇といふてよい。句も短い。殊に晩年の作がよいと思ふ。Master of Ballantraeなどは文章が實に面白い。

ステヴンソンは句や文章に非常に苦心をした人である。或人は單に言葉丈けに苦心をした處が後に殘らんといふ。さういふ人はどういふ積りか知らぬが、ステヴンソンの書いた文句は活きて動いて居る。彼は一字でも氣に入らぬと書かぬ。人のいふことをいふのが嫌ひて、自分が文句をこしらへて書く。だから陳腐の文句がない、其代り餘り奇拔過ぎてわからぬことがある。又彼は字引を引繰り返して古い人の使はなくなつたフレースを用ひる。さうして其實際の功能がある。スコットの文章などは到底比較にならぬと思ふ。スコットは大きな結構を造るとかいふことにはうまいが、文章に贅澤な人からいへばダラダラして讀まれぬ。

メレヂス(Meredith)の話をせいといふのか。彼は警句家である。警句ーといふ意味は短い文章の中に非常に多くの意味を込めていふことを指したのである。エピグラムなどでは彼は一番にエライ。往々抽象的(アブストラクト)なアフオリズムが出て來る。非常に意味の多いのを引延

ばして書かぬから、繋ぎ具合、承け具合がわからなくなる、のみならず其れ丈けの頭腦のある人でなければよく解らぬ。僕等でもわからぬ所がいくらもある。メレヂスはたゞ寢ころんで讀むべきものでない、スタヂーすべきものと思ふ。必ずしも六つかしい所のみではないが到底讀みよい本とはいはれぬ。

メレヂスは第一人の性格をフィロソフィカリーにアナライズすることなどは實にうまいものだ、又次には非常に詩的な所がある。詩的なスチュエーションをつらまへて巧みに描寫することがある。それはメレヂスのユニックで、メレヂスの前にメレヂスなく、これから後も恐らくメレヂスは出まい。スチブンソンは文だから眞似手が出るかも知れぬが、メレヂスは頭だからあーいふ頭を以て考ふる人が出ない中はあーいふ文は書けまいと思ふ。然るにあーいふ頭の人はなか／＼世に出ないものである。恰度或人はマコーレーは澤山出るかも知れぬがカーライルは一人しか出まいといふたやうに、スチヴンソンは澤山出るかも知れぬが、メレヂスは一人しか出ないかと思ふ。彼の作の中で Egoist と Vittoria などは最も面白いと思ふ。

△長谷川二葉亭氏

僕は文章ではガンチャロッフ(Goncharoff)が好きであつた。ガンチャロッフの文章の好きな點は其文調にあつた。ガンチャロッフの文調は少しくモノトナスの弊があるから、あれが僕の理想であつた譯ではないが、然し彼は或點に於て文調で成効して居るから自分も一つ日本文で文調を出したいと思うて、文章を書く時は文調が恐ろしく氣になつた。其當時の考では勿論日本文にも文調がないではない、所謂語呂―語呂は即ち文調である。然し日本の文調といふ奴は著しく明かではない。ないことはないがドウモハッキリせぬ。非常に上品で殊によると西洋の方が野卑かも知れぬが、ハッキリあらはれぬから聲を出して朗讀すると日本の文章はダラ／＼／＼して居るやうに聞え、どうも變化が乏しく抑揚頓挫が缺けて居るやうに思はれる。然るに歐文―歐文は全體さうだが殊にガンチャロッフの文章に

なると默讀よりも音讀した方が面白い（上手に讀みさへすれば音讀の方が面白い）それは自分の考のみではなかつた、と云のは嘗て學校時代に教場で教師がガンチヤロツフを讀んで呉れたとがある。本は只一冊しかなかつたので我々生徒は本なして讀むのを聞て居る、其教師は實に讀むに上手な人であつたが面白くて堪らぬ、あんまり面白かつたから其本を借りて歸て面白い一節〳〵を默讀して見た。所がもうノヴエルチーがなくなつた爲めかも知れぬが教師が讀んだ時程興味がなかつた。然しそれにはこういふ理由があらうと思ふ。日本の義太夫でも同じ文句を上手な太夫が活かして語つたのは面白く、下手な太夫が殺して語つたのは面白くもなんともなく實に詰らぬと思ふ。夫れ故に文章も朗讀法によつて生きたり死んだりすることは事實であるが、文章によつては或程度までは朗讀の巧拙に拘はらず文章其物の調子があつて、從て默讀をしても其者に調子が移つて、どんなに殺して見ても調子丈けは讀む者の心に移る文章がある。それは調子を味ひ得る心と味ひ得ない心とによつて同じ文章でも面白く讀まれると、左程でもなく讀まれるとの差はあるが、其點からはガンチヤロツフの文章には著しく面白い所あるは事實である。只下手に讀めば讀み崩す恐はあるが、それでも他の人よりも遙かに面白い。これは自分一人のみならず、同窓の人が悉くさう感じたのである。自分は其文調といふ點に於てガンチヤロツフは一番好きであつた。

○想の上に於ては露國の小說家中ドストイフスキー（Dostievsky）が一番好きであつた。どういふ點で好きかといふと第一は無論あの人の心理解剖であるが、今一つはあの人の一種の宗教趣味であつた。其中でも最も好きであつたのは「罪と罰」（Prestplánie i nakazanie）であつた。あの小說の想は一體人間の過ち—殊に若いものには有勝ちのことであるが—は人間が多くエライものにならんとする希望である、一生の標準はたゞたゞエライものにならんとするにあるのはよくないといふことを說いたのである。

小說の主人公ラスコーリニコフといふのは非常の神經質の大學生であるが、然し或意味からいへば彼は小奈翁である。俗界の權力に銘々の良心が縛られて服從するのは甚だ意氣地なき話だ、苟も各自信ずる處あらば假令俗界の權力と衝突して禍其身に及ぶともそんな事は頓着すべきでない、自分の信ずる通り實行する勇氣がなければならぬといふのは彼の根本思想である。即ち人生に處するに理を以てせんとする人である。其議論は成程尤ものことで道德上からも非難する處がないやうであるが。さういふ心持で世を渡らんとするのは大變間違つて居る。人間の依て活くる所以のものは理ではない、情である。情といふものは勿論私情の意にあらずして純粹無垢の人情である。人間の世に處し、依て以て活くる所以は實に此情にある——といふことが此小說を讀むと、理屈として心にわかるにあらずして自然と心に浸みて來る。勿論第一義ではなんともかんともいふにいはれぬ心持がするのであるが、第二義に下つて智識で說明すれば、さういふことが含まれて居る。然しあの小說を讀んだ刹那にはそんな道理などが浮ばず、たゞ恍然として今迄の自分が甚だ誤つて居つたやうに感じて、人物が一段上つたやうな心持がして、少くも一週間や二週間は他の人が人世に出頭沒頭して苦慮煩悶するのを憐れむ念などが起る。純文學の上からいへば、あゝいふのは所謂傾向小說といふ者かも知れぬが、然し當時は非常にあの小說が好きであつた。それで當時はさういふことを思ふたのである、聖書とか、經典とかいふものは人生の意義を書いてあつても說明なしには人生の意義を感得させるに都合惡しく出來て居るが、小說といふものは實に說明なしに人生の意義を感得せしむる最も都合よきものである、小說は宗教以外に於て宗教の眞似の出來ぬ働きをするものであるといふ信仰を持つて居つた。ドストイフスキーの小說を讀んだのみで、さういふ信仰を得たといふ譯ではなく、其前からも類似の考があつたのであつたが、「罪と罰」を讀んだためにひどく其感じを强めたので、從て當時はひどく彼の崇拜家であつた。然し今に

なつて見ると少し怪しい者と思ふ、然らば今はどう思ふかといふことは今はいふまい。

又支那の文章では魏叔子、日本の文章では芭蕉（彼の氣韻が好きだ）が好きてあるがまァ此位にして置きませう。

△藤代禎輔氏

此頃は餘り新らしいものを讀みませぬが、近來讀んだ中てはリール（Riehl）の短篇小説など面白いと思ふ。リールの小説は十一世紀頃から十九世紀に亘る風俗習慣—其時代の文明を書いたもので文明史小説（Kultur-historischenorelle）といはれて居ります。中には隨分利益になるものもあり、又飜案でもしたら面白いものが出來やうと思はれるものもあります。

時代の文明と申しましたが例へば貴族と百姓の衝突だとか、税吏が苛酷に税を取立てる樣とか、町人百姓が自分の權利を主張する樣とか、つまり當時の人情、風俗、習慣などがわかるやうに書いたもので、たゞに敎訓的てはなく、趣味があるやうに出來て居ます。尤を敎育しつゝ自分がよくなつて行くといふ話などは餘程よく出來て居ました。文章もなか／＼氣が利いて、イヂオマチックて、少し慣れると讀みよいのてす。風俗史文明史などが大變好きな人て、それに關する論文も數篇ありますが、私は論文の方は嫌ひてす。小説の方は面白いと思ひます。

昔はゲーテ（Goethe）が一番好きて、殊に小説を喜んて讀みました。ゲーテの殊にエライと思ふのは景と情とよく調和して、景は情を助け、情は景を活かすといふ所にあるやうに感じられる。ミニオン（Minion）の歌てもあの詩丈けてよめば左程てもないが、ウキルヘルム、マイステル（Wilhelm Meister）の中て讀むと前後の事情がよくわかつて、心持が自然其感情を受け納るゝに都合よくなつて來て居るものてすから、一層感じが深いやうに思はれます。

又日本人は餘りいひませぬがジアン、ポール（Jean Paul）なども面白いと思ひます。尤もあの人のを讀むには根氣がなければなりませぬ。ユーモアはあるが其

れを見出すにはなか〱の骨て、恰度泥の中で貝を拾ふやうなもので、汚ないものをサン〱掴んでからでなければうまいものはとれぬといふ小說。然し其面白い所々を譯して見たいと思うて居ました。

△幸田露伴氏

僕の愛讀書は何だとのお尋ねであるが、實は甚だ答へ惡い問題で、今では何々云々の書と確然と名を指して申上ぐる譯には行きませぬ。と申すのは昔は隨分愛讀した書もあり、又朝夕卷を措かずといふやうなものもあつたのですが、今は全くさういふことがなくなつたのです。

今は何でも彼でも手當り次第讀みます。之が格別の愛讀書であるといふとが出來なくなりました、一體書を讀むにも僕等には二々通りあります。其の一つは僕等のやうなことをして居るものには何の事でも一應は知て置く必要があるので、例へば弓とか、髮飾とか、持物とかいふやうな極く些細な事物にまで亘つて雜駁な智識をも貯へて置かねと必要な時に困る。普通から心を用ゐて讀み調べておいて、いざといふ時に役に立てねばならぬのです。て、さういふ意味合から申しますと總ての書物は皆わたくしに取つて愛讀書であるといひ得る譯になるかも知れぬ。

然し又他の一方面を申しますと、自分の文章の助にするとか、思想を攄くる爲にするとか、又は氣合の持ち方の爲めにするとかいふ上では自ら彼よりも此を多く讀み、彼よりも此を多く手にするといふことが出來て來る譯でありまして、自然わたくし等にも愛讀の書があるわけになります。然しさうなるとまたわたくしに特別な異つたこともありません、大概の人の嗜好は同一なもので、例へば史記だとか、論語だとか、矢張り誰しも讀む本を讀むのです。一體僕などは嗜好を固定させては宜しくないので、信仰は仕方がないが嗜好は年々歲々に變じさせた方が宜いと考へて居ますので、或時は或本を大變愛讀するが暫く經つとまた他の本を愛讀する、文章の助とするものでも思想の藥とするものでも、品性修養の糧とするものでも、皆一概にき

メルといふことは不可と信じて居るのです。

然し其中でも品性の修養に資する方の本は餘り變りやうはありませんが、これは極めて普通平凡の本で一向格別のものでなく、誰でもよく讀む書である。思想の方の本は成るべくいろ〳〵の點へ範圍を擴張するのであるがこれも時によつて大變違ふ。或は非常の厭世的のものを讀み、或は非常の樂天的のものを讀む。時には極めて實際的のものを繙き、時には極めて理想的のものを繙くので、其れを讀んだり味はつたりする時は非常に其本に執着して居る、朝から晩まで本の中に寢たり起きたりして居るといふやうにやりますが、卒業して了ふとまた他へ移ります、

文章の本に至ては尙更ら其轉換が甚しい。どうも一つのものを讀んで居ると自然に其香ひが移るものです香ひが移るといふと受動的であるが、能動的にいへばいくらか其精髓を取ることが出來るものです。今少し皮肉にいへば其聲色が自然に遣へるやうになりますものです。一つの本を讀んで其聲色が遣へるやうになれば其れを廢します。しかし聲色つかひて終りたい心持はしませんものですから、出來るやうになれば手から放します。

僕などの愛讀書は極正直にお話しすれば以上の如しで別に愛讀書と定まつたものはなく、或時は理屈の込み入つたものが好き、或時は至極暢氣なものが好きと、始終轉換して居るのである。又實際の必要上からいふてもこう轉換せぬと困るので、時々一つの書が餘り好きになり過ぎると、ドッコイショ之のみに耽溺してはいけぬと思ふ時さへある位であります。

怪物傳（一）

覆面冠者

江湖に放浪せる一寒生、某、筆を中央公論に執るに當り、怪物傳を叙せんとす。怪か怪か。生理、心理の學術、進歩せる二十世紀の今日、未開野蠻の人種が、妄想せるが如き

怪人なる者の存ずべき筈あるなし。然かも敢て怪物傳を敍せんとするもの、羊頭を掲げて、狗肉を賣るの類のみ。讀者、至大の希望を囑せずして可なり。

* * * * *

頭山滿

昨年、九月五日、東京に起つた燒打の騷擾(さわぎ)は維新以來、世人の最も眼を驚かした出來事であつた。德川氏の初代に、由比正雪等は、之を行はんとしたが、中途にして破れて、爾來、二百幾十年間、僅に大坂の地に、大鹽平八郎が、實際に示したのを外にしては殆んど見なかつたのである。然るに、憲法行はれ、議會開かれ、露國と戰ふて、有史以來、未だ曾て有らざる大捷を博せる聖代の今日、忽として、燒拂の事實に會せんとは、余輩の夢にだも期しなかつたのである。

之を明治闇黑史の著者に聞けば、明治初年にも、屢々政府顚覆の手段として、陰謀者の間に燒拂の計畫が有つたやうに言つてをる。明治三年、公卿愛宕通旭等は、九州及京都の同志と連絡を通じて、東京市街の燒拂を企てたとが有つた。明治六年、征韓論の破裂するや、土佐の少年、某々等は、同じく燒拂の實行に取り掛つたともあつた。降つて官有物拂下の生じた十四年にも、其處(そこ)等に燒拂の徵候があつたやうに聞いてする。然れども、一として、十分に、實際に現はれなかつたのに、二十世紀の初頭――兀として、亞細亞の一角に一大强國を形作れる、今日の我國に明治初年にだも見えなかつた燒拂の騷擾(さわぎ)が演ぜられたのは、奇怪千萬の事共ではないか。

そして、余輩は這の現象に怪異の念を挾むよりも、此の事實を演じた人物に想像を費やして、無限の怪異と、趣味とに打たれたのである。事實は、人物の反映！余輩は、今日の時代と、十八世紀の遺物たる此の燒拂の事實とを對照して、その間に示してゐる矛盾に滑稽を覺ゆると同時に、此の矛盾を胎み出した一個の人間、若くは一團の群類に、無限の意味を寄せてゐる。

知らず、文華の燦然たる今日、此の矛盾を意匠とせる大芝居を打てる、筋書者は、誰ぞ。目下豫審の決定を見て、その人物を明らかにすることは出來るが、河野廣中、大竹貫一、山田喜之助等の諸人は、その筋書者として、政府の嫌疑を受けて居るやうに見ゆる。此の數人は國民大會の發起者であつたから、正に嫌疑を受くべき位置に蟠つてゐる——或は、此の諸人は、筋書を書いたかも知れぬが、余は當夜、湯島岡上に立ち、遙に猛火の炎々たるを眼にして、國民大會を連想せると共に、不思議と、或一種の人物の風采が現然(ありあり)と、腦中に浮んだのである。

或一種の人物とは、即ち本稿の主人公、明治年代の大怪物、頭——山——滿。諸者よ、誤解する勿れ、余は法律上の意味よりして、頭山滿を以て、燒拂事件の筋書者なりと言ふ者でない。唯、彼の騷擾を一冊の小說として、その小說に適當の主人公を想像せば、頭山滿の人物が、最も恰好なりと空想したのである。乞ふ空想中の頭山滿を描いて、怪物傳の第一に充てよう。

* * * * *

頭——山——滿、といへば、如何にも重々しく、そして、何んとなく、鮮やかに聞こゆる。然れども、その人物は、雪の如く閃けるのみにして、その正體は、甚だ朦朧として居る。彼は向陽義塾を開きたる福岡玄洋社の首領で有る。然れども、未だ曾て青年を集めて、書を講じたることなく、また何人といへども、彼を以て、教育家とする者は無い。然らば、彼は政論家であるか犬養毅も、彼の友人である、佐々友房も、彼の友人である、河野廣中も、彼の友人である。而して彼の青年時代には、民權運動に從事せることあり、近くは對露同志會等に關係して、新聞紙上に、其の名を唄はれたのを見れば、彼は一種の政論家であるやうにも見ゆる。然れども、余は未だ彼の口より政治意見なる者を聞いたことが無い。彼は、政論家の間に、その顏を現はすこと有るも、床の置物の如く、上座に席を占むるを外にしては、何等の行動も示さぬ。然らば、實業家であるか

北海道に、九州に、幾ッも炭礦を持てゐるのを見ると、實業家であるやうにも思はれる。併しながら、炭礦を有つてゐるといふ丈けて、自ら算盤を把つて、鑛業に從事したといふことを、ついぞ聞いたことが無い。

頭――山――滿。彼は、そも〳〵何者であるか、政論家のやうであつて、政論家でもなく、實業家のやうてあつて、實業家でもなく、無論、教育家でもない。そして、その交際してゐる人物を調べて見ると、種々多様の人物を包容してゐる、平岡浩太郎、金子元三郎のやうな男とも交れば、京橋に三興社を創立して、石油事業に關係してゐる杉山藤丸や、北海道に幅を利かせてゐる結城虎五郎の如きは、曾て彼の恩惠を受けた門下生かといふと、岡本柳之助、大井憲太郎、遠藤秀景のやうな連中とも附き合つてゐる、子爵高島鞆之助とも懇意であれば、谷子爵とも昵懇、兒玉參謀長とも親しければ、金子男爵とも知り合つてゐる。特に故近衞公爵とは最も親かつたやうてある、なほ高利貸とも親んで居れば、待合の女將とも昵懇で有る。そして何れの階級に於ても、一種の尊敬を以て待たれてゐるから不思議ではないか。

就中、待合の女將と、高利貸とには、最も尊ばれてゐる。恐れられてゐる。彼は如何に多大の金額を懐中にするも、世の凡俗者流のやうに、別莊などを建てぬ。然かも、彼は赤坂氷川町に、妻君の名――頭山峯尾の名を以て、住所を定めて居るが、少しく懐中に餘裕あれば、濱の家に入り浸り。左様だ、彼は別莊を持たざる代りに、待合は、彼の最も氣を緩うする別莊で有る。今は昔、都下に喧傳された洗ひ髪のお妻を根引して、滿都の男女を艶殺したこともある。そして伊藤博文のやうに、手當り次第の襤褸ッ買でなく、斷然と、一人の婦女を定めて、決して他に手を出さぬのは此種の人物には珍らしい。

　て、その遊ぶ模様が、ちよと變つてゐる。十人も、二十人も招んで、大平樂。大圓卓を中央に、どつかと座つて、例の、むッつりした顔を向けて、靜かに、美人連の打ち騒ぐのを眺めてゐるといふ風。唄も出ねば、

三昧も入らず　大將酒を好まねば、底拔けの、馬鹿騷も始らず、極めて肅然としてゐるが、その癖、座がしらけるといふことのないのは、之は是れ頭山一流の遊蕩法、美人連は、何れも興を催ふして還るので、濱の家の女將は、ほんに、頭山樣は、不思議な御仁ですと初心のやうに、不思議がつてゐる。

頭山の人物に、服してゐるのは、待合の女將なりと言へば、恐れてゐるのは、蓋し高利貸であらう歟。高利貸！、高利貸の眼中には、王公なく、將相なく、何れも眼下に睥睨して、權威を縱にしてゐる。今は臺灣の民政長官と爲つて、懷中を煖めてゐる後藤新平でもチオドラ孃と結婚して、情交の上に、日英同盟を諮據立てた艷福家尾崎行雄でも、犬養毅でも、河野廣中でも、日本の外交を一人で背負つて立つてゐる彼の小村壽太郎でも、一度は皆んな此の高利貸に蔑視された連中で、若くは蔑視されつゝゐる連中で、特に、大井憲太郎の如きは、その全盛時代には、指の如く、關東の健兒を扱つてゐたが、から生意氣地なく、高利貸に對ふと、靑菜に鹽の、ギヤフンと參つたのである。然るに、獨り頭山滿は、常に高利貸と折衝して、平然として、切拔けてゐる。――左樣だ、嘗て、斯んな事も有つたやうに覺えとる、彼は、東京市に名立てる高利貸より、甲、乙、丙、丁、大抵借り盡したが、軈て、期限に爲ると、牙を磨いて、四方より、攻擊して來た。此時、頭山大將、少しも騷がず、高利貸名々に對して、日を期して、濱の家に來らんことを通じたのである……その日に、濱の家に赴つて見ると、山海の珍味を駢べてあるのに驚いたが、自己一人と思つてゐたのに、同業者は、幾人も顏を突き合せたので、二度喫驚！時分を諜つて、頭山は、例の寬然とした態度で、ぬつと坐に現はれ、今日は拂ふべきてあるが。仔細あつて拂はれぬ、と唯一言。その後を受けて、幾人となく、美人が出たので、鬼に等しき高利貸もぐにや〳〵。

斯くて、悠然と、高利貸を烟に捲いたのである。渠等が頭山を恐れるのも、無理が無い。但し、殊に他の豪傑連と異るのは、時に臨むと、右の如き奇道に出づ

るともあるが、金員が手に入ると、ちやんと利子を添へて、綺麗に返濟するとて、策に上せらるゝとが有つても高利貸等は、矢張頭山の人物に信用を置いてゐる。

＊　＊　＊　＊

頭山の人柄を言つて見れば、右のやうな人物。その職業は、政論家の如く、實業家の如く、壯士の親分の如く、そして、待合の女將と、高利貸とに推服せらると同じやうに、その交際間には、普く、人物を以て推されてゐる。中には、英雄といふ者もあれば、豪傑と稱してゐる者も、多いのである。豪傑か、豪傑か、余は筆を中途にして、聊か、爰に彼の經歷を調べて見やう。

＊　＊　＊　＊

余輩が、初めて、頭山滿の名を聞いたのは、今は、千駄木螢澤附近に隱栖してゐる老女丈夫、近藤の婆樣の口からであつた。近藤の婆樣といつても、恐くは、知つてゐる者は有るまいが、千駄木に閑室を結んで、晏如として、書生を養つてゐる、風の變つた婆樣、——嘗て、此の婆樣は頭山の少年時代を語つて、賞めちぎつたので、初めて、余輩の腦天に、頭山滿の名が刻まれたのである。

此の老婦人の口に出た、頭山の少年時代といふのは極めて沒趣味の、愚にも附かぬ話說てあつたが、十幾年過ぎ去つた今日に至つても、瞭然と、記憶に遺こつてゐるのが不思議である。……彼の福岡の女豪傑、高場紀女史が、玄洋社の向陽義塾に、塾頭であつた頃の事、何時も、茫然とした、無口の、頭山滿は、女史の講義を聞いて居ながら、ふひと、一人の友人を顧み、その鼻端へ、右の手の、握り拳を突き出し、臭いか、と藪から棒に聞く。その男は、頭山の仕打に、呆氣に取られてゐると、例の緩然とした口を開いて、再び、如何ぢや、と返答を促した、といふ話し。讀者よ、頭山滿の少年時代は、常に、儕輩の間に、愚物視せられてゐたので、高場女史が、眉揚り、眼を怒らして、史記の項羽本記等を講義してゐるのを前にして、彼は、

女史の權威を物ともせず、握み屁を作つて、儕輩に戯れてゐたのである。

斯くの如き木强兒は、後、數年にして、其の儕へる者を壓して、玄洋社の首領と爲つたのは不思議々々々。而かも、玄洋社の健兒を卒ゐて、九州の一角に、覇を稱へても、その人物は——握み屁を他の鼻端に突き出したやうな、ぶつきら棒の、木强漢、無口は、依然として、無口の、少年時代に比べて、變はつた所はないが、彼の位置は、めき〳〵と昇つて、遂に、何時の間にか、九州の一大名物と爲り、明治年間の大怪物と爲つたのである。

* * * * *

頭山滿の名傳はつて、今に二十幾年、常に世人の口頭に上つて居るが、その事蹟は、瞭然として居らぬ。玄洋社の首領として、常に政事運動に從事してゐたやうであるが、實業に、身を分ちて、何時の間にか、炭礦の所有者と爲つて居る。然れば、實業に全身を投ぜるやと言へば、再び政治社會に頭角を擡げ、政黨組織の樞機に關かつて居る。特に、子爵品川彌二郎が、內務大臣の職に在つて、干渉を試るや。安場保和の懇望に依つて、九州を纏め、國民協會の創立せる時の如きは、根津の神泉亭を根據として、佐々友房の相談相手と爲つてゐた——此時、佐々は、安岡雄吉を中間に立て、後藤象次郎の手を經て、政府より、三萬圓の金額を受取つて、喜んでゐると、三萬圓の端金で、何を試る積りぢや、と遣つたので、流石の佐々も大に面目を潰したのである。

が、彼は何時も黑幕に隱れて、表面に現はれないから、その形跡は、頭山の人物と同じく、漠然として……

……その後、神鞭通常や、河野廣中等と運動を同うしてゐたが、何時も、冷々然として、不離不即の位置を保つて、深入せぬ。そして、彼の意を注いでゐるのは亞細亞大陸。政黨運動には、冷然としてゐるにも拘らず、一ト度清韓の問題が生ずるとがらりと、態度を改め、政黨屋と相携へて、腕車を飛ばす。新聞社に、彼の名が見えるのは、此時である。清韓に於て、彼は、

如何の計畫を貯へてゐるか、例に依つて、漠然としてゐるが、彼の門下生にして、馬賊に投ぜる者の多かつたのは、事實である。

* * *

頭――山――滿。英雄か、怪物か、余は知らぬが、何時見ても、厚き坐布團の上に、小太りに太とつた身體を置き、悠然として、靜かに、他人の話說に耳を傾けて居るのは變らぬ。然かも、如何かすると、人を馬鹿にしたやうな言を挾んで、微笑するが、あの淸しい小さい眼は妙に威權を添へて、凜然としてゐる。

回想錄

春葉

是から往事を回想せよと言はれても、直に然う順序正しく目の前へ出す譯には行かぬし。又自分自ら回想しやうと爲ても俄に其緒を捉へられるものでは無い。親友絳雲君が遊びに來られた折、不圖自分の小說を作るやうに志した最初、其から故紅葉先生の門に入つてから後、先生との關係、及び同門の先輩諸氏の消息など暇が有つたら談話體に書いて見たらば何うかといふ事であつた。其も面白いでせうと何の氣も無く言つたのであるが、失策つたりて、先月の號に豫告され新年から爲て、斯やうに筆を取らねば成らぬ事に立到りました。

考へて見るに、自分で自分の經歷を語る程氣恥しい事は無い。而して假令又其耻かしさを耐えて、話を爲たにしろ、十分に述べやうと爲ると、必ず此耻かしいが邪魔に出て、先づ〳〵遠慮勝に成るので、決して他人の事を書く程旨く行くものでは無い。小生は其意味で苦心談なぞは餘り爲たく無いと思つて居る(尤も其程苦心の功も積まないから)然るに斯んな好まぬ事に引出されたのは、實に工合が惡いのである。

絳雲君に此事を言ふと、西洋には自叙傳が有る。自分で傳を書く程正確な事は無からうと言ふ。其も一理有るが、小生は今の處自傳を作る程豪い男では無い。又

萬一後に少しは豪く成つたとして、其腕には人が書いて與れるだらうと云へば、先づ其見込は解らないから猶且自分で書いて置くが可からうと終に腕比に負けて了つた。此人は小生の爲に親切なやうな、而して人の悪いやうな人であります。

偖愈々書く事に取極ましたが、小生の小説を書き初めて今日に及ぶまでをお話するには、何う爲ても故紅葉先生の事を申さねばならぬので、斯う成ると至極難しく成ります。又先輩諸君の事も先々自分と同じやうなものだから、自然遠慮が先に立つて、是又工合が悪い小生等は著作を爲る場合にも氣が向かなければ半月でも一月でも何も爲ないで居るが、其氣が向かぬ以上に面倒な仕事であるから、殆ど一月以上も手を着けなかつたのである。

處が愈々年の暮と成つて、反省社からの催促は厳しく成る。終に居催促とまで立至つたので、是非なく勇を鼓して是から筆を起したのであります。

前書の方が長く成つて、未だ本題には入りませぬが是だけの順序を述べて置かぬと、何うしても氣が濟みませぬので、餘計な事であるが記して置く。小生の後には誰がお書きに成るか知れぬが、斯んな事は一寸と考へると樂なやうなもので、其實何うも始末に了へんものであるから、今から能くお考へなすつて、大體の順序を極めて置かれる方が可からうと、餘計な事まで申して置く。

前號から「著作中の鏡花」といふのが出て居りますが、何方か知らぬが、非常に見事なお手際と感服して居ります。小生のは彼程面白く無いに違ひ無いが、是は其本人が充らないのだから致方が有りませぬ。猶雜誌の意見では、何程か斯んな事が明治文學史の參考にも成らうといふやうな事ですが、到底那樣價値は有りますまい。然し小生の御顔を拜借する方々の事を傳ふる場合に、此話が何程か其役に立つやうな點も有らば、小生は非常に満足するのである。是から號を追うて述べるが、一回で終るか、或は十回續くか、其邊は未だ解らぬので、左に右前申したやう

な動機で事が起り、而して大畧此の心組で進む意である。

（つゞく）

著作中の泉鏡花

ＳＴ生

△硯蓋兼墨置

前號には言忘れたが、是が又珍な物で、硯と同じ大きさの（三寸に二寸ぐらゐ）銅で出來て居る。と唯是だけでは何の事もないが、其の又由緒が奧床しいもの、其中に、小判形に、眞鍮で象眼がしてあるが、是は氏の迷子札なので、氏のお父さんが切めてもの藝の跡――表に、鷄が一羽（酉歳に因みて）裏に

石川縣金澤區
下新町二十三番邸
伜　鏡太郎
明治六年十一月四日生

と彫刻がしてある。

素より、其字、其彫刻、其繪、其迷子札も、皆そのお父さんの淸次（號を政光）君が、自筆、自畫、自製なので。話は餘事に入つて恐入るが、一體此の淸次と云ふ人は、渾名の聾の一さんと云つて有名な（金澤では）彫刻師で、死ぬまで鑿槌を離さなかつたと云ふ人物、不幸にして世に知られず、那の邊鄙な金澤如きだけで惜む可き其一代を埋木にして畢つた人であるが、世が世なら一代の名匠巨擘とも仰がれ可き人、無慾で、世間不見で、樸訥仁に近い方で、天にも地にも唯彫刻あるの、外世の中の何事をも辨へなかつた人だつたので今も金澤の目ある者は、神にも等しいやうな事を言つて稱へて居るさうな。

然れば其彫刻物も、數は極めて少いので、いゝ物は皆了ひ込まれて了つて、今ははや其行方さへ知れず、纔に遺物とも見るべきほどの物は、短刀の小柄が一口（蘆に雁の彫刻）と、其の迷子札が殘つて居るばかり。

讀者は試に氏の短篇集田毎かゞみのさゝ蟹を見られよ。氏がお父さんの淸次君より受けし作物に於ける精神的敎育と及びそのお父さんの爲人のほどが歷然と判

るに相違ない。

蓋は氏の弟の斜汀氏が、未だ十二か三ぐらゐの時、お父さんの手傳をしてゐて、兄君の鏡花君が矢張り例の硯を擔いて、金澤へ――その頃故郷の下新町の家が丸燒になつたので、その見舞旁――歸省された時に燒出されて假借屋をしてゐた目細の針屋(北陸道では有名な老舖猶氏には祖母君の實家)の二階で、お父さんに敎はりながら拵へたものださうで。

但し迷子札の象眼は、今も金澤で有名な山尾次吉と云ふ彫刻師が、晩年、亡き名人の忘れがたみたる鏡花君の爲に象眼したもので、此人は目下宮內省の御用品を主に作つてゐると云ふ事であるが、矢張無慾で、純樸で、年が年中細工場に坐つた限、いつ夏が來て、冬が來たやら、花が咲いて、散つたやら軍がいつ始つた事やら、濟んだ事やら、やつてる事やら、其さへ知らずにこち〳〵こち〳〵、一年三百六十五日、每朝、每晩起きるから寢るまでその彫刻に餘念ないと云ふ事。(今時には珍しい人物、妻君は十二三年前に死んだが未だに無妻で、後添も貰はず……。)といつぞや鏡花君の話に聞いたが、去年氏が久しぶりで墓參にとて歸省された時も、矢張細工場に坐り込んだ限、此人は銀の鶉を一羽(實物大の香爐)打上げて、其の羽の彫刻に餘念ない時であつたさうで。其時の同人の話に、

(何うも此の生物の目を彫るほど難しい事はないので、少し仕事が面倒になつて來ると、あゝ親仁(鏡花氏の親父)が居てくれゝば可い、親仁が居れば相談にと思ふが、其時は爲方がないので、故人の意見を聞く心地で、先づ鑿箱を搜します(此の鑿箱は鏡花氏より故人の遺物として同人に贈りたるものゝ由)搜すと屹度何か知ら是ならばと思ふ壺に當塡るのがその中から出て來るから妙です。然し缺換のない其の鑿、もし刃を損じては一大事と思ふ故、それを手本に同じのを自分で拵へて見るですね、果してその目は活き〳〵として來るので、此の鶉の目を彫つた時も然うです、云々)

又――話は飛んだ處へ外れて了つたが――曾て故人の話に、然る大家からの注文で、雀が二羽、羽卯を

しながら、組むづ解れつしてる樣(春の野に因みて)の水入を拵へた事があるが、其時、其品を持つて來て私に見せて、是が何も普通の雀の諍をしてるうぢや滿らぬ、又生きてるやうに見えるばかりでも面白うない。生きて居て、其上にも、何處かに謂ふに謂はれない仕事の面白味と云ふものがなくてはならぬ。と言はれた事を覺えて居ます………。

と然かも其を言つた人の美術と云ふ字は何う書く事やら、其さへ些と覺束ないくらゐと云ふに至つては、彌よ其爲人のほども推量られて面白い心地がする。

△筆置

是は象牙彫、作り懸の靈芝。謂を聞けば、都にも然る人ありと聞えたる、近世象牙彫の名人――今は亡き人――某氏の作て、矢張恩師紅葉氏から贈られたるもの丶由。

△文鎮

頃合な水晶の兎、何も作者が酉の歳てあるから、其の七つ目(卯)をと云ふ譯てはないが、是にも深き仔細こそあるなれ。

奥床しきは其の墨置、可懐しきは北の文鎮で。

元來氏の母君と云ふのは、音に聞えし美人であつたさうなが、江戸は本郷湯島の生れて、大皷の家の愛娘名を壽々子となむ、十六の年、髪は島田、着物は振袖帶はャの字の姫樣姿て、蒔繪の木履には抽斗が附いて居てその中へ寒い時は、炭火も活けられやうと云ふ贅澤な身分であつたのが、(悉しくは氏の笈摺草紙を讀むべし)彼の上野の戰爭の際、大皷の指南役として、其以前より關係のあつた、加州藩士の勸に委せて――かういふ土地に居ては危いからといふ――駄馬が二頭に駕籠が三挺、是に草双紙と雛道具を乘せて、自分も乘つて兩親。嫂、兄、當才の姪等と丶もに、都落をしたのださうで。

落着く先は加州金澤、乃ち鏡花氏が生れ故郷。瓦解になつて泉氏の宅へ不思議な縁てかたづかれてからも――當時金澤では江戸ッ子と云ふと、昔の都の人達が外國人でも見るやうな思、况しや婦人、然かも艶た

き同君の母君の事とて――土地の人は皆その跡を慕うて、吾こそは御姿を拜まんと、譬へば呉服屋へ行けば呉服屋の店、花屋へ寄れば花屋の店へ、堵の如く人立ちがすると云ふ騒。終には垂籠めてのみ在して餘り外へは出られなかつたと云ふ事であるが、二十九を憂き世の名殘にまだいとけなき幼兒等を遺して。亡られたのが十五年の冬、然れば鏡花氏が十才の時、斜汀氏が三つの時。

家には男の子ばつかりであつたが、其でも雛道具のみは年毎にしつらへ、祖母さんの心添にて、母亡き幼子等が切めてもの心遣りにもと、飾つてあつたものらしい。

此の兎こそ其の一個で。大方は皆類燒の際に、燒拂はれて了つたのであるが、是のみは文鎭に使つてゐたので、殘りましたと。或時鏡花氏に聞いた事があつた。

三枚續のお雛樣、湯島詣の神月が信仰心、其他にも猶其に就いて予は思當る節々多けれど、編輯締切の間際なれば喋々しき事は玆に省かん、然れど、氏の作物を讀まれし人は自ら同君の作物の依て來たる所以、及び其精神的教育の那邊にあるかを首肯せらるべし。

△水入

此の父母にして、此の兒あり、此の先生にして、此の弟子あり、然かも彼の作物ありで。

先生の机に依つて、お父さんの硯に依つて、お母さんの文鎭に依つて、其の硯蓋に依つて、筆置に依つて否武器に依つて、彌よ戰に臨まんとする作者は、恁て息繼の莨を一服。

書齋は主に夜であつたが、近頃は晝間も書く。書齋は六疊一間限、障子に面して机が置いてある。而して其の前に小庭がある、毘沙門樣の縁日で買集めた秋の七草を始め、春夏の草花を色々、硝子越に熟と見られる。

机の右傍に籠火鉢があつて、メリンスの座蒲團が二枚、其へ坐つて、刻莨――書齋は雲井、近頃はさつき卷莨は外出の時でもなくては吞まず――先づ香を一燻して其香の燻る頃、机の上の硯を取つて火鉢の上へ

持つて行くと、水入の水を硯に注ぐ（蓋し、水入は一本二錢五厘か三錢ぐらゐの青い色をした御神酒德利。いはれは別になし、一先生の玄關時代から使つてゐると云ふ事）淸めるので、火鉢の火がじゆうと云ふと、又机の上に置く。

それから、筆、墨、同じく淸める。淸めて後、机に向ふ。

墨は餘り濃く摺らず――或は摺つて居られないのかも知れぬ。

驚破や、好き敵ござんなれと見ると、瞬く内に一枚二枚、三枚、四枚。五枚、六枚、七枚、八枚。一夜の内に幾十枚！。

譬へば神在つて其筆を運すもの丶如く、或は魔あつて渠を導くもの丶如し。

素よりそんな興に乘じた時は、脊後に何が居やうとも、前に何が居やうとも、那樣事に氣が着くのではない。

其代り、いざ筆を執らうとするまでには、その苦心も一通ではないらしい。

一體鏡花氏は實を採むのが癖で、實を採ては玉にして、玉にして粉にするが、然もなくば、思詰めてぶいと戸外へ出て了ふ。

彌よ懸らうといふまでには、十日も二十日も打遣つて置く事があり、又一二枚書いた限、いつまでも〳〵机の上に乘せてある事があるとの話。

短い物なら一枚、二枚、長い物なら一回、二回が一番書辛い處なので、最初の日は一回書き、次の日は二回書き、四回書き、八回書く、と先づ恁云ふ順序。

恁て仕上つた品物は、短篇となく、長篇となく、必ず原稿の何れかに雨じみのやうな跡があるが、是は所謂蕪村の句に――名人は名人を知るて――

　雪舟が蠅打拂ふ硯哉

鏡花氏も無意識ながら蠅或は蟲などのとまつた折に彼の水入の水を注いて原稿を淸めるのである。（完）



儒佛二敎論

『宗敎界』

子爵　邊渡國武

日本國民が舊來如何なる宗敎に於て最も多くの感化を受け又將來にも如何なる宗敎に於て最も多くの感化を受くべき乎と問ふものあらば何人も遲疑するとなく之に答へて儒佛二敎なりと云ふを憚らざるべし儒敎の如きは歐米各國に所謂「レリジオン」なる者と少しく其本質を異にし或は一種の倫理學なるに近しと雖も其世道人心に最も多くの感化を及ぼしたる結果よりして之を言へば世界に於て最も有力有效なる宗敎なりと言つて不可なかるべし淸韓兩國の如き及び日本の如き今日まで世道人心を維持し來りたるは全く儒佛二敎の力なりと言て不可なかる可ければなり

儒佛二敎深奧の原理に就ては余別に所見ありと雖もそれは今の問題に非ず今の問題は只此二敎が舊來に於ても世道人心に感化を及ぼし將來に於ても亦感化を及ぼすべきものとして儒佛二敎は果して世道人心を維持するが爲めに應用上方利益有りて一弊害なきものなりや否やの問題を解決するに在り、

余が所見に因れば儒佛二敎は世界の宗敎中其應用に於て最も穩當着實なる者にして儒佛二敎ソレ自身に於ては著しき弊害あるものに非ずと雖も儒敎には支那固有の病癖之と纏綿し佛敎には印度固有の痼疾之に伴隨するが故に舊來はイザ知らず將來に於て日本國民が此競爭的世界に立て各國の間に馳驅するに當り到底此儒佛二敎の感化を委棄す可らずとすれば大に注意して此儒佛二敎に纏綿伴隨する所の支那印度の病癖痼疾に浸染せざるが爲めに儒者も僧侶も充分に之を防禦するの覺悟なかる可らず是此儒佛二敎論に於て論斷せんと欲する所の本題なり、

何をか儒敎と纏綿せる支那固有の病癖なりと謂ふや他なし定命論即ち英語に「フェータリズム」と云へるもの是なり余少年の日三代以下漢唐宋明諸儒の說を通覽して其極致を察するに其道德上深奧の道理は別として其實行上に於る支那道義の根抵は天を知り命に安んずるに在り故に夫の論語の如きも其開卷第一に人不知而不慍不亦君子乎を以て始まり其盡頭末尾の一章も不知命無以爲君子也を以て之を結べり支那の道義は君は君たらずと雖も臣は臣たらざる可らず父は父たらずと雖も子は子たらざる可らずと云へる流義にして一方には權利有て義務なく一方には義務有て權利なく總て片權片務より成立しつゝあるが故之を以て臣子に敎ふるとすれば不可なき如しと雖も之を以て君父に敎ふる者とすれば甚だ弊害あり特に君臣父子の此の如くなるのみならず一切の社界に於て上層に在る者は權利在て義務なく下層に在る者は義務有て權利なし此の如き社會に在て自ら慰むるの術は是天なり是命なりと天を知り命に安んずるの外なし是定命論の由て起る所ならん是も亦安心立命の一法なり然れども今日の如く四海横流の時に際し世界競爭の間に立て各國家各國

民と其雌雄を爭ひ優勝劣敗の數を制せざるに非れば自存自立する能はざるの時に當りて一國の民皆天を知り命に安んじて是天なり是命也と言つて自暴自棄したらんには國の發達進歩は勿論自存自立をだも望む可らざるは見易きの道理なり日本の國民は先天的に此定命論と相反對せる直前進取の心操即ち自由の意思英語に所謂「フリーウィル」に富むが故に其弊害を受ること甚しからずと雖も今日兎角に消極的受動的（ネガチーブハッシーブ）の氣風あるは畢竟其感化の餘波にして宋明以後の支那が外國の侵伐を免れざるが如きは全く此病癖膏肓に入りたるなり佐藤信淵翁が宋明の諸儒は忠君愛國の國民に非ずして解脱の大和尚なるが故に四海困窮天祿永ク終ルを憂ふるが如きものに非ずと云ひたるは知言と謂ふべきなり日本國民の如きは自由の意思に富むの國民なるが故に其弊害を受ること甚だ微なりと雖も儒教の應用上には此の如き支那固有の病癖ありて之と纏綿することをば決して忘る可らず

何をか佛教に伴隨する印度固有の痼疾なりと謂ふや他なし厭世論（エンセイ）即ち英語に所謂「ペッシミズム」と云へるもの則ち是なり余多年佛教を研究して八宗九宗乃至十三宗にわたりて其深奥を極めたるに哲學上宗教上の深奥の玄義は別として其應用上に於る印度の教義は三界無レ安猶如二火宅一と云へる旨趣にして出二離生死一入二涅槃一を以て極致とす印度は往昔に於て「カスト」の制あり婆羅門、刹帝利、毗叉（ビシヤ）、旃陀羅の四種四人種に分かれ上層の刹帝利種が下級の婆羅門たらんとするも容易に得らず何況や毗叉、旃陀羅に於てをや後年漸次相混淆したりと雖も尚階級制度は依然として今尚儼存す此の如く窮屈千万なる社界に在て自ら慰むるの術は早く此娑婆世界の苦しみを脱離して清淨無垢の極樂世界即ち涅槃に入るの外なし是、厭世論の由て起る所ならん故に印度の宗教は佛教に限らず近來舶來する所の古今各種の宗教經論を見るに皆三界を出離して涅槃に入るを以て其超端と爲さゝるはなし是も亦一種の安心立命の法なり然れども今日の如き各國競爭世界に在て一國の國民が皆此世界は安きことなく火宅即ち燒けかゝりたる家屋の如しと觀念して皆世を厭ひ世を離れんとしたらんには國の發達進歩は勿論自存自立をだも望む可らざるも亦見易きの理なり日本の國民は先天的に此厭世論と相反對せる快樂快感即ち樂天論英語に所謂「ナプチミズム」に富むが故に其弊害を受ること甚しからずと雖も兎角に今日善柔に流れ無常を觀ずるの習癖あるは畢又其感化の餘波にして印度の諸國が英國の爲めに占領せられて數億の國民が甘んじて僅々數万の英人に服從し尚深山幽谷の中に禪定に入りて國家國民の何たるを忘れて入涅槃を專心一意に求めつゝあるが如きは全く此痼疾の膏肓に入りたるなり日本國民の如きは樂天的心操に富むの國民なるが故に其弊害を受ること甚だ微なりと雖も佛教の應用上には此の如き印度固有の痼疾ありて之に伴隨することを忘る可らず、

以上に説く所は儒佛二教の應用上之と纏綿する所の支那固有の病癖と之に伴隨する所の印度の固有の痼疾を擧げて將來儒佛二教の感化をして其利益を全うして其弊害に遠ざからしめんことを希望し儒者僧侶が公平に之を判斷し之に注意せんことを促すの微衷に外ならず夫の耶蘇教の如き其原始的教條に就て之を直解すれば或は儒佛二教以上の定命論厭世論なるべしと見ゆる所少しと爲さずと雖も歷代宗教家神學者の潤色を經て今は立派なる自由教樂天教とはなりたるなり此二個の病癖痼疾を去りたりとて儒佛二教は存立し能はざるに非ず儒者僧侶も亦大に活眼を開きて大に活動せざる可らず、

若し夫れ今日の如き交通自在の時期に際會するを機として各國間に行はるゝ所の哲學、宗教、道德等の長短を比較研究して之を折中し完全圓滿向上の一路を開くに至つては余別に説ありと雖も數日間數週間乃至數

且間に於ても得て其要領をだも盡す可らざるが故に今は只儒佛二教が其應用上に就て其各々纏綿伴隨する所の支那印度固有の病弊痼疾を腹臟なく發摘して以て儒者僧侶の參考に供せんと欲するのみ。

天才と文學志望者

『成功』　文學博士　坪内逍遙

何人か各々天稟なからざらんや、その稟くる所に遵つて孜々として惓まずんば自ら利し世を益する所以のもの幾何なるを知らず。然るに世に其器にあらずして其職に縛せられ、以て一生を不遇失意に終る者甚だ夥多、而して眞に其天才にあらずして、文學者たる者亦此類なり、豈其人のみの不幸と云はんや。余は幾多の青年に向つて一言を警告す、曰く天才にあらずんば以て文學者たるを勿れと。

而して何人が果して文學者たるの天才あるや。多く文學嗜好の性に富める者或は此天才なるや、曰く否、文學は一種の遊戯の道なり、遊戯を好むは青年の常なる如く、普通の青年には皆多少の文學嗜好の性あらざるはなからん。而して就中好んで想像に耽るの傾きある青年は、特に文學を嗜好するとの篤きは當然のみ。文學を嗜好するを以て、自ら其天才ありと信じ文學者たらんとする者は大なる誤謬にあらずして何ぞ。然らば誰をか天才と爲す、又如何にして其天才たるを認むべきや、曰く、自ら知らず、人亦言はず、唯だ著作出て世は漸くにして之が天才の手に成れる大傑作たるを認むるに過ぎざるのみ。是を以て天才の傑作を成すや、多くは業務の傍ら何時とはなしに作り出だせるなり、京傳の煙草入を鬻ぎ菓子商を營み居たりしが如く、三馬藥を賣り、馬琴亦賣藥と手習師匠とを業としたりしが如く、必ずしも苦んで學び、迫まられて作りしにあらずと雖も。天才の人は例へば噴火山の炎を噴出するが如く、たゞ眞心の熱火を吐かずには止み得ずして終には古今の傑作を大成せるなり。

且つや現今の如く生存競爭の激甚なる社會に在りて、何等の天才もなく、深き修養も蓄へず、漫然として文學者を以て身を立てんことを欲する者は誤謬も亦甚しと謂はざるべからず。ソウシー嘗て曰へらく、世の青年、如何に大なる才能を有し、又如何に忍耐して出精すとも、文學によりて身を支へんと迚も爲し得らるまじきことなり、希望(ホープ)の外何等の用意もなく「名譽黨」に趣國の杖を曳かんとするは。少壯詩人の爲めに殊に戒むべしと。實に文學は一種の道樂に過ぎざれば以て内職として是を樂まんか。文學の人に益すべき論なしと雖も、是を專門とし、職業として、製造するに營々たるに至らんか、文學の人を害ふや蓋し尠少ならざらん。スコットの云へる如く文學は以て杖(スタッフ)とすべく、以て撞木杖(クラッチ)とすべからざるなり。世の青年者にして徒らに空想に驅られ、文學を以て身を處せんと欲する者は深く謹まざるべからざるなり(博士の高話)

人物養成論

『慶應義塾學報』　鎌田榮吉

近時文明世界の傾向を觀るに、一面に於て、甚だ面白からぬ點がある人皆凡庸に傾いて、卓拔の人を輩出せしむるの傾向が見えない。しかし此の凡庸、即ちメヂオクリチー、コンモンプレースは勢い已むを得ないことであらう。文明の利器が次第に增加し各種の便利を生ずるの結果、古へなれば非常に困難を冒して遣らなければならぬことも、今日は容易

に出來ることになつた。智者も愚者も、同じ働きを爲すことが出來る。賢者も老耄も、健足の壯者も、汽車に乘れば同じ速力で走り得る。政治も多數の政治となり、學問教育も普及し、戰爭も機械的になつて一番槍の功名は許されぬ。斯る平等均一の世界には凡庸的傾向は到底免れない。然らば彼の多數政治を廢し、交通機關を廢し、普通教育を廢し、活版を廢し、徴兵を廢し得るか、一言に云へば新文明を廢し得るか、多數の幸福を廢し得るかといふに、否々決して廢することは出來ない、又廢し得る事を望まない。然しながら凡庸に傾くと云ふ欠點、メヂオクテーに傾くと云ふ缺點は矢張缺點には相違ない、社會の進歩を促し、段々高い所へ上らうと云ふには、多數の愚見を打破し、惰眠を警醒し、又狂暴を鎭靜し得べき卓拔なる人傑が頗る必要である。乃ち人物養成の途が開けなければならぬ古來英雄豪傑、或は聖人君子の生ひ立に就いては、必ず種々の傳說がある、孔子は幼時の戯れにも俎豆を連ねて禮容を擬したとか豐太閤は幼にして擬戰の戯をしたとか云ふことが書いてある。けれども是はあまり重きを置くに足りない、隨分吾々でも、幼少の時には天神様、事もすれば戰さ事もした。世の中に戰さ事をしない子供がどこにあるお祭り事をしない子供がどこにある。これ等は取るに足りない、傳記者流の贅言として、今一歩進んだ一例を言へば、彼の大政治家ウイリヤムピットが、其父の華族に列せられてチヤタム伯爵となつた時に、余は次男に生れたこそ幸ひ、余も亦父の如く衆議院で雄辯を振はんと云うた此一言こそ、有名な逸話となつて居る。若しも長男ならば襲爵の上は當然貴族院の一員で、彼の盛り場の衆議院に立て長廣舌を振ふ譯に行かぬから此言を吐いたのだ。勿論ピットの少時に於て、功名心の萠芽を證すべき言行は此外にも、少からぬ事であるが、是も別に驚くべき程珍らしい事でもない。少年は大抵自負心の强いもので、現にヂスレリーの言にも

「十六歲の少年は皆自ら英雄なりと信ず」と云てある、蓋し夫子自らも此感念はあつたものと察せらる。此二人は共に英國大宰相の位に登つたが、殊にピットは二十一歲にして大藏大臣となり、二十四歲にして總理大臣となつたと云ふ異數の立身、尤も今日の英國に於ては、假令ピット再生するも二十四歲の總理は六ケしい。何となれば、爾來百年間に國土擴張、貿易膨脹、外交複雜になつて來て之に當るには、如何なる英傑も二三十歲の壯年には企て及ばざる經驗と智識を要することゝなつて居る。そこでピットが非凡の人傑たりし事は申す迄もないが、少時の大言壯語は必しも少ピットには限らぬ。ヂスレリイの所言の如く、十六歲の少年は殆ど皆豪傑であつて、如何なる少年も其境遇相應の大望を抱いて居る。近頃新聞にもよく見ゆる如く、小學校の子供に向て目的を問ふと僕は東鄉大將になる。中學の生徒に問うても矢張り大政治家とか大實業家とかに成ると云ふ。此の如く少年は皆自信自負の力を備へて居る。けれども只それが續かない、自信力を持つ事は隨分持つが之を持ち續ける者は甚だ乏しい。十六歲の大英雄も二十歲にして中英雄となり、二十五歲にして小英雄となり、三十歲にして凡人と化し終るのが一般の狀態である。畢竟それは、段々歲を取つて世情に通じ、又多數の人に接して他の長所を知り、己の短所を悟るに隨て自分免許の英雄も人の嘲笑の材料となりはすまひかと云ふ懸念から、自然と少年血氣の鋒芒を收むるに至るのみか、何時しか胸中の英氣も消滅して、終に碌々小成に安んずるのが少年英雄の末路である。これは素より古今同一の事ではあるが、殊に近時文明の平均作用の强いが爲に、益々其傾向を烈しからしめたに相違ない。彼のピットの如く、少時の大言壯語と生涯の進路と符合することを得たる最大要件は、獨立自信の感念を減却せずに之を持續せしむること得たる結果である。人盡くピットたる事を得ない、又得るの必要もな

いが、現今の凡庸的狀態は如何にも堪えられない。(中略)

今の官公立學校其他の學風も、亦人物養成の上には最も不適當と云はねばならぬ。素より國家敎育の目的は、先づ國民全體の程度を高むるにあるから、自然に平均的傾向を生ずるので、これは一方から云へば已むを得ない、しかし個人の天性を發達させる上には慥かに有害な敎育法である。各人固有の天禀を助長せざるのみか、益々之を抑壓して、一定の模型に入れんとする敎育であるから、どうしても偉大なる人物の出來よう筈はない。日本の如く、新らたに世間へ頭を出して、第一流の列强國と伍せんとするには、內治、外交、學問、實業等の各方面に人物の輩出する必要がある、實に今日ほど人物需要の切迫な時代はない。一般人民の智德の程度を高むることは無論急務であるが。又之を帥ゆる人才の多く生ずる工夫をしなければならぬ。先づ政治界の大人物に就て云へば、經世家と執政家の二種に分れる。所謂經世家は國家を累卵の危きに救ひ大に撥亂反正の功を奏せんが爲めに、兵馬金穀、外交の權柄を掌握して、其方寸に國家の安危を定むる、所謂ザクデートルシップの器でなければならぬ。此種の人物に最も必要なるものは、威望を具へたる人格と、獨創的智略の二であつて、勤勉圓滑、辯論合理等の才は先づ第二に置いても宜ろしい。併し第一種の執政家たる人物には、此第二の各性こそ最も必要とする所で、殊に立憲政體の時代に於ては、此執政家の偉大なる人物を甚だ必要とする。而して此偉大なる執政家も、彼の經世家と共に、稀世の天才である。日々の事務を見るは通常の執政者でも宜しいが、當日の事のみならず、他日の長計を爲し、在來の秕政を改め、將來の改進を慮り、時代の最高政見を持して國民を御し得べき者は、此官僚的執政家に待つ事を得ぬ、矢張り彼の大執政家の手腕に依らなければならぬ。要するに日進月歩の世、殊に立憲政體の國に於ては、彼の百年の長計を定むる抔云ふ事は素より行はれない、又其必要もないが少くも十年の短計位は定めて、之を遂行するの者はなくてはならぬ。決して其日暮らしの奉公人根性の政治では行かぬ。左すれば今の世に撥亂反正的英雄も入らぬが、又官僚的凡庸政治家を以て滿足し得ない。要は只時代の最高政見を持し、此複雜なる內治外交に當るべき氣力才能を兼備したる人才の常に出る事を望む。決して余輩は、彼の安石出でずんば蒼生を如何せん底の古風な歎聲を發する者ではない。又實業界に於ても二種の人物ありて、第一種の人物は非凡の雄略を以て商工の業を經營し、勇邁果敢一たび決心した上は如何なる障害も之を避けずして前進し、決して中途に挫折せず、終局の目的を達する。此種の人物は恰かも手の觸るゝ所皆黃金化するかの如く見ゆるが故に、世人之を稱して先見の明ありと云ふ、然れども余輩の見る所では、如何に聰明でも、神ならぬ人間に先見の明があらう筈はない、只最初の設計を完全に立てたる以上は、之を遂行するに躊躇せず、挫折せず、不撓不屈、精神一到せば何事をも成し遂るのである。其營業の地には、物資人民輻湊して大都邑を爲すに至る、米國等の新開國に此類の事は敢て珍らしからぬ。全く一個人の爲に無人の郷も熱鬧の都會と變じ、其人亡ぶれば又元の寂寞に歸すること、恰かも戰國英雄の興亡に異ならぬ。之に次で第二流の人才は、實業上必要なる各種の能力を具備し、多數の人間を監督使役して遺漏なく、假令第一種の人物の如く、躬ら運命を作り出すの力なきも、又決して徒らに商界の浮沈に支配さるゝ者でない、毅然として其地歩を占め、能く守成の實を擧ぐる者である。更に眼を轉じて軍事界の人物に付て云はゞ此部分に於ては人爲を以て大に人物の缺乏を補ふ仕組が立て居る。近世文明の海陸軍に於ては、階級制度確實にして、上下の別を立つるの嚴重なるは、殆ど一級の差も尙君臣の關係の如くになつて居る。泰西兵家の目にも、軍隊の

階級制は人爲を以て英雄を作るの法だと云はれたが、實に至言である。假令ひ大將軍が凡庸の器でも、相當の幕僚を附すれば戰爭は出來るもの之に反して制度の立たざる軍隊に在ては、人物の大小に依て、明かに其帥ゐ得る兵數に多少を生ずる、聞く所に依れば彼の西南の亂に當り、薩賊の狀態は正しく此通りであつた。百夫に長たる丈の人が如何にしても千卒を帥ゆる事は出來ぬ、又大隊長でも力あれば聯隊を指揮し得べく、聯隊長でも力なければ大隊も率ゐられない。誠に能く自然淘汰が行はれて名よりも實に支配せられたと云ふ。此回の日露戰爭の大捷利は、其大體に於ては制度の整然たるに依るが、又大いに我將校の人を得たるに因る事は明かである。即ち制度と人物と二者相俟て此偉功を奏したので彼の東鄕大將の功名赫々たる如き、決して偶然ではない。大將の冷靜なる如何なる、危機にも泰然自若たる態度は、よく聯合艦隊全部の冷靜自重を保ち、又大將が、細大共に用意周到にして、計畫に遺漏なかりしは、よく不慮の過失を防ぎ得た。小事を輕んずる者は大人ではない、小敵を侮る者は名將ではない。信玄の兵法にも、敵に强弱あるまじき事と云ふのが最大要訓になつてゐる。古來角力界に於て第一流の力士となるものは、如何なる木の葉相撲に對しても、大關に對すると同一の態度を取ると云ふ、此一義は大政治家となく、大軍事家となく、大實業家となく皆共有の特質と見ゆる、乃ち信玄も東鄕も梅ケ谷も、皆人界の傑物である。而して此等の傑物は、固と天稟に在りとすれば、人爲を以て作り出す譯に行かぬは明白である。又何れの方面にも人物を必要とするの今日に於て必しも第一流と云はず、二流三流も、共に多少衆人に擢てたる人物を養成する、即ち青年天賦の才を傷けざるが肝要である。然るに今日の教育は、此天品迄も壓殺して、遂に萌芽を出さゞるに了らしむるこれは余輩の常に憂慮する所である。

教育上に及ぼす新聞雜誌の勢力

『體育』　寺田勇吉

社會教育の機關多しと雖も其勢力の强き其影響の大なる新聞雜誌を以て第一とす蓋し新聞雜誌は其價の廉なるを以て貧富を論せず世人の愛讀を買ひ易し其種類の多きを以て政治に實業に教育に軍事に文學に各人各種の嗜好に應ずるに便なり政治家は之に依りて國内民心の嚮背を卜すべく宇内各國政治の活動を審にすることを得べし實業家は之に依て農產の豐凶物價の高下、工藝の精粗を知ることを得べく文學者は之に依て國民生活の實況を察すべく風俗習慣の美惡を明にすることを得べし殊に其記事論說の文字平易なるものに至つては中等以下の社會に歡迎せられ中等以下の國民を教育するの効力甚だ深く陋巷の婦女子も傍訓新聞を愛讀して記事に通曉するものあり辻待の車夫も之に依て文字の智識を開發するものあり若し社會を以て一の廣大なる學校とせば新聞雜誌は最も善良なる教師なりと謂ふべし然れば其國に發行する新聞雜誌の種類、發刊の部數購讀者の多寡等は其國開明の高下を卜すべき善良なる標準にして社會教育の普及の程度を觀察するに缺くべからざる調査科目とす日本は軍事上及國際上にては世界の大强國となりたるも吾人の體格上より論ずるときは世界の最劣等國なれば諸新聞雜誌の如きは務めて體格改良上に就き論究あらんことを希望す若し進て新聞雜誌其ものに對し他の著作物と同一なる研究を施さば其興味其利益は更に著大なるものあらん右の如く新聞雜誌は其國開明の程度を卜すべきものなれども之を觀察するに當りては先づ國家の新聞雜誌に對する取締の寬嚴を顧慮せざるべからず若し

其取締甚だ嚴酷にして言論出版、の自由を束縛する國に於ては新聞雜誌の發達は之が爲に阻害せらるゝこと多く之に反して新聞雜誌に與ふるに言論出版の自由を以てし新聞雜誌發行は政府寧ろ之を歡迎するが如き國に於ては新聞雜誌は益々健康なる發達を遂げ國民の爲には正確なる指針となり戒愼すべき警鐘となり懇篤なる敎師となり以て社會敎育の爲めに貢献する所幾何なるを知るべからず是等寬嚴の由て來る所以は國内の政體民情等に基き政治上の必要より出づるものなれども取締の嚴酷なるが如きは要するに其社會開明の未だ進まざるを表するものと謂ふべし

男子の操行を見よ

『新紀元苦悶の女性の一節』

何等の謹嚴なる識者と雖も、青年の胸より戀愛を除去せよと請求すると能はざるべし、彼等は即ち能く克已制抑せよと勵言する也、吾人も亦た彼等の勵言に賛同す、然れ共彼等が年少女性を視ることの苛酷にして偏頗なる心事と態度とに對して、吾人は其の僞善を面責するに躊躇せざる也、女性に向て聖人の堅意を要求する識者よ、何ぞ男生に向て其不品行の特權を默許するや、男女の不品行や其の由來久しと言ふべし、現に國家は是が爲めに遊廓を建立して其需要に供するに非ずや、一般の子女が深窓に拘禁せられたる時代に當て、國家は男生に遊廓を公許せり「女學生」の新種族出づるに及びて、彼等男生は舊き遊廓を棄てゝ此の新種族を追ふに至りしなり、而して彼の謹嚴なる識者は即ち之を追ふの男性を言はずして、之に追はるゝ弱き女性に向て、其上の抵抗を要求す、世に又は此の如きの背理無情あらんや、

看よ、彼等年少女子は、全然無經驗の身を以て、曾て知らざる世の風波の眞中に孤立するを、去らば彼の識者に問はん、今の社會また何の處にか道德的制裁の能く彼等少女を擁護するものありや、「世は濁れり、去れど汝等女性のみ清淨なれ」とは何の律法の命令し得る所なりや、吾人は書物の裡に「道德」を讀む、去れど眼を上げて之を看よ、東西南北上下左右何れの處にも其の活現の片影にだに見こる能はざるなり、吾人は寧ろ此の不道德無道德の風波の中に於て今日の年少女生が意外にも其品行を維持することを驚歎す、去れど是れ彼等が新道德新情操の生命に依て然るに非ずして、拘禁的奴隸的舊時代の舊束縛の情勢に依て然るのみ、彼等の胸は戀愛の猛火に燒かれ、彼等の身は生活の鐵鎖に縛ばらる、而して冷酷の世は未だ此の新たなる婦人問題に向て其耳に傾けざる也、



近刊豫告

島崎藤村著

小説 破戒

緑蔭叢書第一篇

鏑木清方筆挿畫○千曲川流域の圖入○紙數凡五百餘頁○四六板總振假名付○全一冊讀切○

定價及び發賣の期日は追て廣告可仕候

東京神田裏神保町

發賣元 上田屋

この書は二年間の文學的勞作より得たる新しき收獲なり

●書中寫すところは種々なる生活狀態に觸れて光景多樣なりと雖も要するに欝勃たる新興の精神を以て全篇を貫きたり

●新裁まさに成らんとす請ふ清讀を賜へ

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

近刊豫告

明治闇黑史は、表面の事實に耳を假さずして常に裏面の消息に注目せる明治年間の活歴史なり、權貴者と浪人、勢力者と無勢力者、强者と弱者とが感情と利害との衝突に依り格鬪せる時代推移の眞相を描寫せる社會史なり

有磯逸郎著

明治闇黑史

二月發賣

紙數約四百頁

上卷 には、明治新政府の創設に筆を着け、維新派と復古派の二大潮流を擧げて、公家と浪人、藩主と藩士との衝突を描き、横井平四郎の横殺、廣澤眞臣の慘殺より、愛宕事件を中心として、當時全國に彌蔓せる復古派の面目を發揮す。其の前後に、圓海坊の奥羽十七藩同盟の劃策あり、雲井龍雄の叛あり、大村益次郎の襲撃を前提として、長州騎兵隊の暴動あり、掉尾の運動として、丸山作樂の朝鮮計劃あり

中卷 には、征韓論破裂より筆を起こし、全國に磅礴せる士族の反抗運動に入りて、西南戰役の大破裂に筆を收めたり。其の間に江藤新平の叛あり、熊本の神風連の叛、前原一誠の叛あり、前原と連絡せる永岡久茂の思案橋事件は、其の後を承け、西南戰役に至りて、士族の黨與に全敗す。然かも之を前にしては、芝增上寺の燒拂あり、岩倉具視の要撃あり、後には林有造等の政府顚覆運動あり、竹橋暴動あり

下卷 には、自由民權論を中心として、初めて我國に起りたる國民大運動を紹介す。立志社及嚶鳴社に依りて鼓吹せられたる自由民權論の勃興は、政黨の現出を促がし、然かも政黨の挫折に依りて、政界再び闇黑に陷り、秘密結社の類四方に起こる。福島事件を先驅として、群馬事件、加波山事件、秩父暴動、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等相繼いで起り、大井憲太郎等の大阪事件に至りて、僅に一段落を告ぐ。

昨今東京燒拂の暴動に驚ける世人は、本書に就て、動亂の來る因由を探れ、本書は、斯くの如き變調に對して靜かに警戒と教訓とを與へつゝあり

發行所　東京本郷區西片町　反省社



煙

江見水蔭

（上）

土筆ヶ岡に新築した鑛泉宿の主人、庭に池を造り山を設け、水車の流れから水を引いて、瀧を懸けて、それに名を求めた。

江戸名所圖會を見て、此土地と合せて、未だに考へ當らぬのは、澁谷長者の娘に戀して得ず、恨を遺して身を沈めたりといふ、圓證寺の童朝霧が最期の瀧壺。

これが好からうと自分が云つたので、なる程それに留めたと、新聞に廣告などして、主人は大喜びであつた。

夏は大當りで、目黑や桐ヶ谷の瀧で溢れた客が、大概は廻つて來て、此方でも亦た懸り切れぬ程であつたが、冬枯と來ては、いくら鑛泉の効能があつても餘りの邊僻に客足が惡く、一週間に二三組の連れ込客が來る位で、これでは算盤が取れぬと無闇に空を彈き出した主人。

そんなに暇なら、夏の來るまで、日當りの好い室を借りて、下宿爲して貰はうと、霜解路を自分は歩いて、俥で職業道具を持込せて、彫金家の加茂純彦は、鑛泉宿の居候やらお客やら

分らぬ事に爲つた。

宿の主人は森村春之助と云つて壯士俳優の上り。女房はお鶴と云つて、山の手藝妓の果。どちらも友達、寒風仲間である。

欅の臺を据ゑて、鑽箱を手勝手の左の方に載せて、松脂丸太まで位置が極つたので、一安心して、息抜きに庭に出て見た。

池も、山も、冬枯の儘て、少しも手を入れてなく、空地も同然である。

朝霧の瀧は如何成つて居るだらう。名付親だけに可慕しいと、池を廻つて山の後へ出て見ると、此所も亦荒涼を極めて居る。

鮭を岩石て組上げたのが、抜け落ちたり、崩れ掛つたり、意外の處に洞穴が穿いて、其所に塵芥が溜つて居たり、瀧壺は大方落葉て埋つて、上を草履て歩かれる位。

この落葉だらけの間から、彫金家の技倆を現はした自作の龍頭が、錆だらけて、突如と顔を出して居る計り。口から涎ほど水が垂れて居て、瀧と呼ぶには恐れ多く、不動の石像、甚だ手持無沙汰。

自分は此所に立ちて、朝霧の名を欲めた無責任を思出し。お得意て彫つた龍の甚だ拙なかつたのを見出して、苦笑を禁ずる能はなんだ。

それても當つたから可笑い。夏塲は迚も斯うして此所には居られなかつた。瀧に打たれる人の騒々しさ。

自分の造つた龍の口、其所から吐出す瀧の水、それに打たれる人の頭、臺灣坊主もあつた、八丈乙女に劣らぬ黑髮の長さもあつた、一人今でも記憶して居るのは、たしか新橋の藝妓とかであつた。美人といふては無いが、肌の色が純白で、髮の毛が濃く長く、濡れて益々艶光のするのが、肩切、膝切の、眞白い、襞澤山の水浴衣を着て、能く打れた。其女が散らし髮で、龍の口の下に立つと、瀧の水が皆、玉の樣に見えたッけが、其時は朝霧の瀧も價値があつて、自製の龍も威嚴があつた。

來年の夏が又當つたら、主人をも奮發さして、最一つ龍頭を彫る事にと考へて居る處へ、忽ち白雲が舞下つた。

龍が呼んだ白雲かと見ると、煙だ。

焚火だらう。誰が燃して居るのかと、其方へ行つて見ると、鼻を垂らした十一二の少女が、顏に皹の入つた三歳ばかりの子を、ねんねこで背負つて、掃集めた落葉に火を點けたのを、棒の先で掻廻して居るのだ。

霜が掛つて居るので、燻つて、眞白い煙が立騰る其向ふに、顏を反けて手だけ前へ出して、指環の腹を見せながら當つて居る一人の女。

今の今、瀧の下で想出した、あの新橋のであつた。

勿論髮は銀杏返しで、黑縮の三紋の羽織、襟附の糸織に唐繻子の丸帶。夏の扮裝とは皆目反對で、白い

のは、相變らぬ皮膚の色だけである。
彼の時は水の下。今は火の前。煙の立騰るを逆さに見たら、龍の口から吐く瀧の水でもあらうか。
自分は焚火可憙しさを粧うて、實は其人戀しく、子守女を掻退けて前へ出て。
「これア暖かい、火は戀しいものですねえ」と云つた。
「おや、入らッしやい、好い處へ……」彼の女は微笑して。
「貴郞、手ぶらで來るものぢやアありませんよ。お土産に燃えの好いのを持つて入らッしやい」と物馴れた言ひぶりて、目頭から一本參らされた。
「そんな働きのあるんでは無いのて。今日から居候的ですもの」と言ひながら、袂から卷莨を出して、火の傍に蹲んて、それへ點けると。
「おや、持つて居らッしやるの。一本頂戴な。妾、取りに行くのが面倒ですから、我慢して居たのですよ」と矢張手を翳して立つた儘て云つた。
これては、此方が立つて持つて行かねばならぬ態度だ。それは甚だ以て面倒であるから、酒席て盃を投げる格て、袋の儘。
「それ、投げますよ」
「まア、無性ねえ」
それても巧みに受留めて、中から御鬮ても拔くやうに一本出して。

「御返し仕ますよ」
「はッ」
見事に受損じて、燃上る火の中。
「おや〳〵大失敗」
「なんて、、、へやなんてせう」
「莨を焼かれて了ッたり、、、へや呼はりを爲れたり、悪い日だ」
「今に眼の中へ煙が入つて、泣いてる間に裾へ焼焦を拵へて、奥さんに散々叱られて、今夜寝酒はお止しなさいッてな事になるでせう」
「居候的ですよ、断つて置きます、女房なんか有りませんよ」
「夫婦でも居候になるわ」
「君し然うだと寝酒なんか贅澤だね。こ、、、だわれば御飯の方だ」
「よう、よう、却々話せる……」
「お話に入らッしやッて下さい。階子段の下で、日當りは好い室です」
「然う、妾は二階ですわ」
「旦那様と御一所で……」
「あら、矢張妾も居候的ですよ」

「そんな譯は無い筈だ」

「まアそんは事、如何でも好いぢやア有りませんか。さア最少熾んに火を燃しませう。ちよいと、子守の姉さん、背中の子供にも手傳はせて、どッさり薪木を拾つてお出でよ」

鼻ッ垂らしは無言で驅出した。背の子の方が何か云つて居る。庭は廣い、其聲次第に遠く成り行きて、消えた。

「此上燃して如何するのです。ヤケですねえ、此所の家でも燒拂ふ氣ですか」

「だッて面白いんですもの。パッパッと燃えるわ」

「それア燃えますさア」

「妾、焚火なんて、初めてして見るんですもの」

「火惡戯は好く無い。今に蒲團を背負はして、町内を引廻はされますよ」

「それから鈴ケ森へ行つて、お七さんの身替りねえ」

「色氣の無い八百屋の娘だ」

「おほゝゝ、本統に面白いのねえ」

「如何かお話に入らッしやい」

「障子の下ですッてねえ」

「えゝ行きますよ。此所の家も此頃は閑ですわねえ」

「靜かで好いぢやアありませんか」

「妾、あんまり靜かでも厭ですわ。どちらかと云へば賑かゞ好きですわ」

「火だッてパッパッ燃すがお好きですね」

「本統よ。最う何か有りませんかねえ、彼の子は如何したのでせう」

「燃す物が無くなッたら、裸體に爲つて、羽織も衣服も、皆んなたゝき込んでお了ひなさい」

「然うですねえ、序でに妾の體も燒いて了ッて……」と云掛けた時に、煙が急に向を變へて、一氣に婦人の頭から冠さつて、姿が見えなくなつた。

「巧く燒けたら、粉にして團子にして、鵜呑に爲る人もあるでせう」と自分は洒落た。

「如何ですか」と煙に咽びながら彼の女は云つた。

「他になけれア私が呑む」と又洒落た。

「物好きな方ねえ」と煙を逃れて、自分の傍へ廻つて來ながら彼の女は云つた。

「これで、貴女が火に飛込む處は知らないけれど、水の中に立つて居た姿は知つてるのですよ」

「貴郎が……」

「此夏でした、あの瀧で……」

「ぢやア、火の中へ飛込む處も、お好みなら見せますわ。待つてらッしやい、最少燃す物を持つて來ますから……」

『だッて、その扮裝で、枯枝や枯葉を抱へて來ちやア溜らない。私が行つて來ませう』と立上らざるを得ない。

『あら、男子は働くもんぢやアなくッてよ。妾の爲るのを見て居らッしやいよ』と言ふかと見れば、煙のなびく方に走り入つて、姿は木立の中に隱れた。

想像せざるを得ない。

あの風の人だから、羽織も衣服も汚れるのを構はず、抱へ切れぬ程燃料を持つて來て、一時に火に投じて、燃上るのを見て、頰に光を受けながら打笑むだらう。

羽織の紐に小さな蔓草が搦まつて殘つて居るだらう。それを此方から注意すると、彼の女はそれを拂落す。今度又『袖に木の葉が』と注意すると、又彼の女は拂はうとして、見付からぬ『何處に』と問ふだらう。其時此方の文句は斯うでもあらうか『おや、木の葉だと思つたら、抱柏の紋だ。失禮』と言つて退ける。乾と愛らしい聲が出るだらうなど、いろ〳〵考へて待つたけれど、却々以て此所へ戻つて來ぬ。

焚火はそろ〳〵消え掛つた。

それでも未だ見えぬ。

扨は卷莨を燒いたので、其代りを取りに母屋まで歸つたのだらうと思つて、其足數まで數へて待つて居たが、それでも見えぬ。

足音がしたので、氣を立て見ると、箕へ落葉を山盛入れて、子守女が戻つて來た。それを燃して待つて

居ても未だ見えぬ。根氣敗がして自分は焚火を見捨てた。

「下」

數てこなす輸出物の銀製雀。鏨の中でも代り〳〵、ナメクリ、カタキリ、ヘシタガネ、ツクリタガネ、それ〳〵に取出して、豆鎚てこつ〳〵。初めての夜。

帳場の方では、花でも引いて居るらしい。廣い家に人氣の少く、甚だ寂寞を感じて居る處へ、何處の障子を明けて來たのか分らぬ樣にして、晝間の婦人。

「贋金でも拵へてるのぢやアなくッて？」

吃驚して見ると、最う火鉢の前へ座つて、手をさしのべて、指環を光らして居る。

「驚いた、どうも……借切つて居れば此部屋でも城郭同然。無斷で入つて來るとは無禮千萬」

豆鎚で輕く指環を打つて遣つた。

「妾、悉皆聽いて來てよ。何んでも最う知つてるわ」

「益々驚いた。何を聽いて來たの」

「貴郞の身上を……」

「怠け者の彫金師て、酒食ひて、年中文無しで、女房無しの、借金澤山、そんな事なら聽かなくッたッて、分ッてる筈だ」

「然うですッて

「實は、私も、貴女の事を、内々帳場で聴いて見たのだけれど、笑つて〵敎へて呉れないんですから、未だにお名前も知らないのです。お名乘りなさい、今、時期です」

「名前なんざア如何でも好いぢやア有りませんか。それより貴郎、仕事振を見せて下さいな。それ、雀ですか」

「雀と見えるから難有い。這んなのでも仕揚が濟むと、羽根が生えて米國へ飛ぶんです」

「面白いのね、妾默つて見て居ますから、構は無いで御掛りなさいよ」

「人に見て居られると、手が冴えないもんだ。困る〱、嗚呼、困る」

「あら、邪魔なんか仕ませんよ」

「ぢやア、迭爐へ其方の松炭でも繼いで下さい。銀蠟で今、羽根を附けに掛るんですから……」

「おや〱、まるで小使だわ」

象眼箸で銀蠟を切刻んだのを挾んで、胴へ刺込んだ羽根の繼目へ宛て、線鐵で吊を取つて、迭爐の中へ入れて、一端は炭火を掛けて、悉皆熾つた處で今度は周圍を火で取卷いて、銀蠟の解けるのを待つ間、手を明けたのを見て又口を出す。

「ちよいと、此指環に、何か彫つて見て下さいな」と延金の方を拔いて、無雜作に出すのである。

「然うはいけない。そんな手輕な譯には……」

「だツて何んでも好いのよ」

「何んでも好いッたッて……」

「ぢやア、名前を……」

「何んて名前？」

「加茂……桂……」

「加茂とは可怪い。同姓だ」

「いゝえ桂が妾の名で、加茂とは貴郎のですわ」

「それを一所に彫るのは愈可怪い」

「だッて……妾、女將さんにも頼んだのよ……出來る事なら指環に限らなくッて、一ツお石塔に二人の名前を彫付ける樣に成りたいわ」

「調戲に來ちやアいけません。本氣で仕事をしてるのだから……」

「あら、調戲ぢやアありませんよ。本氣ですわ。女將さんに聽いて下さい、然うすれば分りますよ。妾は最う懲り〱して居るのです。此處へ隱して貰ひに來てるのですよ……妾は最う、何んにも望まないのですわ。種々世間を渡つて來て見ると、お前さん見たいな暢氣屋で、仕事はそれでも堅いのが一番よ。妾の樣な者でも氣に入つたら、如何にかして下さいな」と思入つた言ひぶりである。

「なる程、暢氣は暢氣だけれど、唯見れば、と來る。何んの苦もなき水鳥の、と來る。ドッコイ水鳥どころぢやア無い、雀が大變だ」

氣が着いた時は最う遲い。銀蠟よりも雀の本體、銀が燒けて、穴が明くといふ騷ぎ。吊りの線鐵で引上げるのが間に合はぬので、突如土瓶の湯をぶッ掛けると、忽ち揚る灰神樂!!!

「あ……」と叫んで、お桂さん、其儘廊下へ驅出したので、箒でも取りに行つたのかと障子を開けて待つて居たが、如何したのか其夜はそれ限り。

* * * * * * * * * * * * *

明くる日、あまり不思議だから、昨夜の事を打明けて女將に問うて見た。

女將は相變らず初の内は笑つて居たが、此方が熱心に問詰めたので、到頭口を切つた。

「お前さん、持つ氣なら女房にして御覧、あの通りの人で、腹の惡いのぢやアなし、容貌ならば先づ十人並を秀れた方だし、金子と云ッちやア持つて居なからうが、衣裳は一寸あるんだよ。指環だッて三個や四個持つて居るのだから……」

「旦那でもあるとか、惡い紐が附いてるとか、然うした故障は……」

「それは保險附て、全く有りませんよ」

「だッて、當人の口から隱して貰つて居るッて」

「あ、それは斯うなのです。全く此間までは、或る人の世話に爲つて居たのですがね、事情が有つて其所を止したのです。先方では大層惜しがつて居るのですけれど、此方では厭だと云ッてね、何、話し

さへすれば先方では如何にでも爲るのに、慾の無い人も有つたもんで、手切も取らないで、此方で隱れて騷いて居るので……」

「然ういふ人なら貰つても、惡くは無しだな」

「まア試めしだから持つて御覽なさい」

「極めるかな」

「だけれど加茂さん、一寸待つて下さい。他に何んにも無いのだけれど、たッた一ッ曰があるのよ」

「さア大變だ。たッた一ッの故障が一通りで無いに違ひなし。夜になると屏風の上を首が傳つて、行燈の油を甞めるといふ處を、電氣の紐に搦まつて、ネヂを口で捻るといふ一件ぢやア無いんですか」

「いゝえ、そんなのぢやア有りませんよ」

「と、天刑病?」

「可愛さうに、そんなのでも有りませんよ」

「ぢやア新平民?」

「穢多だッて人間に變りは有りませんわ。今時そんな事は故障に立ちませんよ」

「はてね……」

「決してそんな不用心なのでは無いから、其方は安心して、まア持つて御覽なさいよ」

「たッて氣になるなア」

「そんなに氣に成るなら云ひますが、あの人は、妾達の方ぢやア、符牒が附いて居ますよ」
「へえ、符牒？」
「お桂さんとは誰も云はなくッて‥‥」
「何んと呼びます」
「煙よ」
「煙!!!」
「おほゝゝ、全く煙見たやうな人で、何時の間にか消えて了つて、捕へどこが無いから困るのですよ」
「へえ――」
「煙とは誰が言出したか、全く然うなんだから可笑くッてねえ」

*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*

聞いて見ると全く煙のやうな人で、何等の理由無しに何處へやら走つて了うのが癖なので、氣の分らなさは不思議としてある女ださうだ。
隨分立派な家へも行き、好い人を良人にも持つたのださうだが、不意と其所から出て了つて、又他へ行く。それが目的も何も說明が出來ぬ程朦朧として居るのであるから、益々人は「煙」あつかひにして、居るのだか、居ないのだか、生きてるのか、死んでるのか、誰も後には相關しない樣になつて居るの

といふ。

それも初めからでは無い、此所五六年前に、火葬場の煙突から煙の出るのを見てからだといふ事。

知らず其時、誰を燒いたのであらうか。

* * * * * *

結局自分は、銀の雀を透爐で燒殺しただけで濟んだが、若し煙を妻にして直ぐと其儘消えられたら、自分も亦、精神上の燒死を免れ得なかつたかも知れぬ。

今、其煙、何處を迷うて居るてあらうか。

（完）

新體 短詩

吉野臥城

寄薄田泣菫歌五首

一

大沼の沼東の家の冬ごもり、
御集讀めば、窓近う
ささやき過ぐる鷦鷯かな。

二

鷦鷯、汝は戀少女、洛外の
ひとの玉戸を敲きては、
永久の生命を詩に得てける。

三

天つ女の清御酒に醉ひ息吹きゆく
　まぼろし小鳥影さすに、
　黄薇の詩人なに思ふらむか。

四

磐城野の野守となりて冬日南、
　鶺鴒聞き、日雀聞き、
　歌をおもふに愁ある今日。

五

籾殼と化りけむ納屋の鶺鴒、
　來鳴くに昔思ふ子と
　語らふ君に海の日ぬくき。

○

層雲にまばゆ金流の幾條や
　朝日はらむに、霜めぐる
　小黑低山いまだ目醒めぬ。

○

薜茘に春雨靑き谷の家、
　鶯きくになぐさみて、
　歌と共棲む幸ある身かな。

○

薄照やみ墓のやうに靜なる
　草家眞晝の北の庭、
　小百合碎けぬ。——美少女失せぬ。

○

化鳥啼き天華常降る香の海や、
　不朽にながれゆく舟に
　君と語りぬ、歌思ふ君と。

○

霜寒き乗合舟に、呉の猿と
　越の兎とよりそひて、
　寒さわぶるに人も笑みぬる。

○

星落ちぬ。——虚空をすべる一瞬に、
　美し光明夜を照し、
　聖さびては山に隱れぬ。

○
名香を兜に炷きて出陣の、
花のますら男見送りて、
もの思ふ戸に鳴くほととぎす。

○
金簪の戛と落ちたる床上の
霎時の響かへりみて、
玉歩を移すひとに照る灯や。

○
高樓を下りて池塘の草を踏む
うまし少女や、わかうどや、
紫にほふ星の春の夜。

○
枯木立朝日時雨の岡の家、
ひとに別れて外に立ちて、
傘するかたに虹あらはれぬ。

○
詩人よ、汝が鋼鐵の筆とりて、
「後世の爲政者條へよ」と、
自由の歌を壁に鐫らずや。

○
高歌して君を送らむ「男の子住む
邦に男の子は住むべし」と、
男の子の中の君を送らむ。

○
瞑想の一夜勤功に苦しみぬ、
故里の秋寒うして、
長城の卒いくひと還る。

○
ゆく秋や十八樓の暮の雨、
涙もよほすかりがねに、
遠人戀ふる身は痩せにける。

○
人に別れ、野末草家の秋守りて、
ふるさと戀ふる放浪の
我には鳴くな、鶉よ、雁よ。

歌

尾上柴舟選

○ 村田愛美

夕磯に西の聖歌をうたひつゝ黄金汐くむ美き子のみみよ
光喚ぶと森の深闇さとゆりて塔を斜めに啼くほとゝぎす
君がみ手に捲かれ捲かれし彩糸にぬはれむ幸と集まゐらする
うち伏して地に泣く子のさびし手をとりて立たせむ一人もあらば
加茂川や扇ながしゝ夕より京の美き子が歌わすられぬ
磯守が今宵とすさぶ笛の音に興えて踊る月の夜小舞
暮れの鐘ひくうひゞきて磯村の五月につめたう降る秋の雨
み手とりて一夜小百合の香に酔はゞ露と消ゆとも否まぬ子なり
詩に會せず秀才むなしく石といだき春をすてたる若き歌人
道とへは笑みてもかへす鄙言葉秋田少女はうたに興あり

○ 若麻績春風

うたて吾れ盗みて流る水夫戀ひて寒潮に髮すく少女となりぬ
白鳥の群れて飛ぶごとあさあけの空を流るゝ初秋の雲
木枯の夜を古鐘のからなりや魔女がのろひの聲あぐること
よべの夢に思ひそゞろの朝の窓花づたゆりて窺ふよ鳥
たゞ一つのころ砧の音さびて月夜ふけたり秋の長安
星の雨寒潮にくづるゝ氷山に花とふりつむ極北の夜や

○ 春の泉

潮風のしろう流るゝ旗鹿月の鋭きに船栗の花ちる
詩人の小笛に森の霧晴れて目白なくなり樅の朝日に
野狐が火ともすころを草わくる旅笠白う吹く秋の風

○ 吉岡夕舟

望郷のなみだおさへて關離せば雲となりけり北陸道は
山住や松のこぼれ葉まゐらせぬ君よ散せと賞する我は

○ 富ゝ尾美雲

山の宿夜寒のまくら鼠來てころがして行く薬瓶かな
髮あせて枕掩ふなる亂髪をかきあぐる御手さても細れる

○ 西宮白鶴

城跡や魚澄む濠の秋の水芦間をくゞる名鳥もさびしう
枯芦にふと見し僧の後影現世の罪をしばし忘れぬ

○ 芝野花

いひ知らぬ遠き國より尋れ來し節とも友ともきくや鐘の音
木も石も泣くかとばかり木枯は地の戸ゆりてははてなき國へ
思出のよき日もあれと一年の日記くりかへす歎のうちに

○ 小谷寒鶴

さびしみの思胸にはつゝまれず捨てむと迷ふ霧こき大路
目をあげて行方みまもるしらはとの翼のかげに雲の流るゝ
のこりなく黄金のもろ葉地にふるひたかくも空にたつ銀杏かな

○ 岡田道一

柳蔭女によくも似たるよとからかはれつゝ泣きにし我れよ
春の日や朱諸の小鼓うつ人に群がりて飛ぶ夢さめし蝶
黒馬に實をつみしぬすびとが山へとかへる木枯月夜

福引

繞石選

福引の福を渡すや屏風ごし 三餘
花與座に福引の品並べけり 同
福引や品々仁義禮智信 同
福引の水引とけば空の箱 同
福引の品うづたかき机かな 掬水
福引の愚かな顔に並びけり 五遷
福引の品を畑に掘りにけり さん子
福引を酒宴の席に致しけり 葩人
小さき子の福引を待つ骨牌かな 四緑
福引の机の上や鉢の梅 信一
福引の幹事に何もなかりけり 老泉
福引のこれからと座の賑ひぬ 紫殘

福引いて且見る素人手品哉 木鳥子
福引や次郎は常におどけたる 如牛
三方に福引捧げ渡しけり 無絃
福引やもて餘したる竹箒 鳳梧桐
福引やよき人はよき品を得つ 愛峰
能の面福に引く人舞ひ出てよ 珀雲
福引や圖の長文字何も無き 同
福引いてなぶられ氣味や獨もの 石羊生
福引や番號を讀む髭男 同
福引の籤を見合ふや女同志 青龍
福引や手品遣の身振なる 同
福引の一人出されて唱歌かな 華子
福引のつけ髭顔につけさする 同
隠藝せよと福引あたりけり 華水
福引の貧乏籤利やふつて見る 同
福引に迷亭舌を弄しけり 碧子
福引も俳句に因む句會哉 同
福引に客引く春の夜店かな 同

新年雜詠

松の葉に懸鯛はゆる灯かな　蝶
嫁が君李白の反古をひきに艶　同
酒置いて木屑も句へ手斧始　同
殿上の春來る帷かゝげけり　同
草の戸や春を迎ふる梅の軸　同
煑こぼるゝ雜煑に旭出てにけり　同
餅花や雜煑の湯氣の立のぼる　同
入り代り雪踏み消すや門の春　同
流れ來し唐土舟も明けの春　同
隱れたる名譽の家の破魔矢かな　同

二月分課題　東風　正月十五日限
三月分課題　芹　二月十五日限
●應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事
本誌前號
煤掃いて樓に上れば川ひろき
を取消す

▲歌募集●　毎月十五日〆切
東京小石川原町一三三　尾上柴舟宛



清國留學生取締問題

Xy生

文部省は卅八年十一月二日の省令を以て清國留學生取締規則を發表したるに、凡そ一ヶ月餘の後、清國學生反抗運動を始め、此の省令を撤回するに非ずんば學生一同袂を聯ねて歸國すべしといひ、一時は殆んど制す可らざる勢ひありしが如し。

此の運動が恰かも帝國大學の諸教授の同盟罷工的紛擾を起しつゝありし時なるに徴すれば、陰暗の間或る煽動者ありし乎、然らずんば文部省の威力の輕さを見

て侮り起てるものなりと解すべきに似たり、果して然らば彼等紛擾の動機や嗤ふに堪えたり、隨つて其の結果の竟に一世の物笑ひに終るべきと素より當然のみ。

彼等留學生は曰く、我等既に日本の法律に從ひ、日本學校の規定に則りて留學す、別に法令を設けて我等を束縛する理由無し、我等を束縛するは則ち我等の體面を汚辱する也、而して延きて大清國の體面を損するものなりと、然れども記せよ、日本の國家は特別の法令を設けて特種の學生を取締る權利を有す、文部省が如何なる法令を定めたりとも、彼等留學生は之を遵奉すべし、然らずんば速かに去るべし、大清國及び其の學生の體面を汚損すといふが如きは實に不通の論のみ要は文部省令の彼等留學生に及ぼすべき事實上の利害如何と顧みるに在り。

彼等留學生の第一に不便とする所は、入學の際日本在留清國公館の承認保證を得ざる可らずとする點に在り、然れども清廷及び各省の總督巡撫等が選拔し派遣する留學生に在ては毫末も之を不便とすべき事實あらず、唯だ清國政府の目を掠むる所謂革命派のものにして、始めて之を不便とすべきのみ、其の本國より物色せらるゝ革命派(若くは非政府派)の學生が公館の承認保證を得んと實際容易ならざれば也、故に革命主義者が此の箇條に反對するは理に於て聞えたるも、清廷若くは總督巡撫等の派遣したる多數の學生及び鄕貫明白なる紳縉富豪の學生が相率ゐて此の法令に反抗するに至ては、殆んど解す可らざる也。

彼等の第二に不便とする所は、學校に於て彼等の寄宿すべき下宿等を取締るにあり、彼等にして若し下宿屋に在て放縱度なく、酒を飲み色を漁し、風を紊り俗を亂して憚かり耻づる所なくば、下宿に於て學校の監督を受くると實に不便なるべし、然れども彼等假令方正恪勤ならず、單に普通學生の態度を取るも、斯の如き監督を受けて何の差支ありや、差支あるは彼等の放縱に乘じて暴利を利せんとする下宿屋、又は學生に有るまじき放縱淫佚を恣にせんとする彼等のみ、彼等記せずや、東京に於て信用ある學校は、其の生徒の下宿

に在るに對して多くの制限を設け、若くば全く下宿に在ることを禁ずるを。

第三に他の學校に於て性行不良なるがため退學を命ぜられたるものに入學を禁止されしとも、亦彼等の不便として反抗する一理由なりといふ、驚くべし彼等の無恥にして而して放縦なるや、凡そ不良として甲學校を退學せしめらるゝ程のもの如何ぞ乙學校に入るを得んや此の制限に反對する彼等は、到る處放縦にして退學せられ、甲乙丙丁戊癸の諸學校を轉じ廻りて、一種の學校ゴロツキたらんとする乎、苟くも學生として常識を有するものに到底公言し得ざる所を公言する彼等の心事の卑しき、實に言語に絶せりと謂べし。

彼等又曰く、我等一人毎歳平均四百圓を費消す、今我等一万餘人悉く歸國せば、日本は少くも四百餘万圓の利益を喪ふべしと、彼等は斯く放言して以て省令の撤廢を求めんとす、唯だ利を惟れ主とする清人の卑しき根性は、此の放言に於て遺憾なく暴露せらる、吾人日本國人は實に鼻を蔽ふて走らざるを得ず。

敢て彼等の總てといはざるも、彼等の或る者が近時酒色に惑溺し、到る處俗を壞り風を紊りて清人特有の一種醜汚なる氣を迸散するは事實にして、吾人の常に顰蹙する所也、且つ彼等の或る者は能く日本語を話し巧みに日本憲法の條章を讀むと雖も、其の意義に至ては多く解する所あらず、彼等の理解力の鈍き殆んど吾人意料の外にあり、斯の如き學生を招來するも、抑も幾許か清國の文明に資益するや、吾人の祖先は唐宋以來久しく彼等の祖國より文化を輸入したり、此の恩誼決して忘る可らず、世界人道のため、清國の文化のためには、今日吾人の有する學問技藝を以て、彼等を啓發することは吾人素より之を望むも、彼等の放縦にして風を紊り俗を壞す、固陋自から矜持し唯だ多衆の團結を恃んで日本の官府を侮蔑するが如き、斷じて寛容し得ざるのみ。

若し夫れ文部省が此の省令を發表したる動機に至ては、吾人大に異議あり、清國政府及び各州の總督巡撫等は改革派の日本に集まらんことを怖れ、日本政府と密

約して改革派の學生を入れしめざらんと欲し、日本政府亦彼れの意を迎へて之を肯へり、文部省令は乃ち其の結果なりといふ、我が政府が清國政府者の意を迎へ益々留學生を招來して其の文化の發達を助けんとする志必らずしも非なりとす可らず、然れども國事犯者を引渡さゞると國際上の通義たる以上、我が政府に於て清國政府者の意に反する學生を特に拘束するは妙ならず、寧ろ之を不問に措くべし、自由を愛し專制を憎むの極、革命派の志士に同情を寄するもの素より民間に之あらん、然れども我が政府は清國政府者に偏せざると共に、また革命派にも偏す可らず、唯だ學問技術を修めんとするものは、汎く招來して自由に其の智を研ぎ術を修めしむべし、學問技術は政府の專有に非ず、一國の獨占すべきものに非ざれば也。



謠ひもの、文章につきて

逍遙

巣林子が中年以後の諸作は、主として竹本浄瑠璃といふ一種の樂劇の臺本にとて作られたるものなれども、浄瑠璃樂は尙さすがに扇拍子の餘風を留めて、語ると稱すべき部分多く、謠ふと名づくべき部分は少ければ節は如何さまにも附し得べく、とりわけ義太夫出世の頃は創始期のならひとて、未だ是れといふ窮屈なる先例も格律もなく、隨つて文句も曲節も一體に伸縮自在なりし氣味あり、門左衞門が如何さまに書流しても義太夫ばかりは之れに面白く節附して語り得たりといふ

逸話の傳はれるを以ても其の一證とすべし、されば明かに一種の謠ひものゝ臺本にはあれど、巣林子が筆づかひは尙まさかに籠の鳥の曲藝の如くにもあらねば四疊半内の薙刀さばきのやうてもなし、是れ近松硏究などゝ大招牌を懸けてお互ひに大ぶ大つぴらな批評鑑定にとりかゝりながら、音樂方面を一切留守にしても、萬ざら木で鼻くゝるやうな結果ともならですむ所以なるべし、併しながら苟も樂劇の臺本なるからには、其の文致にも脚色にも特別の用意あるべき筈なれば、之れを單に讀みものとのみ見做しての批評は尠くとも三分がたの脱落なりといはざるべからず

試に文致の上をいはんに、總じて謠ひものゝ文章は半以上技工より成らねばならぬ筈のものなり、蓋し讀みものならば語の意味を第一にして必しも聲調を重んぜざるも可なり、熟讀數回の後に會得せらるゝやうなる含糊晦澁の句が却りて妙なることもあり、字面の珍らしく見た目に面白き文句また頗る佳し、とりわけ我が國の如く漢字と和訓と兩樣共に同時に用ふることを得る場合には外國に例のなき奇なる修辭上の現象を見ることもあり、例へば近來の新體詩に散見する「妙想」又は「理想」と書きて「オモヒ」と傍訓し、「現象」を「アラハレ」、運命を「サダメ」、狂瀾を「ナミ」、佳人を「ヲミナ」、これらは目に見る所を介添にして文字外の意味をも加へんとするの例なり、若し耳にのみ聽かんには或は全く解すべからざることもあるべく、或は感銘の甚だ茫漠として薄弱なるべき筈のものなり、按ふに傍訓と漢字との間に著しき内容の懸隔あるは讀みものとしても一種の弱點にして、譬へば目はじき、鼻白粉の厚化粧によりて美人と化し得たりと自信するにひとしき自欺又は卑怯の一例に外ならざることとなるが、殊に謠ひものゝ文致としては殆ど絶對に非なり、否不利といふべし、何となれば謠ひものは耳の直覺に訴ふることを第一義とす、其の語は其の聲調其物に於て内容の符號たるに堪ふるものならざるべからず、聽くと同時に何等かの感銘を生じ得るたぐひのものならざるべからず、かくいふは必しも平易明晰ならざれば不可なり

との意にはあらず、まして淺薄なれ、通俗なれとの謂ひにはあらず、朦朧可なり、縹緲可なり、漢語も可なり、梵語も可なり、廢語も可なり、造語も可なり、或は外國語の盛んにまじへ用ひらるゝも不可ならぬことあるべし、但し其の內容の感銘は（おぼろげなるは妨げざれど）聽くと其のまゝ直覺にて得らるゝやうならざるべからず、如何に字面は美しとも、聽いた當座に耳に粗く又は澁り、又は突當り、又は要なきにざらめき、がらめきて聞ゆるは非なり、漢語のやゝ見慣れざるは目には美しけれどア行よりもイ行、母聲よりも子聲に富むならひなれば、兎角耳に快からぬが多し、「彩雲」よりも「綺雲」の方見た目には珍しけれど聽いては妙ならず。或は「柔肌」「花顏」などの訓じて美しく音讀して何の美もなき、或は「渾金璞玉」「山紫水明」などいふ語の耳には何の興をも感ぜしめざる、皆同理なり、さればとていつも〳〵、する〳〵、べら〳〵、めら〳〵、とろ〳〵と万葉式、祝詞風、古事記風に只管雅び言の葉にのみ片荷づりて滑かに流麗にといふにはあらず、短音にして促節、佶屈聱牙なるべき場合もあり、跌宕にして奔放、磊々落々たらざるべからざる場合もあり、山を覆し海を逆さまにするが如き語勢を要することもあり、電光の如く轉じ旋風の如く回らでは叶はざる句取もあるべし、要は每に直覺に訴ふるにあり須からく彼の器樂が一の人語無うして尙能く情を傳ふるとあるが如くすべきなり、試に我が謠曲又は俗曲の詞章を撿せよ、其の大半は詩としては殆ど言ふに足らず甚しきは支離滅裂語をなさざるものあり、されば其の詞意に泥みて詩趣を尋ねんとすれば茫漫として何の得る所も無きに拘らず、耳にて味へば、其の參差錯落として斷續する聲調のうちに語義以外の緩急あり、弛張あり、昂低あり、濃淡あり、明暗あり、浮沈あり、榮枯あり、哀歡あるを感じ、讀むと聽くとの同一ならざるを覺ゆることあり、いふまでもなく字も意も聲調も三つながら妙なるを得ば最も妙なり、然れども何れか一を擇ばざるべからざるに當つては謠ひものとしては調のシムボリカルなるをこそ取るべきなれ

次に言ふべきは律格なり、律格（ミーター）とは七五又は五七などと音數によりて句格を定むることを指す、外國のは我が國のに比して此の點甚だ究屈なり、韻は踏むもあり踏まぬもありて、言はゞ自由なれど、苟も詩と呼び歌と名づくるものに（稀有の例外は別として）何等かの律格の或程度まで備はらざるはなし、又支那詩に謂ふ平仄やうの格式の存せざることは絶えて無し、謠ひものに至りても同樣なり、これは外國の語は我が國のと違ひて比較的子聲に終るもの多かると同時に、發音の抑揚弛張の一段著鋭なる傾きあるが爲の故に迚も我が國の語の如くに臨機應變に歌ひ伸し、歌ひ縮むるの自由なければ、隨て豫め一語々々の音量（クオンチチー）を擇び定めて律呂を整ふることを力めざれば節奏を面白く物する能はざるなどの理由もあるべし、いづれにもせよ外國のは大概究屈に、機械的に、律格を豫定し、或はアイヤムバスの五歩にて通じ、或はヒロイック、カプレット一點張、或はトロキー、或はバラッド體、或は十四行體と音數（シラブル）を限り、歩數（フート）を限り、解（スタンザ）を限り、或は相並べて或は隔行に韵を押し、又は解毎に、釣合を取る、謠ひものゝ方面はよくも知らねど、大體に於ては同理なるが如く、其の捨言葉（リフレイン）などの配りかたなども我が國のに比すれば何となくきまり過ぎて機械的なる氣味あり、整然、秩然などゝ褒むることは出來れども、不即不離の（彼の俗曲中に發見するが如き）突拍子もなき面白味は先づ見當らず、これは彼方の國語の性質にも由るべく固有の好尙にも由るべく、數千年來の藝術上の因襲にも由るべく、强ひて是非すべきことにはあらねど、以て東西趣味性を異にすることだけは察するに堪へたり

然るに近來、一は新體詩家が頻りに西詩の律格を模するに原由し、二は機械的に音數を限りて語を排列することの比較的成し易き措辭法なるが爲にや、長篇の謠ひもの（劇詩の體をなせるもの）を綴る人々さへ、好んで西洋の體式を模し、相ひきゐて七五調、五七調、八六調などを用ふることゝなれり、中には七五、五七を錯綜し、又は五五、七五を轉換するなどの例も見えたれど、要するに西詩の顰に倣へるもの、其の錯綜法や

其の轉換法や、我が國在來の謠ひもの、例へば謠曲、淨瑠璃、長唄などに見るが如き不即不離式のものにはあらずして、飽迄も均齊的(シムメトリカル)、律呂的(リズミカル)、機械的(メカニカル)なり、蓋し、二者の相異なるは兵士の歩調の常人の歩調と異なるが如く、西洋風の花園(ガーデン)と日本の庭との異なるが如し、これ一つは西洋風の樂譜にて歌はせんの下心よりかく綴り做せるにもあるべけれど、予は此の點に聊か疑問あり、他無し、平仄なくアクセントなき國語の性質上より見て、此一律格主義、此の機械的錯綜主義は長篇の(謠ひものとしても疑問なれど)讀みもの丶形式に適すべきや否やといふことなり、謠ひものとしたる場合には隨分譜の附けかた次第にて變化も波瀾も生ずべけれど、讀みものとしては兎もすれば下手な馬琴調、更に下りては浪花節調、阿房陀羅調に類し、自然單調子に流るゝことを避けがたく、勢ひ目の助けを借りて無理に句讀を拵へ、態と短く千切々々(ちぎれちぎれ)に句を排列し、夥しく餘白を剩して見た目の上、想像の上に强ひて餘韻を生ぜしむるやうに工夫するが如き不便を醸さゞるや否や、アクセントの取合選擇、四聲の配合、律歩(フート)の整理、韻(ライム)の踏みかた、此等諸種の制約を一擧に行ひ而も辭は巧妙に詩趣は饒多なればこそ有りがたけれ、我が國語の如き伸縮如意の飴式の國語を、七五と限り、五七と限りて只行儀よく並べたればとて、そこに何の技工かあるべき、そこに何の手柄かあるべき、むしろ謠曲又は俗曲の丶如く不即不離の間に意味內容に伴うて調べを整へ自然の波瀾を作りいだすをこそ技巧としては一段難く、成功したる場合には一段面白きものと稱すべきにあらざるや、現に海音と門左衞門とを比べ、古き河東、長唄の詞章と近年出來る俗曲の詞章とを比べ見よ、七五に泥みて綴りたるもの丶如きは讀むにも甚だ不妙なるの理忽ちに認め得らるゝにあらずや、曲としても七五調一點張の新作長唄などが、辭の意味には何の關係もなく、强ひて句をきざみ、合の手を挿みて辛うじて曲節に波瀾を作らんとする原因は恐らく此の非音樂的なる點に存するにはあらずや、嘗て或立三味線に聽く、「曰はく學者方の御演說だつても唄にせ

よ、手を附けろとおつしやれば隨分手も附き節も附きます」と、如何にも節は附くべし、手も附くべし、只演說者自身が傳へんと欲する思想感情のシムボルたるやうに節や手を附け得るや否やは疑問なり、內容も急、語勢も急、節調も急、意も緩、辭も緩、曲も緩といふやうならては眞の樂歌とはいひがたし、況んや樂劇の曲白たることをや、止むを得ずば辭の意味は或は無意義に近くてもありぬべし、聽いたる上が其の感想らしくだに聞えなば、或は破格の辭、語を成さぬ漢語の挿まるをも妨げざることあるべし、特り感想のシムボルたらぬ句に至りては謠ひものとしては落第なり、僅かに節附によりて物となる如き詞章を作るものあらば、それらは眞に詞壇の下司なり、物貰ひにも比ぶべし、彼方にてオペラの脚本(リブレトー)を綴る者を卑むはかゝる理合あればならんか、さらぬ場合には樂劇の脚本を綴ること其の事が必しも卑しかるべくもなし、希臘古劇の例などを想ふべし

想ふに、我が謠ひものゝ調律は、音數やアクセントの數を一定するによりて整ふるよりも、句作り、語呂、乃至おのづからなる頭脚韻、間韻、緣語、掛言葉等によりて調ふべきものにあらざるや、こは調の上の便宜のみにあらず、我が謠ひものゝ第一義たる成るべく簡約といふ資質を得る上に必要なるが如し、此等の舊修辭法を棄てゝ、單に七五、五七、八六、五五などゝ音數をのみ限りたる場合にも簡勁の致は得がたきにあらねど、簡約ならんとすれば、兎角單調に陷る傾きあり、名詞どめ、其の他副詞、形容詞どめの五月蠅く同じ調子に重複することあるなど妙ならず、尤も、西洋式の樂譜を附する場合は全く別なりと知るべし

右に謂ふ成るべく簡約にといふこと我が謠ひものゝ一條件たる所以は、聲を永うして謠ふ上より生ずる必要なり、これは時としては同意義の而も單純なる思想感情を少しく語と調とを換へたるのみにて反覆して謠ふことゝ矛盾せず、蓋し感銘を切ならしむる要あれば常の文章よりもはるかに冗漫に書綴る場合もあるなり、されど只事を敍し、筋を運び、物を狀し、景を寫すにと

どまるやうの場合は、語は成るべく簡に、意は成るべく奇警ならまほしきならひなり、讀みものならば十行二十字にも綴りて可なる場合に五行六行以上を容しがたきこと間々あり、これも西洋風の旋律を附する場合とならば緩みを生ずるかも知れねど、謠曲式、長唄式なる以上は、此の點が新思想、新脚色を行る上の一大障碍なり、とりわけ長唄式は新體詩式とは殆ど枘鑿なり、彼の謠曲式の詞章に長唄の曲節を附したるもの丶後者の純粹なるものに比して妙ならざるも此の理による、謠曲文と長唄の詞章と脉を異にするも同根の理に原くなり

此等の理由によりて謠ひもの丶詞章は全く讀みものとは手心を異にす、殊に科介を伴はしめ、舞ひ又は踊らしむる必要ある場合の詞章は、更に格段の用意なかるべからず、抽象的の句、活動の意、具體的の語に乏しき句、散文的の句、テニハ多き句などには面白き振を附しがたきを通例とす、之れを要するに西洋風に律格を定め音數を限りて謠ひものを綴ることは（內容と巧拙とは別として）尤も容易なり、小學兒童とても之れを爲し得べし、我が謠ひもの丶如く手心專一なる（形ばかりだにも）頗る綴りにくし、學者、文章家の作りたる俗曲の詞章と無學なる狂言作者のとを比べて其の句拍子の上の優劣を見よ、思ひ半に過ぎぬべし、調子だけの上をいはゞ、まだしも淨瑠璃は摸し易し、語りものなればなり、謠曲文に至りては一段難く、長唄、清元などの句拍子面白きものに至りては更に難し、蓋し謠曲の詞致は、根が朗讀體の文章より出でしものなれば、其の調比較的摸し易きなり、俗曲の句拍子に至つては、俚謠、俗歌の曲より生れ、セヽクリセッチヨしたるものなれば學びにくきなり

以上謠ひもの丶文章の尋常一樣の修辭法を以て律すべからざる所以の一斑を說きたり、其の劇としての結構、脚色の上にも同樣の用意あること勿論なり、こは折を得て別に說くべし

乙巳文壇を送て丙午文壇を迎ふ

楞陰生

（一）

乙巳文壇は將に吾人を背にして去らんとし、丙午文壇は將に吾人に面向けて來らんとす。去るものは袖を捉ふるも振切て去るべく、來るものは麾かざるも小躍りして來るべし。故に吾人は事物の去來に就て甚しく心勞するの必要なきも、而かもこゝに暫らく過渡の橋上に立て靜かに去るものゝ姿を眺め、徐ろに來るものゝ相を窺ふも必ずしも無用にあらざらん乎。

そも乙巳文壇を概觀すれば、吾人は恰かも黒雲の裏已に一道の光明の閃々として眼を射るが如きを感ぜずんばあらず。蓋し戰爭は如何なる時代に於ても暫らく國民の精神的活動を壓迫す。殊に征露の戰役は前古未曾有の大事業、我國力の全部を傾注するも尚足らざるを憂ひたるもの決して鮮なきにあらざるなり。是れ實に我思想界殊に我文學界の頭上を壓迫する暗々たる黒雲にも譬ひつべし。然るに驚くべきかな、我國民の精神的活動力の强大なる、恰かも赫灼として天に懸かれる大日輪の如く、此暗々たる黒雲の壓迫に際しても尚且つ、雲隙を求めて其閃々たる光輝を放ちたるにあらずや。而して彼の講和條約の締結は實に此黒雲をして飛散せしむべき疾風の吹き初めなりき。疾風にして一度吹けば假令暫らくは雲行の混亂を見るも、久しからずして靑天碧空の壯觀を仰ぐを得べし。彼の講和締結後に於ける國民の騷擾の如き、大觀すれば畢竟雲の去るべき所に去り、流るべき所に流るゝまでの混亂に外ならざりしなり。かくして乙巳の年終るまでに黒雲飛んで白雲收り、纖雲影を潛めて微雲姿を滅し、丙午の年開くると共に天空將に一塵を住めざる淸澄の碧、透徹の靑に歸せんとす。黒雲の斷隙を求めてさへ閃々として輝きし我國民の精神的活動は、是時に當て如何に赫灼として燃え、如何に燦爛として輝くべきぞ。之を思へば如何に冷靜ならんとするも漫ろに神往の情禁ずべからざるものあるなり。

有體にいへば吾人は近來文壇に目を閉ぢて暫らく他の方面の研究を企てたるもの、只年來の嗜好制するに由なく、學餘僅かに文學的著作を閲讀したるに過ぎず。此貧少なる智識を以て文壇のことを云々せんと欲す。勢ひ所謂專門的批評家の如くあらゆる作家とあらゆる作物に向て精細なる批評を下すこと能はざるを惜む。然れども思ふ所あれば即ち隱せずしていひ、信ずる所あれば即ち憚らずして論ずるは吾人の性僻なり。故に吾人顧慮する所なくして所信を述べん。若し譏るに僭越を以てする人あるも、甘んじて之を受けんのみ。

（二）

乙巳の文壇に於て最も目覺しき活動をなせる人は誰ぞと問はゞ吾人直ちに夏目漱石氏なりと答へんと欲す。英文學者として一部の人士にのみ

知られたりし氏が、一躍して全國の文壇に其名聲を馳せたるもの、實に乙巳の文壇と共に初まる。「吾輩は猫である」のユーモアに富みて兼て江戸的趣味に饒かなる、「倫敦塔」の其境窈冥にして其文の蒼古なる、「幻影の盾」の着想斬新にして描寫奔放を極めたる、「琴のそら音」の心理的解剖の精細にして緊切なる、「一夜」の飄逸にして俳味溢るゝが如くなる、「薤露行」の簡勁にして詩趣横溢せる、皆獨り乙巳文壇の白眉たるのみならず、實に我明治文壇未曾有の珍什たり。氏に與ふるに乙巳文壇の桂冠を以てせんと欲する、必ずしも吾人の嗜好に偏したるを譏るものなかるべき乎。

次に吾人は乙巳文壇の注目すべき現象として、木下尚江氏の小説の歡迎せらるゝに至りたる事實を舉げんと欲す。木下氏は昨三十七年「火の柱」を著して初めて小説家の名を得たるもの、續いて「良人の自白」三册を公けにして皆共に多數の熱心なる愛讀者を得たり。而して「良人の自白」中下の二篇は實に乙巳文壇の産兒なり。吾人は木下氏の小説に於て幾多の幼稚なる點を認め、又餘りに主義主張をあらはさんとするの結果、往々寫實的ならずして理想的に流れ、具體的ならずして抽象的に陷り、從て所謂露骨にして自然の肉附の如何にも貧少に見ゆることあるに慊らずと雖も、其眞摯なる主張と其熱烈なる所信とは屢々讀者の胸中に一片の靈火を燃やすに足れるを偉とす。氏の小説が歡迎せらるゝに至りたるは即ち社會が無意味なる作物に厭いて、文學に人生の意義を求めんとするを證するもの、吾人はかゝる傾向を以て決して輕視すべからざる現象となすなり。

又次に注目すべきは德田秋聲氏、田口掬汀氏、生田葵山氏等の作家が漸次に頭角を擡げて我小説界の中原に濶歩せんとするに至りたること等なるべし。

讀者或は評て曰はん。汝のいふ所必ずしも異議を挾まざるべし。但し所謂第一流の作家について何のいふ所なきは何ぞやと。げに讀者の叱責や尤もなり。露伴氏の雄偉博大なる思想と文藻、逍遙氏の世に先じて世を導く識見、柳浪氏の描いて生命あり、寫して活躍する天才的手腕、天外氏の精粗繁簡宜しきを得たる寫實的技術と人心の機微に觸れたる詩人的洞觀、鏡花氏の凄艷にして幽怪なる詩境、風葉氏の暢達にして晦澁なき筆力、春葉氏の淡々として而かも詩趣豐かなる文致、春雨氏の清新にして宗教的なる情操、水蔭氏の濶達にして趣味ある叙述、皆是れ一時の選にして漫りに他人の追從を許さず、而して諸氏は乙巳の文壇に於ても各皆獨特の手腕を揮はれたるが如きも、而かも吾人の見たる所に於ては殊に諸氏既得の名聲をして一段の高處に登らしむべき佳作名什を出されざるが如し。備はれるを君子に求む。吾人が敢て以上の諸氏を説かざる所以なり。

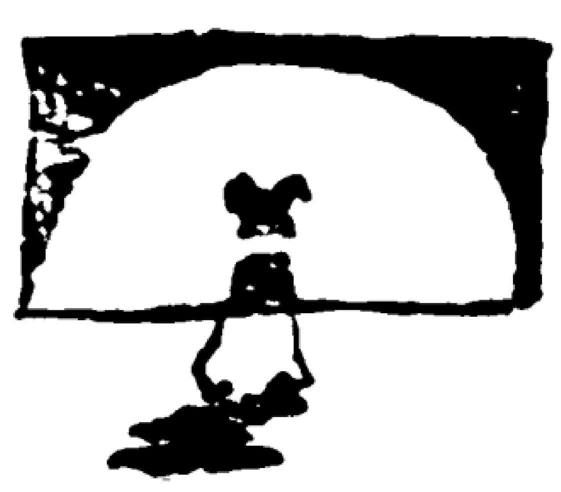
（三）

吾人の見たる乙巳の文壇や略、前述の如し。顧て丙午文壇の前途如何と見れば、吾人は實に多大の希望の湧き來るを覺えずんばあらず。蓋し明治文學の歴史は進歩發達の歴史なり。年毎に進歩し、年毎に發達し、

未だ一度も退歩萎縮したるの事實あることなし。而して中に就きて最も跳躍的進歩をなしたる年を求むれば、吾人は二十七八年の日清戰役に次て起れる二十八九年の文壇を指すに躊躇せず。活力あるものは必ず彈力あり。進歩的膨脹的活力の充溢せる我國民が、壓抑を蒙れる毎に之に相當する反撥的活動力を發現するもの、理數より當然なるべし。かるが故に日清戰役よりも更に大いなる日露戰役の壓抑を蒙りたる我國民は今後更に二十八九年よりも大いなる反撥的活動力を發揮すべきは毫も疑ひなしと信ず。吾人窃かに思ふ、來るべき丙午文壇は、進歩といふよりも寧ろ跳躍といふべく、跳躍といふよりも寧ろ飛揚ともいふべき大活動をなし、明治未曾有の文運隆盛を實現すべきことを。吾人が第一流の作家として擧げたる諸氏は各皆其蘊蓄を傾けて獨特の長技を發揚し、丙午文壇をして文學史上不朽の名を鐫刻せしめんとすべく、吾人又必ず然らんことを希望して止まざるなり。

且つや夏目氏は更に花々しき作物を公にして益々文壇に活動する計畫ありと傳へ、久しく信州の山中に蟄はず鳴かざりし島崎藤村氏は六百頁に近き「破戒」の出版と共に再び文壇に打て出てんとすといひ、「黒潮」第一巻の出版以來杳として音なかりし德富芦花氏は其時代思潮を邪破したる識見と、其博大深厚なる同情と、其含蓄多く詩趣豐かなる筆致とを以て「黒潮」第二篇の稿を繼ぎたる外、他の作物にも指を染むべしといひ、暫らく西歐に遊んで斯道の研鑽一層精細を加へたる島村抱月氏は「早稲田文學」を再興して其椽大の筆を揮はるべきを傳ふ。見來れば明け放れゆく東の空、朝暾已に山頂を離れんとして滿天爲めに紅を潮せる好日和に於て、幸多き旅路の門出をなさん時の心地にも似たりや。乞ふ吾人讀者と共にこゝに乙巳の文壇を送て丙午の文壇を迎へんかな。

（十二月十七日稿）



人物月旦

漫評

醉美生

秋山定輔氏

帝國大學からあーいふ種違ひのアーリアンが出たのは珍らしいと思ふ。彼の初戀は新聞であつた。大學を出てから暫時會計檢査院の奏任官をやつたのであるが其當時から新聞をやりたがつたのだ。で最初は金も大部集るといふ譯で「二六」を起したのであるが、何にせ經驗もなかつたことであるから、とう〳〵つぶ

れて了つた。夫れから三四年の間資金を集るに全力を盡して奔走し、何うかして坂本金彌などを引き出して今の「二六」を起した。何んでも十二三万をかけた相てある。「世間は二六が成効したといふが十二三万を費しては成効でない、世間に對して赧顏の次第だ」とは彼自ら知人に語つた所である。

彼の人物は如何といふに、世人は彼を評して、義俠家にして感情一方で、如何なる危險の場合にも飛込む人物—即ち親分氣質の人物であるといふが、これは正鵠を得て居るまいと思ふ。成程彼には義俠的の所もあり、又親分的の所もあらう、が然しよく考へて見ると彼は頭の尖から爪の尖まで智惠で出來て居る男である。若し彼に勇氣があれば其れは智惠から出た勇氣で、若し彼に義俠があれば是れ亦智惠から出た義俠であらうと思ふ。

彼の長所は多くの人をして己れを信ぜしめ、己れに信賴せしむるにある。即ち又人を鼓舞作興せしめて、兎に角己れの勢力を作るといふ點に於ては殆ど天才といふべきである。少年にして高科に登るは一の不幸なりといふ語があるが彼の半生を見來れば漫ろに此語の眞理があらはるゝやうに思ふ。新聞は彼の初陣であるが、彼は此初陣に於て三井を相手にして戰闘を開き、首尾よく三井をして降參せしめた。伊藤井上等が仲裁に入つてやつと事が落着したのである。世間では此時彼が大いに金を取つたといふが、是れ彼の功名心を知らぬもの丶言で、新聞は彼の目的であつたので、彼は金などには動かされたのではない。彼は筆と富との力を比べて、實に筆の力の富のそれに勝るものなるを示したのである。彼は實に之を以て得々として居たのであるが、後來の彼の失敗は多く此最初の勝利に基くことゝ思ふ。何となれば此時以來彼は恐嚇して金を取つたといふ流言に取り捲かれ、此流言は彼の新聞の勢力を嫉妬するものに利用せられ、又は三井派の下流ものが其敗北を蔽ふが爲めに暗に金を取られたかの如く言ひ振らしたが爲めに、世間は彼を以て全く恐嚇取財したものと信じ、是れが第一の彼の疵となつたから

ある。

第二の彼の缺點は己れの勢力を過信して、世の中のことは何でも一條繩で搦め取ることが出來るものと誤解した所にあると思ふ。虎の如き猛獸でさへ其蹠には護謨のやうな柔かきものを備へて固きものを踏んだ時の用意と音なくして敵に近くの注意はある。然るに彼は三井にすら戰て勝たのであるから、世の中の總てのものは攻めて落し得べしと思ひ込んで了つて、向ふ見ずに突進することを敢てした。彼が岩谷天狗に喰てかゝり、政友會破壞の陰謀に加はり、進歩黨中傷の運動にも與かつた。けれども何の効能もなく、得た所は徒らに多數の怨みを買ふたに過ぎぬ。彼此して敵の新聞の勢力が增加すると共に漸く如何がはしき記者も入り込み、其三面を利用して人を嚇かすやうなものも出て來た。

彼は實に智惠者であるが、然し人物を鑑識することに於ては甚だ間違がある。故にさういふ如何がはしき社員をも信じ、且つ一方に於ては長田秋濤などゝいふ輕薄兒のお取り捲きに合うて之を信じて一所に遊んだ。元來長田秋濤などは金を出して藝者遊びでもさして吳れさへすれば何人の機嫌でもとる幇間的の男であるのを、其れを信じて一所に遊んだりしたのは全く彼の人物を鑑識する力なきに歸せざるを得ぬ。而して同時に彼は其目的とする新聞の勢力といふことのみを見て人を見ない、其結果は屢々社員に對しても冷熱の情があつて、新舊の社員互に怨を抱くといふことがある。てあるからして彼は世間のみならず、又社中に於ても怨みの中心となつた。所て今度は警視廳と戰端を開き、到頭露探といふ惡言を以て攻擊せられた。此時に當て從來彼の攻擊に對して怨を抱いて居た連中は一時に露探といふ聲を助けて、終に大打擊を彼に蒙らしめたのてある。要するに彼は土耳古人が劍を揮て基督敎國の異中て土耳古を討つた樣のもので、社會に對しては何等の仁義道德なく只劍一本て押通さうとしたのだ。故に其劍の刃の切味が少しく薄くなる時は即ち四方から彼の取捲かるゝ時である。て彼の運命は全く彼の三井

征服の時に定まつたものと思ふ。

勿論彼は其新聞のやり方、又は世に處する方法を幾分が變更しやうとの考のない男でもない。が今迄集めて來た且つ使つて來た子分は彼以上に其勢力を過信し、從來の方針て以て天下の總てを相手として戰ひ得るものと思ふて何時も赤い旗を掲げて居る。て今日に至ては彼と雖も如何ともする能はざる、所謂騎虎の勢てある。要するに彼は子分を養うて勢力を得、子分の爲めに勢力を失ふたというても宜しい。故に或意味に於ては彼は星亭と同じ徑路を歩くものてある。

然しながら彼は功名心に富んて、つまらぬことなどはせぬ（勿論露探などする男てない）有爲な男てあるから、前途必ず生き返つて再び世に活動するてあらうと信じて居る。

曰く錄

黑眼子

△坪内博士曰く（一）夏目君はユーモリストとして日本に一人の人てす、昔からユーモリストはあつた事はあつたが、昔職人風の戯作者てゝゼントルマンリーのユーモリストてなかつた、夏目君は日本に初めてのユーモリストと云つて可い、外に比すべき人がないが、マア英國のアヂソンと云ふ處だらうれ、併し俳味即ち江戸趣味のある處はアヂソンと異なつて居る

△坪内博士（二）（予翻譯は絶對に不可能なものてせうかと問ふ）曰く、絶對に不可能とも云へまいが、兎に角難事てすな、サウてす、散文ならば翻譯しても原文に左程劣らぬものゝ出來るものもあらうが、韻文ては翻譯は絶對に不可能と云つても差支ありますまい、上田君の海潮音も讀みました、其中の二ツ三ツは原詩と對照して見たが、よく譯されて居ます、併し困るのは全然言語が異つて居るのだから原詩の韻致といふものを譯し出すことは出來ない、行は成程十四行なら十四行と定めてあるが、それは只形の上て十四行になつて居るのみて、音の上ては、十音のものが十五音二十音となつて居る、詩の翻譯の不可能なのは、意味を譯すことが不可能なのてはなく、その韻致を譯出することが出來ないのてす、而も詩の生命は寧ろ意味の上よりも韻致にあるのてす、日本の詩が西洋文て譯されぬと同じく、西洋の詩も日本の言語ては譯すことは出來ぬ、たとへは英語のButといふ字は一音てす、それを日本て譯すと、さりながら、しかはいへどの如く五音六音となる、極つゝめて、されど、さはれ位の短さにしか譯せぬ、先づ日本のがといふのがButに相當する音てせう、それだから迚も詩の翻譯は出來るものてはありませんな

△坪内博士(三)　それからまた六ヶ敷のは脚本の翻譯でせう、沙翁を譯すのでも、何故(なぜ)こゝの處は散文調になつて居るか、何故こゝには韻が踏んであるか、皆一々劇に上ぼす上に於て理由のある事ながら、それが劇に精通した人でないと解らぬ、呼吸が解らないのです、默阿彌などの作は、此呼吸を呑み込んで居るから讀んでは旨いとも思へぬが、舞臺に上ぼすと間の拔けた處がない、サア／＼／＼と懸る言葉が自然にサア／＼／＼と出るやうに出來て居る、劇の心得のない人の作つたのでは舞臺に間が拔けてサア／＼／＼と出るのが木に竹をついだやうになつて了ふ、だから劇に通じない人が脚本を翻譯すれば、文章は如何によくても脚本としての價値はなくなつて了ひませう。散文だつていざ翻譯しやうとなると容易ではない、たとへば、日本で云へば元祿時代の作であるべき西洋のものを、古文調で譯しては可けないし、優雅なものを漢文調で譯してもをかしい、しかし多くは何も關はずにやつて居るらしいが、二葉亭だの魯庵だのといふ人はさすがに西洋のものをよく味つて筆をとるから、そんな不仕鱈な譯はしないやうですね、此人達はもう手に入つたものだから

△坪内博士(四)　西洋は凡て理窟と規則で固めて居る、希臘の昔から理窟で押し通して居る、東洋は何事も手ごゝろで行く、オルガンなぞは一週間も稽古すれば可なりに彈ける、規則で行くのだから入り易い、日本の三味線と來たらどうだ、一ト月や二タ月では音も出はしない、譜もなければ規則もない、皆手ごゝろ一つて行くのだから中々六ヶ敷い、文學ても哲學ても何んても東洋と西洋とはこの相違がある、東洋の哲學は倫理て、昔から西洋のやうな哲學はなかつた、老子なども矢張り倫理を説いたものです、處が西洋でも此頃の學風が大に東洋的になつて來たやうだ、即ち大分手ごゝろ的になつて來た、どちらにしても究竟は同じことなのだから。

△江見水蔭氏曰く　文學者は數學が皆下手だ、そして而も下手で可いといふが、あれは間違つて居ますね、數學は文學には大に必要があるのです、たとへて見れば一の小説を作つても、此主人公の性格は恁うで、その境遇は恁うだ、そして斯ういふ事件に遭遇して居るとすれば此人は、如何いふ徑路をとるか、如何いふ行爲をするか、全く數學の式と同じ事です、若し此主人公が其性格に反した行爲をしたならば、それはミステーキがあるのだから、そのミステーキを説明して置かねばならぬ、數學が出來ないから私は文學者にならうと思ひますといつて來る學生がありますが、私は其度に叱るのです、私も暇さへあれば數學も研究したいと思つてるのです

△登張竹風氏曰く　現在姦通してるものもある、男女學生の野合してるのもある、泥棒をしてる奴もある、人を殺してる奴もある、これらは此世の中にある事ではないか、これを材として小説を書いたからといつて其小説が淫靡な文學であるとは云へまいぢやないか、道徳とはそも／＼何ものぞやだね、昨日是とする處今日非とする處となり、人を殺すのも善てあつた時代もあつたのだ、文學はそんな道德に服從する義務はない、

萬世不易な文字さ、社會をありのまゝに寫して趣味あらしめば可い、現在姦通してるものがあるからそれを描寫する、唯挑發的に書きさへしなければ差支はない筈だ、鏡花の風流線にお妻が浴後(ゆあがり)に眠つて居るところを描寫して居る、五太夫ならぬ吾輩でもその姿を見れば情がうごくさ、しかし何も惡感は覺えない、まことにいゝ心持に讀むれ、讀んで居てもあり〳〵とあの光景が見えるぢやないか

△紅葉祭に於て和田垣博士曰く　私は紅葉山人と喧嘩をした事がムいます、今より四年ばかり前、先生とある處で快談した、前に置酒高樓のなんのといふ洒落れたのではなかつたのです、それが佳い月の夜でした、興に乘じて私が下手な話をうたいました、すると紅葉君が直ぐに筆をとつて

　明月や此うたひなば玉にきづ

とやりました、そこで私も筆を取つて、前の句を忘れましたが、明月やてはなかつたと思ひます

　〇〇や此うたひをばきづに玉

と、鸚鵡返しにやつたのでムいます、イヤ是は喧嘩ではなくて、返歌でムいました

△泉鏡花氏曰く　私は小說を書くのに、別に自分で此筋を拵らしやうの、あゝしやうのと考へません、まづお銀といふ女を出しますかれ、其時其女を一旦自分の方へ引取つて、自分のものにして、さて出して書かうとすると六ケしくて書けない、頭からお銀さんに任して了ひます、お銀さん賴むよと云つて筆を預けて女の行くまゝに放捨(うちやつ)て置きます、だから初めはお銀さんと他の男とくッ附けぬつもりでも、男の口說きやうが旨いと、つい落されて了ふかも知れません



下谷公園

名在つて實なき公園

二葉生

市內十八公園の內に於て、名在つて實なき公園は二ヶ所ある。一は下谷公園にして一は綠町公園である。之れを公園として記するも、張合(はりあひ)の無き感じがするけれど、公園として存在するからは、假令名實相反するとも記せざるを得ない。殊に此の下谷公園の如きは、甚だしい惡風俗が蔓(はびこ)つて、一萬六千四百三十二坪の園內は、宛然バチルスの製造所であると云ふを憚からない。啻に園內のみでなく、其黴菌を含んだ空氣が附近を吹きまくり、下劣な淫靡な俗と化して居る。この下劣、この淫靡が

下谷公園を組織する生命、それも表面に公園らしき見懸にてもあり、而して裏面に屈蟠する醜態ならば、大負に負て置くにしても、公園として見る可きもの一もなきに徒に公園と稱し、公園扱ひをするは不埒至極と云はねばならぬ。是れをしも公園と云れるならば、芝の新網も公園である、四谷の鮫ヶ橋も公園である、麻布の谷町も下谷の山伏町も、皆立派な公園と云ふことが出來る。東京市の不面目もまた大ならずやだ。

理窟は暫らく拔きにして、此處の歴史を調べると、舊佐竹家の邸地であつた處から、俗に佐竹ッ原と稱し、園内を二十四に區劃されて、二十餘年前は草茫々たる火除地の如くなつて居たを、其後開拓して種々の興行小屋を懸け、熱閙の地と變じた末に、明治廿三年四月公園地に編入されたのである。それ等の興行物も數年にして跡を絕ち、只だ一筋の道路に馬肉屋あり、寄席あり、古着屋あり、八百屋あり、魚屋あり、雜貨店あり、旅宿ある市街を爲す外、公園の七分通りは棟割長屋の汚穢なる家屋ばかり、其汚穢なる家屋中に、最も恐るべき黴菌の製造所があるのだ。其黴菌製造所たるものは、場所が場所だけあつて、下層勞働界に少なからぬ注射を施行して居る。其施行が附近一般の女性に墮落の教訓を與へつゝあるのである。

風俗と人氣

風俗と云つた處で、支那や朝鮮へでも往つたやうに變つて居るのではない、只だ貧民窟の狀態を備へて、園内の人物九分までは甚だ野卑疎暴である。それも其筈であるのだ、住居するものゝ多くは、土方、人力車夫、紙屑買、辻藝人、按摩、縁日商人、馬丁等の類を以て滿されて居るので、到底眞面目な人間が住居して居られる處でない。商店の如きも矢張り正直と勉强を以て立たうとすると、十中の八九までは不成功に終らねばならぬ。故に郷に入つては郷に從へて、單に安直と云ふ事を、專らとすれば、賣る物品に多少の曰くありとて、夫れを彼れ是れと苦情を云はない。まア昔の柳原物と一口に言ひし商品であると合點すれば、決して腹の立つことは無いのだ。現に角牛肉店が一軒もなくて、馬肉店の看板を揭げて、客を引き寄せつゝある表懸りの見苦しからぬ店が二軒もあるので、其邊の消息は稍や察し得られるだらうと思ふ。

男子既に斯くの如してある。それに伴ふ處の女子は如何、是れ又尋常一樣のものゝ同住し得られる處でなく、男子は我家の亭主も隣家の亭主も、お向ふの亭主も殆んど同胞の如く親密!、其親密は無遠慮を生じて往々面を掩はしめる事がある。而して其女子は何れも男勝りならざるなく、勞働もする代り喧嘩もする中々の豪傑揃ひ、斯かる内にも幾分か白粉の香あつて、稍や蒲柳の質を帶ぶるものは、何者?。アゝ憐れなる女性かな、將來は鼻の夏座敷とならずとも、顏色憔悴して生命を犧牲に迄供してノックラ然たるバチルスの塒窩である。墮落の教師である。是等の教師が直接間接の訓導は、惹いて稍や眞面目な女性に波及し、普通商家の娘の如きも少しく生意氣盛りとなると、自ら其渦中に投ぜんとする姿あるは、猶更に憐れである。

男女の風俗以上の如くであるから、土地の人氣も甚た惡限せざるもの

多く、一般に賭博の流行最も盛んだ、蓋し賭博の盛んなるは、畢竟破落漢が多くあぶれ者が多いからで、從つて人氣の荒ッぽいには驚く。それが只だ魚川岸などの荒ッぽいのとは譯が違ひ、喧嘩を吹き掛けても、對手より金錢を卷き揚げんとする惡弊が甚だしいのである。

寄席の聽衆

寄席は二軒ありて、一は義太夫を專とし、一は浪花節を以て殆んど定席とする。が、土地の人氣は前述の如くであるから、其聽衆に至つても亦た甚だ下劣である。剰へ蹂躪であつて、眞面目なものゝ共に娛樂を同うすることは出來ぬ。動もすれば蜜柑の皮を投げ、團子の喰さしを擲とし、甚しきに至つては態と茶をこぼして、喧嘩を求めんとするのだ。若し若き婦人連などにて行かん乎、愈々惡戯を擅にし罵詈を放つて揶揄し、猶ほ應ぜざる時は茶を打掛けるなど其暴狀驚くべき所業である。斯かる事を席亭が制止せざるを不注意と告むるものもあらんが席亭が之れを告めるに於ては彼等は得たりと益々猛り、其本領を發揮して唯一の目的たる强請を敢てせんとするから、見て見ぬ振りに濟さゞるを得ない。强て制止すれば所謂犬糞的復讐をされる、彼等が徒黨して復讐するときは、其損害の莫大なる上に、手拍と稱して酒食の費用を負擔させられる恐れがあるのである。

故に聽衆の、下谷公園の寄席へ往くものは多く彼等と同じ趣味を持ち彼等と同じ素行を爲すもので、女性と雖ども、亦彼等社會に接近し、彼等と共に馬肉屋へ上り、彼等と共に旅人宿へ出入するものにあらねば、到底娛樂を共にする事は出來ぬ。見よ！一度此の公園の寄席に入りて、其聽衆の大部分が爲しつゝある所業を、恐らくは吃驚仰天せざらんと欲するも得べけんやであるのだ。て、義太夫ならば女義夫、落語家ならば下卑たる落語、否らざれば浪花節なられば、聽衆を滿足せしむるは難い。依つて以て其風俗の如何を確めるに足る。

附近の下等魔所

公園の風俗が如上であるから、公園及び其附近には、一層この公園の風規を攪亂する所が多いも自然の勢である。斯くの如き事實を餘にするは好まない、此の淸潔なる紙を汚すも快くない、けれども社會に存在して害毒を流し、而も何等の制裁をも加へられず、公然と營業しつゝあるを見ては、默して止むべきでないから、其事實を明かに示して取締を嚴重にして貰ひ度が企望である。直に嚴重な取締を實施さるるときは、彼等營業者の爲めに、奈落へ突き落されて居る、最も憐むべき幾多の人間を救濟する事も出來、從つて附近の風俗も幾分か改良し得られるであらうと信ずる老婆心からである。

其の魔なる家は、多く二階家であつて、稍や寂寞たる薄暗き處にある。公園外に在つては多く路次内などの家に其營業者は潜み、自己の家に一人或は二人の妖怪變化を飼ひ。以て營業をするものもあれば、又營業者自から監督となつて各自に運動させ、豫て契約しある怪しき家へ伴ひ往かすもある。

怪しき家とは、如何なる構造の家であるか、演劇で見る相馬内裏の如

く猫が紋の手拭を被つて踊つてても居るかと思へば、案に相違して、表面ては小商ひをして居るとか、按腹の看板を掲げ居るとか、種々な營業をして居るが多く、大抵は裏口から窃々(こそ／＼)と忍び込ませて、二階又は奥座敷等を、一夜に二十五錢以上三十錢までに賃貸するのだ。自己の二階を以て技術練習所とするものは、其賃借費は要せぬから利益もそれだけあるが、自宅に練習所を設くは萬一の時に不利益でもあり、且つ注意を早く惹く恐れもあるので、大抵は自家よりも一間を他の家に於て貸借するを便利として居るもの丶如く見える自家を以て練習所に充てつ丶あるものは、園内に三戸は確かに在る、園外には約七八戸はあらうとの事である。園の内外を問はず自家に練習所を設く營業者は、非常の幅を利かす所謂それ者の顔役であつて、技術者を虐使する事も又甚しいのである。實にそれ等に虐使さる丶技術者は、慘然と謂はんか、殘酷と謂はんか、社會に不幸兒多しと雖も之れ程不幸なる女性はあるまじと思はる丶のだ。虐待も是に至れば唯だ呆然たるより外なしである。其殘忍酷薄の狀は肉を刻み骨を舐り、猫の鼠を喰ふに異ならざる趣きがある。で、此間の消息を深く審くは能ざる處、審けば深い／＼恐しい不愉快を與へるまでだ。

一種の監禁

素より無慈悲は彼等の狀態である、苟且にも白い齒を見せたならば、營業者の命令を用ひぬが技術者の恒例であるが、斯くまで無慈悲の極を盡すとは驚嘆の外なのだ。技術者必ずしも善人のみでなく、酢でも蒟蒻でも始末にならぬ者も多い、けれども斯くの如き大莫連は案外にも、氣業て比較的ではあるが好遇を受けて居る。眞迹ならずして惡漢の罠に罹り、是非なく彼等の鞭撻が苦しさに墮落した、憐む可きものが却つて虐待を受ける、何故に物は左樣逆樣(こうさかさま)であるかを疑はざるを得ない。憐むべき彼の技術者の多くは、田舍よりポット出を惡漢に誘拐されて、奈落の底に沈み居るのだから、若し閑隙を得たら逃走せんとするは人情である其逃走は彼等營業者の甚だ恐る丶處であらば、技術者をして逃走せしめざる方法を講じ、虐待に虐待を重れ、其虐待は不法監禁となる。

監禁するに如何なる手段を採る乎、實に甚だしい手段である。田舍者即ちポット出の女を何れよりか伴ひ來たると、先づ二階へ上げて下より梯子を引き、下りる事能はざらしめ、所用ある毎に營業者の許可を得て梯子を懸けて貰ふのである。是のみならば猶ほ忍ぶことが出來るとしても、若し窓より逃走される恐れがあると鑑定する時は、有無を言はせず裸體にして煎餅蒲團一枚を與へるのみ、ア丶何んと云ふ無殘である。單身飛出し來るには何れ事情はあるにしても、遠く故郷を離れ一人の知己もなく、父母兄弟姉妹の消息も知らず、斯る處に監禁され、斯る境涯に身を置く女の胸中は何うであらう、泣んとしても泣く能はざる苦痛、忍ばんとしても忍ぶ能はざる暗涙に咽びつ丶あるのである。剩さへ客を強ひられて、生命までも彼等營業者の爲めに屠られんとする。

斯くの如き憐むべき女は、營業者に抵抗するだけの器械なく、涙を呑んで其食欲を満して居るから、騷ぎを惹起す事もないが、彼等の社會に於て何某と知らる丶程の女になると、營業者と衝突の結果、矢張り二階

へ投り揚げられ、煎餅蒲團一枚を被る事がある。此様技術者になると、毎日毎夜歌を唄ひ、蒲團にくるまりたる儘にて二階の窓より顔を出し、巡査を認めて呼込んとするゆゑ、營業者も注意を怠らず甚だしきは、縛して動さぬもありと云ふ事である。それ等は再び自己の家に於て使用するに難いので、同業者へ讓り渡すことがある、其方法の如きは甚だ奇で、凡そ一ヶ月の稼高を見積り、讓受人より讓渡人に其稼高の一割を與へるさうだ。

何故に取締が不完全？

此公園及び附近に於ける取締は、何故に斯うも不完全であるか、恰も無警察の有様であるか、之れ最も研究すべき問題であつて、將來の注意を要する處であるのだ。其點に就ては實に不思議と云はねばならぬ、警察や警視が、決して治外法權で知らぬ顏の半兵衛さんを極めて居るのではあるまい。此邊の風俗上には尤も深く注意して居るらしい、が、何うしてか夫が行屆かない、返す〴〵も不思議と言はねばならぬ。

或人は斯う謂つた。此土地は由來破落漢の多い處であるから、○○等が其破落漢を○○にするので、或る一方に於て非常の便利を與へられて、自己の惡を乾干にしないで、○○を繼續して居られるのである。で、取締を嚴重にすればとて、放蕩息子に慈母の意見と同じことて、取締々々と嚴しく叫ぶ聲は、破落漢どもの低頭して居る頭の上を、スッ〳〵と越して了つて、何處へか飛で行方が知れなくなるのだと、是等は實に想像の甚だしい説であつて、三十餘年前の事なら知らぬが、今日然る不思議な現象があらうとも思はれぬのである。

然れば何故に取締が付ぬのであらう、此附近に於ける風規の紊亂は甚だしいのに、公然と營業者が大手を振つて横行して居るのに、醜業技術者が往來の通行人を捉へ、得々として怪しげなる家へ引摺り込むのに、夫れが其筋の目に注ぬと云ふは不思議である。目に注いたならば打捨て置くべき筈はない、さうして見ると矢張り目に注かぬのか知らん、目に注かないとすると誠に頼み難いものである。斯う云ふやうに考へて來ると、何が何やら更に分らなく成つて、或人の説が信じられるやうな氣もする、併し我が警察が其様に不信用でもあるまい。で、彼等が巧妙な働きを持つて出沒自在の振舞をするからでもあらうが、兎に角此附近の取締は殆んどゼロである。殊に九月五日の騷擾以來は、甚だしいものと成つて、彼等の横行は全く公然で、只さへ不取締な公園が、羅輪懸けて不取締と成り果てた。

府下の公園中に於て最も不愉快なる公園にして、最も見苦しき此公園を、益々醜の醜たらしめて居るは、歎はしき限りである。若しも公園の名を存するならば、假令表面だけにても公園らしく爲さしむべく否らざれば、公園の名稱を删除しなければ、東京市の面目に關するではないか。



戀のきゝかき

小室白也

唯見る雲間一痕の月だ！

桓根の此方、棕梠の木の植込みは、折しも月も明かなろに、熱帶の趣がある！と、例の薄髯の、南洋通の男なら云ふのだけれど、今夜のお客は、色の黒い、其男ではなく、庇髪と云ふ、妙な髪に結つた、然しお容貌は、甚だ妙でない、承れば女學校の先生だとか云ふ、女客だから、此棕梠の木から演繹して、黒奴が蛇を捕る話には至らぬが、曲尺のやうに、桓根が曲つた、丁度其角の處に、寒むさうな柳の木、其葉は既に散り去つて敢て紅葉に名をも止めず、井戸の此方の梅ばかりは、一年に二度の譽れやなどゝ云はれたが、何ァに羨むにも當らぬ、秋の風は公平に、どれもこれも吹き落して、弓張月、其枝々を弓弦のやうに響かす、星は、寒く冴えて、棕梠の葉の音は淋しいのに、何を觀じてか、今夜のお客は

「秋の風は破壞的なのね

て、今迄のお客の云はない事を云つた、すると主人も今迄に云つた事のない挨拶をした、

「破壞的は革命的です

「然し、革命には設立の力がなければ

と女客は、あちらを向いて、身軀をくにしてゐる、主人は煙草の煙を、長く吹いたが、其頤を撫でながら

「春の風に任せましやう

「其時には又花が咲くのね

と莞爾、此時は其お容貌、まんざらでない、とも見えた、

「然し又蛇も出ます
「蛇を喰ふ雉子も居ましやう
「其雉子は人間が喰ふ
主人は、其頭を廣うして、撫然たる者だ、
「其人間を誰が叱るでしよう
「お星樣かね
と主人ほくそ笑みをする、
女客は身をひそめて、寒さうに空を見たが
「又破壞の風が吹くの？
「設立の春風も吹く
「蛇を雉子がたべるですか
「歷史の車は回轉つて止まずぢや
「其力は何處から來ましやう
女客は薄假裝の顏を、月に對して襟を合せた、
「あのお月樣の兎の力と同じでしようか
「それを見て居る下界の人の力と同じでしよう
ちぎれ雲が西から東へ、さッと月をかすめて流れると
女は更に瞳をてらしたが、再び淸凉な、然し青白い光
を放つと、鳥渡男を顧みて、
「力の止む時は？
と頭を傾けて品を作る、
「戀の亡びる時でしやう
主人の顏に亦趣あり、
「其戀の味は
と云ひかけたが、女客は三味線の音の、發と止まつた
やうに、例ば鋭利な刀を振つて、横雉ぎに切り落した
やうに、其詞を半で止めて、何物にか撃たれたらしく
眼を見張つて、其顏と共に、くの字の身軀をしにした
が、初めには棕櫚の植込、柳も過ぎ梅も過ぎて、ひば
椿まで一と回り見廻して、最後に、桓根に近き五葉の
松の、葉末の玉に物思ふ風情である、
「星が下界に落ちては
主人は何も云はて、一々女の擧動に注意して、女の眼
に從つて、これも其庭をくるりと見たが、此時女と顏
を合せて、少しく笑む、
「あゝ云ふ露になるのでしようか

女は艶なるまでに身を崩して、斜に頭を、半面に月を受けず、ほゝ笑む歯のあらわに白い、
「枝を離れて地に落ちたら?
主人の言葉は沈痛であつた、
秋こそ物を思ふなりけり、女は暫時ためらつたが、九谷の美しい茶椀を上げて、手を伸して敷石の上に、二たり三たり雫を落すと、紫に緑に紅に、月に輝いてキラリとしたが、ほつ〳〵と落ちて薄黒う、はかなき影を印すのである、女は暫時物思ひ、
氣を替えて
「澤の螢になるでしよう
「其戀の味は
と、こたびは主人が云ひかけた、
「甘露……でなくば胡椒……
主人は何にも云はなかつた、女客は少しく急き込んで居る、
誰見る雲間一痕の月だ
此時再び余は然う感じた、

隣のむくが來た、何か云ひさうにしたから、默と眼で知らせたら、むくは默つて、余の傍に來て、こつそりと坐つた、むくはいつも、温かさうな衣物を着て居る、
秋風がさつと渡ると、ランプがホッと嘆息を漏した、嘆息を漏したのは、ランプばかりではない、此時女客も、此時主人も、共に其眉宇に、愁の皺を寄せて、心に何物をか追ひ求むるさまである、
主人は淋しさうに身を起して、坐敷の隅なる、炭入を持つて來た、と女は、其櫻炭の大なるを、二つばかり二人が間の火鉢に加へた、
「革命の風はさす樣に寒いて
「それを忘るゝ戀のほてりは
と女は少しく笑むのである
「溫まる熱の力より
と主人は伏傾いて、其火をポーと吹く、
襟を合せて、
「寒くなりましたな

女客は無言のまゝ、己が茶椀を引寄せて、湯わかしの湯を、注がうとしたが、既に、其冷たうなれるに驚いて、ホッと嘆息

「何故斯う冷め易いものでしやう

と、心ありげな言葉である、

月は徒らに冴えて、星さへ寒うきらめくに、寄せ手のやうに吹き來る秋風、桔槹のきしむのが、攻皷の音かと聞ゆる、西より東へ、長い尾を引いて星が流れた、

「其冷め易い戀の味は

主人は嚴然として臂を張つた

「もう云ふて下さるな

と女客は、え堪えざる風情に、袂を上げて面を掩ふた、

其風情、例ば風にゆらるゝ紫苑に似て、あはれとよりは淋しく、淋しとよりは凄涼である、

「鹽は砂糖より尊い、辛いからとて、恨んぢやなるまい

「其鹽もし味を失はゞ

と女の聲は糸より細い、

「然し

と叱呼一番して

「芥子は辛いもの、然し、これに熱湯を注げば、辛くなくなる、でしよう、ねえ、が、これに又一とつまみ、新に芥子を混ぜ合せると、再びもとの辛いものとなる、ねえ不思議でしよう、不思議に似て、敢て不思議ぢやない、

主人は、說破餘す處なしと、自ら其名論に感動したらしく、膝頭を立てゝ、貧乏ゆすりをしながら、得意の頤を廣ふしたのである、

女は濟まぬ顔、唯低首れて羽織の紐を弄ぶ、

と見て主人、この名論に服さぬとは、心外千萬とでも思つたか

「一とつまみの芥子は、辛くなくなつた多くの芥子を辛くするではありませんか、味を失つた鹽だからとて、元の鹽にもなりさうなもの

と更に注釋的に、說き去つて、其膝頭の間へ、頤を割

り込んで、鸚鵡のやうな姿で、女の顔をのぞき込んだ、

此時其女、細くして滑らかな指に、紫の霞のやうに、ぼかして媚めかしい羽織の紐を、しづ心なく、弄んでゐたが、くるりと、指にからんで、ポンとはねた、風にゆらるゝ柳のやう、糸の亂の心は顏に、ふり起した眼元はほんのりと赤い、

「其一とつまみの芥子は、何樣が授けて下さるでしよう

と實なささうな言葉である

「其一とつまみ……………　何アに、たつた一つまみでよい

「たつた一とつまみ、其授けて下さる御方が、鬼であれ、魔であれ、妾は命の親とも思ふて、感謝して、受けますのに、若しそれが魔どころか、鬼どころか妾の敬愛して、夢にも忘れられない方が、不憫だと被仰て下さつたら、それこそ、それこそ、それを頂くと同時に、息を引き取りましても、妾しはどんなにかうれしいでせう

女の身で恥かしいとも思はず、これ程に思ひ切つて申上るのは、並大抵の事ではない、ほんによくせきな事と思つて下さいな、あなたは、たつた一とつまみと、さも易々と被仰るけれど、妾はその一とつまみで泣いてゐます

有る處にはありあまるが、無い處には、とは、お金錢の事ばかりぢやないわ

「僕……　僕は……　僕は貧乏ぢや

と主人は足元近く切り込まれて、しどろに受太刀になつて、見苦しきばかりにうろたゆる、大に話がこみ入つてきた

遊獵に出て、好い鹽梅に追ひ出した兎を、自分の術が下手なために、反つて他人にしとめられ、其歸り路に愚痴だら〳〵、百姓家へ押し込んで、其處に居る鷄を呉れろ……………とは隨分虫の好い奴だ……………

と隣のむくは呟いた

僕等の關する處ぢやない、唯見る雲間一痕の月だ

言下に應じて
そうだ〳〵と大に賛成して
唯見る雲間一痕の月だ
とむくも超然たり矣、

主人はあらぬ方に向つて、せわしく烟草の烟を吹く
女客は悄然として、床前の月光に對す、其顔蒼白にして、愁の雲長く、寒さに堪えてや、袖を合せて戰慄いた

、むくは默つて歸つて行つた

余は今主人と客との將來に就いて、何の想像をも要しない、且つ又、余は余の犬となるを、茲に記述するの必要を認めぬ、余を養ふ男は、余の主人にして、主人の客は余の尊敬すべきものである事を知るのみである、

猶茲に附記すべきは、主人は敢て好男子ではなく、身の丈けの短い、色は白いが、齒並みのわるい、鼻の高い割りに眼の小さい、寧ろ醜男子の方である事である。

新刊批評

▲伯爵夫人（前編）　田口掬汀著

萬朝報に連載せられて一部の讀者の歡迎を得た作である。掬汀氏は所謂家庭小説作者として已に一家を成せる人、此篇亦結構に變化あり、思想は健全にして家庭の讀み物としてよく出來て居る。僕の母や妹などは「金色夜叉」にも劣らぬ程面白いといふて居る。然しながら純文學的立場から見れば僕には感服出來ぬ所が少くない。第一事件其物によつて思想感情をあらはさんとせずして、豫め思想感情を定めて然る後事件を按配して行く氣味があるので、描寫が自然にあらずして人爲に流れ、往々理に落ちて居る。此點に於ては柳浪天外などの作とは殆ど比較にならぬ。第二文章は流石に場馴れた丈けあつて疵が少く、又流暢な所もあるが、要するにたゞ其れ丈けであつて少しも天才的の活躍し居る箇處がない。此點に於ては鏡花などの文とは到底同日に語られぬ。といふものゝ、氏を以てかゝる大家の長所にのみ比べるのは比べる僕の無理なのかも知れぬ掬汀氏の本領は寧ろ家庭の婦女子に高尚な娛樂と、健全な思想とを與へんとするにあるのだから、其方面から見ては確かに成効の作と思ふ。此編はたゞ前編のみであつて此末はどうなるか、新聞を讀まなかつた僕の知らぬ所であるから、完結の上に改めて細評を試みやうと思ふ。尙注目すべきは此書が著者の自費出版であることであつて、之れは今の書肆と作者の或關係を窺ふに足るべき現象と思ふ。（定價八十錢哲生）

▲露子夫人　草村北星著　隆文館發行

「濱子」「澄子」「相思怨」の著者草村北星の新作である。所謂家庭小

に多少反抗の態度をとつたものとも見らるべき作て、稍々深酷なる所がある。描寫には些か慊らぬ節がないでもないが、自由にして檢束なき所に見所がないでもない。吾人は先づ氏の作中の佳なるものと思ふ。(定價七十五錢)

▲亞米利加魂
ルーズベルト原著
成功雜誌社譯述

北米大統領ルーズベルト氏は確かに現代の一偉人である。獨り其行爲の偉とすべきものあるのみならず、其文章思想に於ても亦偉とすべきものがある。此書第一章純亞米利加氣質、第二章大學卒業者と公生涯、第三章亞米利加人の思想、第四章紐育機關政治の弊、第五章學生に對する訓戒、第六章丈夫的道德と實際的政策とに分ち附錄として米國大統領格言集を以てして居る。譯文は餘り褒める譯には行かぬが、意味が一通りわかるから英語の讀めぬ人には餘程有益な書である。(定價三十五錢)

▲人生の行路　第三
吉川潤二郎譯述
內外出版協會發行

ヘート氏の原著「路傍の富」を譯したもので、先きに吾人の讀者に推奬した第一、第二に續いて出版になつたものである。健全な平民的生活をせんと欲する人にはよい教訓である。(定價三十錢)

▲英語の手紙
片山寬著
內外出版協會發行

主として實用上の英語の手紙の書き方を敎へた本である。(定價二十五錢)

▲繪葉書(古郵便切手紀念郵便切手)
東京郵信館發行

この二種の繪葉書はいづれも總銀泥を地として我邦郵便制度の創めより使用されたる切手貳拾種を列れたるものと、紀念切手のみ八種を寫したるものとにして、石版着色十數度をかされ、其精巧一見實物と相違するところなし、外國用として最も適當なるものならん(貳枚壹組價金拾弐錢)

次號豫告

吾人素と淺學不才、世に向て何等の誇るべきものを有せず。然れどもただ眞摯誠實、以て健全なる思潮を紹介し、高尚なる趣味を皷吹せんとするは吾人年來の微志なり。今や江湖の先覺者、大家名士の我誌に玉稿を寄せらるゝもの月毎に增加し、從て愛讀者の數も昨年の今日に比して優に三倍以上殆と四倍に近き多數を有するに至りたるは、是れ全く吾人の微志に同情を表せらるゝの到す所なるを思ひ、益々駑駘に鞭て世の眷遇に酬ふる所あらんことを期す。次號の誌上に寄稿を依囑せる大家は

幸田露伴氏　福本日南氏
寺尾亨氏　福田德三氏
島村抱月氏　白鳥庫吉氏
堺枯川氏　內田魯庵氏
山路愛山氏　登張竹風氏
竹越與三郎氏　西澤之助氏

等にして蓋し**二月雜誌界**に於ける**一大偉觀**たるべきを疑はず。

此廣告により御注文の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

●洋服界の一進歩と米田屋卸賣店

米田屋支店は洋服界諸種の**便宜**と**一新面目**を**需用者各位**に報ずるの**光榮**を有す蓋に店主世の**風潮**に**鑑**み洋服裁縫業研究の爲め**歐米各國**を**漫遊**し觀近盛に彼國にて行はるゝ高等出來合洋服の法に倣ひ**品質柄行**の**撰擇**は勿論流行は時々の通信に基き最も發達せる分業法によりて**注意周到**遺憾なく調製仕り從來の誂品に比して毫も遜色なきのみならず**大**に**好評**を博し一度弊店に於て御購求の御方は其**裁縫**の**精密**なると**身體**に能く**適合**するとにより續々御紹介を賜はるに至りしは實に弊店の面目とする處に候爾來益々**工場**を**擴張**し如何なる御注文にも應ずべき樣準備仕候に付何卒御用向仰付被下度尚ほ**新着**の**珍柄**多數取揃へ置候へば御好に隨ひ**出來合直段**に準じ**廉價**に**新調**可仕候

冬の部

定價表

フロックコート三ツ揃	廿二圓ゟ	卅八圓迄
モーニングコート三ツ揃	十七圓ゟ	廿五圓迄
背廣三ツ揃	十一圓ゟ	廿三圓迄
オバーコート一枚	十圓ゟ	二十圓迄
インバネス一枚	九圓ゟ	二十圓迄
ロングコート一枚	十五圓ゟ	廿五圓迄
トンビ一枚	十三圓ゟ	廿八圓迄
吾妻コート一枚	十一圓ゟ	十六圓迄

但し高等出來合洋服は正札付現金にて一切懸引なし

●**地方**より御注文の御方は**洋服**の**種類**及び大凡の**價格**等御通知被下候得は完全なる**寸法離形**並に**地質見本**(但し郵劵十錢封入の事)送呈可仕候

嶄新**洋服廉價裁縫店**

東京神田小川町通雉子町卅二番地(電話本局一七九一)

米田屋支店

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新小說

振古未曾有の大捷を博し、一躍世界列強の伍班に入り隱然東洋の盟主となれる我が大帝國は茲に一大新紀元に入れりと云ふべし。此の新紀元の第一年、丙午の春を迎ふると共に本誌も亦この雄大なる新氣運に應ずるに足る大刷新大活動を以てせんとす。左に其の綱領を擧げて實行を期すべし。以て聊か讀者諸君平常の眷顧に酬ひんとす。

第拾壹年第壹卷 新年號 元旦發行

- 海異記（小說） 泉鏡花
- はきちがへ（脚本） 小栗風葉
- 文の便（小說） 柳川春葉
- ふさぎの虫（小說） 二葉亭主人
- 老村長（小說） 中村春雨
- 湯起請（小說） 山岸落葉
- 稅（小說） 幸田露伴

- 春駒（表紙石版極彩色） 河村清雄
- 海異記（口繪石版極彩色） 鰭崎英朋
- はきちがへ（繪葉書） 鏑木清方
- 文の便（繪端書） 鏑木清方
- 馬の內侍（木版極彩色大附錄） 梶田半古

懸賞當選小說……六編　懸賞當選小品文……數十章　懸賞當選新體詩……數十章　懸賞當選繪葉書文……數十章

實價　壹冊貳拾五錢郵稅貳錢五厘◎六冊前金郵稅共壹圓五拾九錢◎十二冊前金郵稅共三圓拾貳錢◎郵券代用一割增◎本號に限り郵稅參錢

●二月以後大刷新提要

一 **紙數增加**　紙數を從來より參拾壹頁を增加して參百拾貳頁とし記事の富贍に應ぜんとす。

一 **紙質改善**　紙質を一層改善し、挿畫及び本文の印刷に光彩を添へん。

一 **材料精選**　從來小說、歐洲文藝見聞、譯叢、雜錄、時文、海外文壇、文苑、社會、談叢、流行、時報の各欄には愈々材料を精選し趣味の饒多ならんを期す

一 **新設思潮欄**　特に新たに「思潮」「家庭」の二欄を設け、「思潮」欄には當代第一流の大家の文學、美術、宗教、教育、其他社會上の重大問題に關する研究と評論とを幷載し現代思潮の指針たらしむべし。

一 **新設家庭欄**　家庭欄には當時諸名流及び斯道の實驗に就き、家庭に關する有益多趣味なる講話を徵し家政、育兒、看護、栽縫、園藝等力めて實用に資するものを載す、勿論この以外にも涉るべし

一 **葉書文募集**　各種懸賞募集の外に「葉書文」の懸賞募集を爲し、選者は泉鏡花先生に委囑す。

一 **繪畫精選**　表紙、口繪、繪葉書、寫眞版等は一層精選して記事の豐富と相待ち錦上花を添ふるの美觀たらしめん。

以上

春陽堂主人敬白

發兌元　東京日本橋通四丁目角　春陽堂

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ホトトギス

表紙八度刷——中村不折

吾輩は猫である(七)及(八)——六十頁

九巻四號

定價參拾五錢——一月一日發行

野菊の墓(小説)左千夫——四十頁

色刷口繪三枚——頁數百六十頁

櫻冠は中央公論第二百號の紀念として生る

櫻冠

毎月一回初號二月一日發行

櫻冠は男女學生の筆を揮ふべき唯一の壇場なり

『櫻冠』は卷頭必らず文壇諸大家の趣味ある文話を掲載す

『櫻冠』は賞を懸けて實力ある秀才の詞文を募り公平なる選評を加へて尤も卓絶したるものを掲載すべし

『櫻冠』は光榮ある花冠を捧げ嶄然世上同種類の雜誌に超越す

内容 △論文△小説△小品文△新體詩（以上第一種）△和歌△俳句△川柳△へなぶり（以上第二種）

投稿規定 △第一種原稿紙（十行廿字詰）十枚以下△第二種一人二十句以下　期限締一月十五日切

懸賞（第一種）一等、五圓。二等、三圓。三等、一圓。四等、七拾五錢。五等、五拾錢（第二種）一等、二圓。二等、一圓。三等、七拾五錢。四等、五拾錢。五等、三十錢。以上受賞者四拾人

△賞金の送附は最も確實にして且つ迅速なり△定價一ヶ月金拾錢三ヶ月金廿九錢郵税共

發行所　東京市本郷區西片町十番地　反省社

此廣告によりて御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學士 戶澤姑射、淺野馮虛共譯

沙翁全集

◎第一卷 ハムレット　既刊 定價八十五錢
◎第二卷 ロメオ、ヂュリエット　三版 郵稅十錢
◎第三卷 ヴェニスの商人　既刊 定價八十錢 郵稅十錢
卅九年二月上旬發刊

沙翁全集は抄譯に非ず梗概に非ず忠實親切を旨とせる完全譯にして醜譯者は當代最も適任なりとの令聞ある二氏全部三十七卷數月每に一卷宛發刊の豫定なり發刊以來好評嘖々曰く此出版は眞摯大膽なる一大事業なり、大國民的文學產出の前提なり、譯述親切措辭流麗なり一夜漬の小說類と雜誌店に雜居せしむるは勿體なしと

谷本文學博士、登張文學士、序文
文學士片山正雄著

男女と天才

菊版三百五十頁　寫眞畫入美裝一冊　定價六十五錢　郵稅拾錢

本書は最近の科學及哲學上の諸原理を基とし男女の性の區別を論じて嶄新奇拔精嚴崇高を極めたる原理を數へ天才を以て徹頭徹尾理想の男子なりとし進て人生觀世界觀は到底二元論の外に出る能はざる所以を說き其之を貫くに雄大なる道念を以てしたり是實に天下の男性的男子をして意氣天に沖せしめ所謂厥殺及び㾺髮をして顏色土の如くならめし天下一切の女子教育をして砂上の樓閣とならしめ而も同時に一切の婦人をして破顏一笑恍として理想の仙鄉に遊ばしむる天下の奇書なり

三大倫理文學教育雜誌

丁酉倫理會
倫理講演集
●每月十五日發行

一冊價十二錢郵稅一錢○六冊前金郵稅共七十二錢○十二冊前金郵稅共壹圓參拾貳錢

現代倫理專攻名家を以て組織せる丁酉倫理會は我國學海の有力なる纜纜たるや言を俟たず從て同會に於て研鑽せし諸說は頓に現代の倫理問題に解決を與ふべき指針たるや明けし本集は之が機關として發行するもの若夫れ倫理界の消息に通ぜんには本集を措て他に求むべからず◎新年號（一月十五日發行）には井上、元良、村上、桑木、松本等諸博士朝永、小柳、吉田等諸學士の講說あり紙數增大且つ家族會の寫眞を口繪とせり

帝國文學
●每月十日發行

一冊定價金拾五錢郵稅一錢六冊前金郵稅共九拾錢十二冊前金郵稅共壹圓六拾五錢

帝國文學は明治廿八年一月文科大學に緣故ある諸氏の組織せられたる帝國文學會の編輯に係り主として日本文學の進步を誘ひ帝國精華の發揚を期するものなり其の載錄する所の論說は正大又謹嚴詞藻は艷麗且つ豐富雜錄は西人の詩想文致を紹介し文學史科は皆是れ正確雜報は眞を傳へて簡淨明快批評は公を持して痛切適確なり若し夫れ奔騰し來れる我文界の新潮流を知らんと欲する者は請ふ之を我帝國文學に徵せよ◎新年號一月十日發行には芳賀、谷本、金澤、上田等諸博士夏目、片山、尾上、戶川等諸學士其他の寄稿あり紙數增大寫眞版名畫（瑠の神）を口繪とす

教育研究
●每月一日發行

定價一冊廿錢郵稅一錢五厘六冊前金郵稅共一圓貳拾錢十二冊前金郵稅共貳圓參拾錢

帝國唯一の初等研究所にして帝國唯一の模範小學校たる東京高等師範學校附屬小學校に從事する諸氏は近來奇矯突飛の空論や雜駁亂脈の報道が種々我教育界を誤るを切憂せられ同志相謀りて玆に初等教育研究會を組織しライン氏が獨逸エナ大學に教授研究所に於て發表する練習所研究錄に則り著實穩健の有機的研究と醇正なる精細の教育的資料とを主として其他教育に關する萬般の事項を網羅せる機關雜誌を發表せらる本誌即是也世間の教育雜誌を悉皆讀まんよりは寧ろ一の本誌を精讀したる方遙に多くの趣味實物を併收すべきは弊社の堅く信じて疑はざる所なり◎新年號（一月一日發行）には特[illegible]改成し紙數增大せり

發兌　東京銀座壹丁目二十二　大日本圖書株式會社　大阪東區北久太郎町四丁目支社

▲定價改正

中央公論定價表		
一冊	前金拾五錢	郵税共
六冊	前金八拾五錢	
十二冊	前金壹圓六十五錢	

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵税六錢を要す

中央公論廣告料		
一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし

一郵劵代用の場合は必ず壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帯封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

都下大賣捌所

神田表神保町	東京堂
神田裏神保町	上田屋
京橋銀座四	東海堂
日本橋呉服町	北隆館
本郷四丁目	文明堂
本郷本富士町	盛春堂

明治三十八年十二月廿七日印刷
明治三十九年一月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衞門

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社（電話下谷九一九）

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●專賣特許空氣暖爐●

京都本願寺御用品

●本器は少量の炭火を以て空氣の作用に依り強勢なる溫熱を發し永く室內へ置くも火氣に「ノボセル」憂なく且つ一度炭を投入せば少しも手數を要せず十五時間以內始めより終りまで同樣の溫度を保つ

世界唯一の暖爐であります



特製壹個 **金六圓貳拾錢**

並製壹個 **金五圓四拾錢**

●荷造實費箱代壹個金四拾錢申受候

●說明書は御報次第送ります

製造發賣元
東京市淺草區諏訪町壹番地
（特電話下谷八三一番）
小原商店本店

關西發賣元
大阪市南區安堂寺町御堂筋
（特電話東四六二番）
小原商店支店